

スポーツ庁委託事業

令和5年度「障害者スポーツ推進プロジェクト(実態把握
が十分でない障害種の方のスポーツ実施に関する現状
把握調査)」

盲ろう者に関する調査

調査報告書

令和6年(2024年)3月

株式会社 NTT データ経営研究所

目次

第1章 はじめに.....	3
1.1 調査の目的.....	3
1.2 調査概要	4
1.3 有識者委員会の組成	5
1.4 盲ろう者とは	7
1.4.1 障害の発生順序	7
1.4.2 盲ろうの原因疾患.....	8
1.4.3 他障害の併発状況.....	9
1.4.4 盲ろう者の困難	9
第2章 盲ろう者の身体的・精神的特徴に関する調査	11
2.1 調査の目的と方法.....	11
2.2 調査結果	12
2.2.1 調査結果の整理方法	12
2.2.2 コミュニケーションに起因する特徴.....	13
2.2.3 身体的特徴.....	14
2.2.4 精神的特徴.....	15
2.3 調査結果のまとめと考察.....	16
2.3.1 調査結果のまとめ.....	16
2.3.2 考察.....	17
第3章 アンケート調査.....	18
3.1 調査の目的と方法.....	18
3.2 調査結果	20
3.2.1 本人向けアンケート調査結果.....	20
3.2.2 ご家族または介助者等向けアンケート調査結果	24
3.3 調査結果のまとめ	28
3.3.1 盲ろう者本人向けアンケート	28
3.3.2 ご家族または介助者等向けアンケート	28
第4章 団体ヒアリング調査	30
4.1 調査の目的と方法.....	30
4.2 調査対象と主な調査項目	30
4.3 団体ヒアリング調査結果.....	32
4.3.1 運動・スポーツ等提供団体	32
4.3.2 障害者スポーツセンター	35
4.3.3 特別支援学校	38

4.3.4 支援機器開発団体.....	40
4.3.5 当事者団体.....	41
4.3.6 盲ろう者向け相談窓口	42
4.3.7 障害者施設.....	43
4.4 調査結果のまとめと考察.....	44
4.4.1 調査結果のまとめ.....	44
4.4.2 考察.....	49
第5章 個人ヒアリング調査	52
5.1 調査の目的と方法.....	52
5.2 項目と調査対象	53
5.3 個人ヒアリング調査結果.....	55
5.3.1 個別の運動・スポーツ等について	55
5.3.2 全国障害者スポーツ大会の盲ろう者向けルール改訂について	73
5.4 調査結果のまとめと考察.....	76
5.4.1 調査結果のまとめ.....	76
5.4.2 考察.....	79
第6章 調査結果のまとめと結論.....	85
6.1 盲ろう者が運動・スポーツ等を実施する上での障壁	85
6.1.1 出会い・気づきのフェーズ	85
6.1.2 参加・体験のフェーズ	86
6.1.3 継続のフェーズ	89
6.2 盲ろう者が運動・スポーツ等を実施するために必要な環境整備に関する結論	90
第7章 参考資料.....	93
7.1 障害のある子供の教育支援の手引き上の記載.....	93
7.2 アンケート調査結果	98
7.3 家族・介助者向けアンケート調査結果.....	125
7.4 参考文献	134
7.4.1 盲ろう者とは.....	134
7.4.2 盲ろう者の身体的・精神的特徴に関する調査.....	135

第1章 はじめに

1.1 調査の目的

東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会により、スポーツを通じた共生社会の実現に向けた機運が醸成されたが、障害のない方で障害者スポーツを体験したことがある方の割合は低く、障害のある方とない方がともにスポーツをする、ユニバーサル、インクルーシブなスポーツ環境を整備することが必要である。また、成人に比べて障害者のスポーツ実施状況が低調であることから、障害者特有のスポーツの実施に係る障壁の解消と、スポーツ施策の実施体制上の課題の解消を図ることも重要である。

本事業は、実態把握が十分でない障害種の方のうち盲ろう者の方が生涯にわたってスポーツ・運動・遊び等（以降、運動・スポーツ等）を実施するための基盤を整備する観点から、スポーツ等実施の現状を把握するとともに、身近な場所でスポーツ等を実施できる環境の整備等を図ることを目的として実施した。

1.2 調査概要

盲ろう者等の日常生活及びスポーツ実施に知見を持つ有識者による検討委員会を設置の上、以下の調査の企画や結果分析において、意見をいただきながら実施した。

① 盲ろう者の運動・スポーツ等の実施状況に関する文献調査

盲ろう者の運動・スポーツ等の実施状況を把握する上での前提知識となる、盲ろう者が運動・スポーツ等を実施する上での障壁となり得る障害種特有の身体的、精神的特徴について、文献調査を実施した。

② 盲ろう者の運動・スポーツ等の実施状況に関する定量調査

盲ろう者の運動・スポーツの取り組みを定量的に把握すること、また、ヒアリング調査を行うためのヒアリング先候補（盲ろう者およびその家族・介助者）を洗い出すことの2つを目的として、盲ろう者および家族または介助者を対象に、運動・スポーツの実施状況等に関するアンケート調査を実施した。

③ 盲ろう者の運動・スポーツ等実施の現状を把握するための団体ヒアリング

特別支援学校、障害者施設、障害者スポーツセンター等の地域の盲ろう者に運動・スポーツの機会を提供する団体や、マラソンクラブ等の運動・スポーツ等を提供する団体に対して、運動・スポーツ等への参加機会の提供方法や、団体が運動・スポーツ提供時に実施する工夫や課題、今後必要な環境整備等についてヒアリングを実施した。

④ 盲ろう者の本人及び介助者等の個人ヒアリング

盲ろう者本人及び家族や介助者等に、運動・スポーツ等への参加の現状についてヒアリングを実施した

⑤ 有識者委員会の組成

上記①～④の調査企画および結果の分析に対して助言をいただくために有識者委員会を組成した

1.3 有識者委員会の組成

有識者委員会における委員の一覧と全4回の会議の開催概要は以下のとおり。

<盲ろう者に関する調査 有識者委員会>

委員

氏 名	ご所属・役職
市川 裕二	全国特別支援学校長会 副会長（都立立川学園校長）
小淵 和也	公益財団法人 笹川スポーツ財団 政策ディレクター
加藤 敦	独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所 研究企画部 主任研究員
門川 紳一郎	社会福祉法人全国盲ろう者協会 理事
亀井 笑	筑波大学附属視覚特別支援学校 教諭
清水 朋美	国立障害者リハビリテーションセンター 病院第二診療部長
滝澤 幸孝	公益財団法人日本パラスポーツ協会 スポーツ推進部 次長
田畑 真由美	盲ろうの子とその家族の会ふうわ 事務局長
◎中島 幸則	筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター 教授
原田 清生	特定非営利活動法人 日本ブラインドマラソン協会 事務局長
細川 健一郎	国立障害者リハビリテーションセンター 自立支援局 神戸視力障害センター 教務課 主任教官

◎：委員長

（敬称略、氏名五十音順）

アドバイザー

氏 名	ご所属・役職
菅井 裕行	宮城教育大学大学院教育学研究科 教授
星 祐子	国立特別支援教育総合研究所 特任研究員

（敬称略、氏名五十音順）

オブザーバー

氏 名	ご所属・役職
橋間 信市	社会福祉法人全国盲ろう者協会 常務理事 事務局長
小林 真悟	社会福祉法人全国盲ろう者協会 事業担当課長

○ 第1回：2023年7月3日（月） 15:00-17:00 （WEB会議）

【議事次第】

- ・ 事業計画について
- ・ 文献調査の経過共有
- ・ 団体ヒアリングの企画（案）

- ・ 個人ヒアリングの企画（案）
- 第2回：開催日時：2023年9月21日（木） 16:00-18:00 （WEB 会議）
【議事次第】
 - ・ パイロットヒアリング結果の共有
 - ・ 団体ヒアリングと個人ヒアリングについて
 - ・ 文献調査結果
- 第3回：開催日時：2023年12月21日（木） 10:00-12:00 （WEB 会議）
【議事次第】
 - ・ アンケート調査結果の本調査への反映について
 - ・ 団体ヒアリング調査結果報告と分析の視点について
 - ・ 個人ヒアリング調査経過報告と分析の視点について
- 第4回：開催日時：2024年3月4日（月） 10:00-12:00 （WEB 会議）
【議事次第】
 - ・ 事業報告書について

1.4 盲ろう者とは

盲ろう者とは、視覚と聴覚の両方に障害がある人のことを言う[※]。その見え方や聞こえ方の程度によって、大きく分けると（１）全盲ろう、（２）弱視ろう、（３）全盲難聴、（４）弱視難聴、の４つのタイプがある。ⁱ

※盲ろう者の中には、視覚と聴覚以外の障害を併せ持った者も含まれる。

表 1-1 見え方・聞こえ方による盲ろうのタイプ分け

	聞こえない	聞こえにくい
見えない	全盲ろう	全盲難聴
見えにくい	弱視ろう	弱視難聴

社会福祉法人全国盲ろう者協会が平成 24 年度に実施したアンケート調査では、視聴覚障害の組み合わせでは、「全盲難聴」が 41.2%（1,130 人）と最も多く、次いで、「弱視難聴」26.3%（722 人）、「全盲ろう」15.9%（437 人）、「弱視ろう」7.7%（211 人）となっている。

ii

1.4.1 障害の発生順序

盲ろうは、視覚障害・聴覚障害それぞれの発症時期に基づき、以下のように区分される。

iii

表 1-2 視覚障害、聴覚障害の発症時期に基づく区分

先天盲ろう	先天的、乳・幼児期に視覚聴覚の両方に障害を発症する。
盲ベース盲ろう	視覚障害が先に発症し、その後聴覚障害が発症する。
ろうベース盲ろう	聴覚障害が先に発症し、その後視覚障害が発症する。
中途盲ろう	先天的、乳・幼児期に視聴覚障害がなく、その後、視覚聴覚の両方に障害を発症する。
加齢に伴う盲ろう	老人性難聴や老人性白内障など、加齢に伴う疾病によって視覚聴覚の両方に障害を発症する。

1.4.2 盲ろうの原因疾患

(1)国内の全国の特別支援学校を対象とした調査より

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所が、2018 年に全国の特別支援学校 1,025 校を対象に行った盲ろう幼児児童生徒の実態調査では、視覚障害、聴覚障害の原因として上位のものは下記のとおりであった。^{iv}

表 1-3 盲ろう幼児児童生徒の視覚障害・聴覚障害の原因
(全国の特別支援学校を対象とした調査より)

視覚障害の原因		聴覚障害の原因	
未熟児	39 人	CHARGE 症候群	37 人
CHARGE 症候群	37 人	未熟児	27 人
中枢性障害（皮質盲等）	7 人	サイトメガロウイルス感染症	5 人
ダウン症候群	5 人	ダウン症候群	5 人
アッシャー症候群	4 人	中枢性障害（皮質盲等）	4 人
サイトメガロウイルス感染症	4 人	先天性風疹症候群	3 人
先天性風疹症候群	3 人	アッシャー症候群	3 人
事故	3 人	事故	3 人
髄膜炎	2 人	その他	45 人
その他	93 人	不明	151 人
不明	98 人		

特別支援学校を対象としているため、途中で盲ろうになった方の原因疾患とは異なる点に留意されたい。

(2)米国の全地域を対象とした調査より

「視覚聴覚二重障害の医療 ～盲ろう医療支援情報ネット～」HP では、米国の全域調査について、遺伝性症候群が 44%と半数を占め、代表的なものとして、チャージ症候群、ダウン症候群、アッシャー症候群があるとしている。^v

<視覚聴覚二重障害発祥の疫学的統計（0～21 歳、米国、2016）

① 遺伝性症候群および障害 44.4%

チャージ症候群・ダウン症候群（トリソミー21 症候群）・アッシャー症候群（Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ）
スティラー症候群・ダンディウォーカー症候群・ゴールデンハール症候群・その他

② 先天性合併症 14.3%

サイトメガロウイルス（CMV）・水頭症・小頭症・その他

- ③ 出生後の非先天性合併症 11.8%
窒息・重度の頭部損傷・髄膜炎・その他
- ④ 未熟児の合併症 10.7 %
- ⑤ 病因不明 18.8 %

1.4.3 他障害の併発状況

盲ろう児には、視覚・聴覚の障害の他に知的障害、肢体不自由を併発している方が多い。

- ☆ 2018 年に全国の特別支援学校 1,025 校を対象に行った盲ろう幼児児童生徒の実態調査によると、盲ろうの幼児児童生徒 315 人のうち、「視覚と聴覚以外の障害がある」と回答したのは全体の 86.0%にあたる 271 人であった。具体的な障害の内訳としては、多い順に、「知的障害・肢体不自由」が 117 人、続いて、「知的障害」が 56 人、「知的障害・肢体不自由・病弱」が 40 人であった。^{iv}

1.4.4 盲ろう者の困難

盲ろうの子どもたちが抱える主な困難性について、下記、「情報入手の難しさ」、「概念形成の難しさ」、「コミュニケーションの難しさ」、「移動の難しさ」の 4 つが挙げられている。

iii

① 情報入手の難しさ

盲ろうの子どもたちが得られる情報は、直接触れるか、保有する視覚と聴覚で把握できる限られた範囲にある不鮮明な情報に限られる。また、これらの情報は、一度に取り入れられる情報量が極めて少なく、複数の情報の同時処理が困難なため、情報相互の関係性・因果関係、全体像の把握が非常に難しくなる。加えて、遠方のもの・危険物・動き・変化には直接触れることができないため、情報として欠落してしまう。このため、当然知っているであろうことを知らないということもよく起こりうる。

② 概念形成の難しさ

人や物を判別すること、手に触れた物を認識すること、ひとつの概念を獲得するまでに意図的な働きかけと多くの時間が必要となる。

③ コミュニケーションの難しさ

盲ろうの子どもとのコミュニケーションは 1 対 1 が基本であり、時間もかかるため、コミュニケーションの量が圧倒的に少なくなる。そのコミュニケーションも一人ひとり異なるコミュニケーションの方法を有する。先天性の盲ろうの子どもたちと既にコミュニケーション手段を有してから盲ろうになった後天性の盲ろう者とでは、コミュニケーション獲得までの時間や方法が大きく異なる。

先天性の子どもの場合、身振りなどを含めてコミュニケーション手段の獲得には、それが対応する概念の理解が前提であるため、概念の形成そのものに難しさがあるために、コミュニケーション手段の獲得には意図的な関わりと非常に多くの時間を必要とする。

④ 移動することの難しさ

視覚からも聴覚からも情報が入りにくい、入らない中で、嗅覚や触覚によって、空間を把握することは非常に困難であり、行きたい時に、行きたい所に行くことの難しさがある。点字ブロックから離れたり、介助者がそばにいなくなったりした状態になると、基準となる物がなくなり、自分がどこにいるのか、全く分からない状況になってしまう。

上記は、主に先天性盲ろうの子どもたちを対象として、盲ろうの子どもたちの困難について整理させたものであるが、福島（1997）^{vi}でも、盲ろうの困難は、コミュニケーション、情報摂取、移動の3つが挙げられている。盲ろう児・者にとって、コミュニケーション、情報入手、移動は共通して困難を抱えやすい点であるといえる。

第2章 盲ろう者の身体的・精神的特徴に関する調査

2.1 調査の目的と方法

盲ろう者が運動・スポーツ等を実施する上で阻害となっている要因を、障害種特有の身体的、精神的特徴等の観点から整理し運動・スポーツ等実施時の留意点を整理することを目的として調査を行った。

調査に当たっては医中誌 web および国会図書館で「盲ろう」「視覚聴覚二重障害」等を検索しヒットした論文の中から運動・スポーツ参加への阻害要因を抽出できる見込みがありそうだと思われたもの及び、筑波大学附属視覚特別支援学校で保有している実践報告を調査の対象とした。海外の文献についても Google scholar で DeafBlind、Sports 等を検索しヒットした論文の中から運動・スポーツ参加への阻害要因を抽出できる見込みがありそうだと思われたもの及び、有識者に共有いただいた文献を調査の対象とした。

2.2 調査結果

2.2.1 調査結果の整理方法

盲ろう児・者の運動や移動、スポーツ実施に関する記述のある文献については、その多くが障害の程度（全盲ろう、全盲難聴、弱視ろう、弱視難聴）等が混在している複数の盲ろう者を対象に行われた調査に基づくものであったり、一人の盲ろう児の観察記録であったりと、障害の程度を分けて調査・整理しているものは見受けられなかった。

また、運動・スポーツ等への参加の阻害要因として考察されている内容は、コミュニケーションに関するものが多く、他にはスポーツを行う場所や交通手段などの環境要因、必要な介助者や指導者、仲間や家族などの人的要因、経済的要因等が記されており、身体的・精神的特徴を整理し、それを運動・スポーツ等への参加の障壁として記載しているものはなかった。

そこでまず、盲ろう者を障害の程度ごとに分けず、様々な障害の程度の盲ろう者を対象に調査した文献や一人の盲ろう児の観察記録等に記載された内容から、盲ろう者の運動・スポーツ等への参加の障壁となる“コミュニケーションに起因する”阻害要因を整理した。

また、盲ろう者の身体運動について記載のある文献として見つけることができた「視覚障害者の身体運動科学 学際的研究」(Haeghele et al., 2021=2023) の第 14 章 「盲ろう者と身体運動」(Haibach-Beach 2021=2023) では、「盲ろうは外傷と病気、70 以上の特定の遺伝子疾患をはじめ様々な原因によるものであるが、盲ろうの最も有力な遺伝子的原因はチャージ症候群、2 番目がアッシャー症候群である(National Center on Deaf Blindness, 2018)」(p.169-170)と記載がある。また、「チャージ症候群には独特の特性があるため、盲ろうの身体運動について調査した研究の多くがチャージ症候群を対象としているのも当然のことである」(p.170) との記載があり、当書では盲ろう者の調査として「チャージ症候群」と「アッシャー症候群」に着目している文献をレビューしている。

そこで次に、チャージ症候群とアッシャー症候群の方を対象とした調査に記載された内容から、運動・スポーツ等への参加の障壁となる“身体的特徴に起因する”阻害要因を整理した。

盲ろう者の精神的特徴について整理している論文は見つけられなかったが、上述の 2 つの方法による情報整理の中で、部分的に精神的特徴に起因する阻害要因と考えられるものを抽出したことから、それについても整理した。

なお、今回整理した内容は、あくまで調査から得られた文献に記載された内容を踏まえたものである。盲ろう者の身体運動についての先行研究が限定されており、チャージ症候群、アッシャー症候群を対象とした文献の参照が多くなったものの、文献に記載のある点がすべての盲ろう者、すべてのチャージ症候群やアッシャー症候群の方に当てはまるものでは

ないことに留意されたい。

2.2.2 コミュニケーションに起因する特徴

(1) コミュニケーションの対象を発見することが困難

(様々な盲ろう者の方を対象とした文献より)

- ・ 前田・廣田 (2016) では、盲ろう者が周囲の状況を把握し、コミュニケーションの対象となる相手を見つけることがすでに大きな困難であることを指摘している。

(2) コミュニケーション方法が多様であることにより身体活動への参加が難しい

(様々な盲ろう者の方を対象とした文献より)

- ・ 「盲ろうの子どもには手話、触覚的なサイン、弱視手話、音声を始めさまざまなコミュニケーション方法が数多くあるため、参加することがさらに難しくなる (Lieberman & Haegele, 2019)」 (Haibach-Beach 2021=2023, p174)
- ・ 「コミュニケーションの問題は、盲ろうの人、とくにチャージ症候群の子どもたちのレクリエーションや身体活動に参加する際の主なバリアとして挙げられている (Imeal et al., 2020)」 (Haibach-Beach 2021=2023, p174)
- ・ 盲ろうという二重の感覚障害によって、コミュニケーション、歩行、交流に独自の方法が必要となる (McInnes, 1999)。
- ・ Arndt et al., (2004) では、コミュニケーションは、多くの盲ろう者にとって、身体活動やレクリエーションを利用する上での障壁となっている (Lieberman & MacVicar, 2003; Lieberman & Stuart, 2002) ことが記載されている。また、手を使うことが多い身体活動中に盲ろう者とコミュニケーションをとることの複雑さを考慮すると、問題はさらに大きくなる (Arndt et al., 2004)。

(3) 通訳と運動（歩行含む）を同時に行うため、意思疎通がしづらい

(様々な盲ろう者の方を対象とした文献より)

- ・ 歩行の際、盲ろう者の通訳介助者が盲ろう者を手話等で通訳しながら手引きを行うため、意思疎通が不十分であることや、段差の躓きや狭い場所で障害物との接触で危険を伴う場合がある。(北野・足立 2013)

(4) コミュニケーションの文脈の中で盲ろう者自身がどのような位置にいるのかを把握することが困難

(アッシャー症候群の方について)

- ・ アッシャー症候群で途中で盲ろうとなった A さんのライフヒストリーを分析した柴崎・福島 (2012) では、聞こえにくい、見えにくいことが会話の内容の理解を困難にするだけでなく、自身の置かれている状況の把握やその場のコミュニケーション

の文脈の中で自分がどのような位置にいるのかを把握することが困難であることを指摘した。「言語情報だけでなく、非言語情報、すなわち、感覚的情報を視野に入れた包括的な支援」(柴崎・福島 2012:138)が必要である。

2.2.3 身体的特徴

(1) バランスをとることが難しい

(チャージ症候群の方について)

- ・ Haibach-Beach (2021=2023, p171) では、「チャージ症候群の子どもは、障害のない子供と比較してバランス評価の得点が有意に低くなりがちで、転倒のリスクが高くなる (Haibach & Lieberman 2013)」と記載されている。

(アッシャー症候群の方について)

- ・ Haibach-Beach (2021=2023, p170) では、アッシャー症候群には、3つのタイプがあり、タイプ I は、先天性の難聴、児童期からの進行性の視覚障害があり、前庭系の問題によるバランスの障害が見られることが記載されている。
- ・ アッシャー症候群の当事者である T 氏へのインタビューでは、体育の時間、バランスをとることが難しく、片足で1分立つように言われても、3秒から5秒ほどで身体がふらついてしまいできなかったことが記されている。T氏は、アッシャー症候群の人はバランス機能にも障害を持っているケースが多いようであるため、そのような子どもがいたら、バランス機能が必要な種目の授業の時は無理強いしないでほしいと語っている (柴崎・田幸 2005)。

(2) 次の瞬間の体の向きや動きの予測が難しい

(チャージ症候群の方について)

- ・ Haibach-Beach (2021=2023, p171) では、Rabbani et al., (2014) の調査結果より、チャージ症候群の子どもに対する包括的なバランス評価・アセスメントとして用いられている mini BESTest では、片足立ち (予測性姿勢制御) の得点がチャージ症候群でない人と比較して低く、その違いは最も大きかった事が記載されている。

(3) 自身の取った動作に反応して、補助的にステップングを行うことが難しい

(チャージ症候群の方について)

- ・ Haibach-Beach (2021=2023, p171) では、Mini BESTest において、補助的なステップング (反応性姿勢制御) の得点も低かった (Rabbani et al., 2014) が記載されている。

(4)自身の立ち位置の傾斜の把握が難しい

(チャージ症候群の方について)

- ・ Haibach-Beach (2021=2023, p171) では、Mini BESTest において、斜面台-閉眼（感覚機能）の得点も低かった（Rabbani et al., 2014）ことが記載されている。

(5)安定歩行が難しい

(チャージ症候群の方について)

- ・ Haibach-Beach (2021=2023, p171) では、Mini BESTest において、歩行安定性の得点も低かった（Rabbani et al., 2014）ことが記載されている。

(6)十分な骨量に達することが少なく、骨折等をおこしやすい

(チャージ症候群の方について)

- ・ Haibach-Beach (2021=2023, p174) では、「チャージ症候群の青少年は思春期の遅れや未成熟により発達の重要な時期に十分な骨量に達することが少なく、骨折したり、早期の骨粗しょう症にかかりやすくなったりする（Issekutz et al., 2005）」ことが記載されている。

2.2.4 精神的特徴

(1)運動に対する恐怖心が芽生えやすく、他者との信頼関係の構築が難しい

(様々な盲ろう者の方を対象とした文献より)

- ・ 特に視覚障害児に関連して、視覚障害児の身体活動における合併症には、運動に対する恐怖や他者との信頼関係の構築の難しさも含まれる（Lowry & Hatton, 2002）。Arndt et al., (2004)では、Lowry & Hatton（2002）の研究結果が、何らかの形で盲ろう児に適用される可能性は、妥当なものであると考えられるとしている。

(2)運動有能感が低下

(チャージ症候群の方について)

- ・ Haibach-Beach (2021=2023, p171) では、「Haibach と Lieberman (2013) の研究では、チャージ症候群の青少年を実査に測定した客観的バランス・スコアはバランス・スコアの自己効力感と関係して」おり、「バランスの自己効力感が低い人は身体活動の参加が減少する傾向があり、転倒のリスクが高まり運動有能感が低下」することが記載されている。

2.3 調査結果のまとめと考察

2.3.1 調査結果のまとめ

文献調査の結果より、盲ろう者の身体的・精神的特徴と、運動・スポーツ等を実施する際の障壁との関係について下記、5点にまとめた。

① 盲ろう者のコミュニケーションが多様なことが運動参加への障壁となる。

盲ろう者は手話を使う方もいれば、触手話・指点字等を使う方、また非言語のコミュニケーション方法を取る方もおり、コミュニケーションの方法は多様で個別的である。そのため、他者と相互に理解することが難しい場合がある。盲ろうの子どもたちが手話、感覚的なサイン、弱視手話、音声を始め多様なコミュニケーション方法を取ることが、活動への参加の障壁になっていることや、コミュニケーションは、多くの盲ろう者にとって、身体活動やレクリエーションを行う上での障壁となっていることが示されていた。このように、盲ろう者の多様なコミュニケーション方法は、運動等への参加の障壁となっているといえる。

② 視覚・聴覚両方に障害（身体的特徴）があることにより、情報を即座に取得しにくいことが運動参加への障壁となる。

盲ろう者は、周囲の情報を把握し、コミュニケーションの相手を見つけることや、言語情報だけでなく、自分がどのような位置に置かれているのかといった非言語情報の取得も困難であることが示されており、盲ろう者は、視覚、聴覚から情報を十分に得られないことにより、情報の取得が困難であるといえる。

また、情報取得が困難だけでなく、コミュニケーション方法によっては、運動への参加が困難となる。盲ろう者が通訳しながら歩行の手引きを行うため、意思疎通が困難になること、また、危険を伴う可能性があることを指摘されていた。

情報把握を即座にすることが困難な場合、得られた情報から反射的に身体を動かして楽しむような運動・スポーツ（例えば、球技等）への参加が難しくなる可能性が考えられる。

③ バランスを取ることが困難なこと（身体的特徴）が運動参加への障壁となる可能性がある。

複数のチャージ症候群を対象にした文献、アッシャー症候群を対象にした文献で、これらに起因する障害者は、バランスを取ることが難しい点が指摘されていた。バランス感覚を必要とする運動・スポーツ等（例えば、トランポリンや体操、自転車、山登り等）への参加が難しくなる可能性が考えられる。

④ 十分な骨量に達しない（身体的特徴）場合の骨折のリスクが運動参加への障壁となる可能性がある。

チャージ症候群の場合、発達時期に十分な骨量に達することが少なく、骨折や早期の骨粗

しょう症にかかりやすくなる可能性も指摘があった。このような場合、密着をして行い怪我のリスクが高い対人競技（柔道等）への参加が難しくなることが考えられる。

- ⑤ 十分な運動を行えない場合、運動有能感を持ちにくいこと（精神的特徴）が運動参加への障壁となる。

バランスの自己効力感が低い場合、身体活動の参加が減少し、転倒のリスクが高まり運動有能感が低下する傾向が述べていた。視覚、聴覚両方からの情報が取得できないことにより、運動に対する恐怖心が芽生えやすく、運動全般に対して参加に消極的になる可能性が考えられる。

2.3.2 考察

上記の結果を踏まえて、盲ろう者の方が運動・スポーツ等を実施する場合は、以下に留意することが大切であることが示唆された。

- ① 盲ろう者は個別的で多様なコミュニケーション手段を有するため、運動・スポーツの実施においては、それぞれのコミュニケーション手段に合わせた情報保障を提供できる体制が重要であることに留意する必要がある。
- ② 盲ろう者は、情報を即座に取得することが困難であることが指摘された。また、盲ろう者は個別的で多様なコミュニケーション手段を有するため、コミュニケーション手段によっては情報保障に時間がかかる可能性がある。そのため、盲ろう者が焦らず運動・スポーツ等を実施できるよう、ゆっくりした進行やそれを許容する雰囲気の中で運動・スポーツの機会が提供されることに留意する必要がある。
- ③ 十分な運動を行えない場合、運動有能感を持ちにくいことが指摘された。盲ろう者だから危険、できない等とするのではなく、既存の運動・スポーツのルールや用具を柔軟に変更・調整するなど、個別の盲ろう者が実施でき、多くの運動・スポーツの経験ができる環境を作ることに留意する必要がある。

第3章 アンケート調査

3.1 調査の目的と方法

目的

- ①盲ろう者の運動・スポーツの取り組みを定量的に把握する。
- ②ヒアリング調査を行うためのヒアリング先候補（盲ろう者およびその家族・介助者）を洗い出す。

調査対象

盲ろう者およびその家族・介助者

696名（全国盲ろう者協会会員635名、盲ろうの子とその家族の会ふうわ会員61名）

調査期間

2023年10月27日～2023年11月27日

調査方法

- ・ 全国盲ろう者協会、盲ろうの子とその家族の会ふうわより、会員宛に郵送・メールにて調査票一式を送付。
- ・ 点字による情報保障が必要な回答者へは、点字版の調査票を送付。
- ・ 調査票紙面の郵送による返送、点字紙面による返送、およびメール返信による回答方法を受け付け。

※調査対象者の選定や調査票の発送、調査項目の検討等について、全国盲ろう者協会、盲ろうの子とその家族の会ふうわ に全面的に協力をいただいた。

調査項目

以下の調査項目をアンケートの設問に設けた。

<当事者向けアンケートでの調査項目>

設問(大項目)	設問(小項目)
問1 基本情報	問1-1 年齢層
	問1-2 性別
	問1-3 学校への在籍
	問1-4 職業
	問1-5 現在の障害の状態
	問1-6 補助具・補装具等の利用について
	問1-7 コミュニケーション方法について

問 2 運動・スポーツ等への参加機会に関する情報	問 2 - 1 どこから情報を入手しているか
	問 2 - 2 どのような媒体で情報を得ることが多いか
問 3 運動・スポーツ等の実施経験	問 3 - 1 これまでの運動・スポーツ等の実施状況
	問 3 - 2 直近 1 年間における運動・スポーツ等の実施状況について
	問 3 - 3 これまでに実施経験のある運動・スポーツ等について
問 4 スポーツ大会（学校の運動会や行事を除く）への出場経験	問 4 - 1 スポーツ大会への出場経験
	問 4 - 2 大会に参加できなかった経験
	問 4 - 3 大会の対応により参加できるようになった経験
問 5 運動・スポーツ等に参加する上での障壁・工夫	問 5 - 1 盲ろう者が運動・スポーツ等に参加する上での障壁
	問 5 - 2 これまで実施してきた工夫
問 6 その他ご意見	
問 7 追加のご質問やヒアリング協力可否	

< 介助者・家族向けアンケートでの調査項目 >

設問(大項目)	設問(小項目)
問 1 基本情報	問 1 - 1 属性
	問 1 - 2 年齢層
	問 1 - 3 性別
	問 1 - 4 習得しているコミュニケーション方法
問 2 介助（通訳含む）の方法について	問 2 - 1 介助をする際の立場
	問 2 - 2 介助の内容
問 3 ご家族または介助者等自身の課題	問 3 - 1 ご家族または介助者等自身の課題の有無
	問 3 - 2 ご家族または介助者等自身の課題の内容
問 4 盲ろう者の運動・スポーツ等の実施環境に感じる課題	問 4 - 1 盲ろう者の運動・スポーツ等の競技の実施環境に対しての課題の有無
	問 4 - 2 運動・スポーツ等の実施環境に感じる課題の内容
問 5 盲ろう者の運動・スポーツ等を行う場面で感じた障壁・実施してきた工夫等	具体的な運動スポーツ名
	盲ろう者の参加の障壁
	障壁を超えるために行った工夫、周囲から受けて良かったサポート

問 6 その他ご意見
問 7 追加のご質問やヒアリング協力可否

3.2 調査結果

以下の回収数となった。

当事者向け	107 件 (郵送回答 93 件、メール回答 14 件)	回収率 約 15.2%
介助者・家族向け	50 件	回収率 約 7.3%

3.2.1 本人向けアンケート調査結果

全国盲ろう者協会会員・ふうわ会員の計 696 名にアンケートを実施。盲ろう当事者 107 名から回答を得られた。

(1) 回答者の基本情報

- 盲ろう者の 107 名の内訳は、全盲ろう 25 名、弱視ろう 22 名、全盲難聴 21 名、弱視難聴 33 名、未回答 6 名となっている。
- 先天性、後天性の別については、視覚障害（先天性：44 名、後天性：58 名、未回答 5 名）、聴覚障害（先天性：43 名、後天性 59 名、未回答 5 名）であった。
- 障害の程度別かつ先天性、後天性の別については、以下であった。

障害の程度別かつ先天性、後天性の別、アンケート回答者

	先天性ろう	後天性ろう	先天性難聴	後天性難聴	不明	総計
先天性全盲	7	2	4	2		15
後天性全盲	6	7	2	12	3	30
先天性弱視	5	2	13	8	1	29
後天性弱視	3	10	2	9	1	25
不明	1	1		3	3	8
総計	22	22	21	34	8	107

- 回答者の半数以上が 60 歳以上(55.1%)であり、男女比はほぼ同数だった。(男性 55.1%：女性 44.9%)。(問 1-1、1-2 参照)
- 半数は就労しておらず(50.0%)、最も多い就労している職業は「作業所・授産施設等」(%) だった。(問 1-4 参照)
- 視覚について、運動・スポーツ等を実施する際、ラインや道具、他の競技者を捉えることが「全くできない(全盲)」が 46.5%、「おおまかな存在(色や形など)は捉えることができる(弱視)」が 27.7%、「部分的に捉えることができる(視野狭窄等)」が 18.8% だった。(問 1-5-1 参照)
- 聴覚について、運動・スポーツ等を実施する際、競技中に発せられる音(合図、他の競

技者の様子、道具から発せられる音等)を捉えることが、「全く捉えることができない」が、46.5%、「音の種類によっては捉えることができる」が25.7%、「音はわかるものもあるが判別は難しい」が20.8%だった。(問1-5-2参照)

- 日常のコミュニケーション方法については、音声が最も多い。(受信時 41.6%、送信時 45.5%) (問1-7-1、1-7-2参照)

(2)運動・スポーツ等への参加機会に関する情報の入手

- 「障害者スポーツセンターや地域のスポーツ施設が出している案内」(29.4%)、「家族や知人からの紹介」(29.4%)等での入手が主だった。(問2-1参照)
- 媒体としては、「家族や知人からの情報提供」(43.8%)、所属団体や指導者からの情報提供(33.7%)等が挙げられた。(問2-2)

(3)運動・スポーツ等の実施経験

- 「これまで運動スポーツをしたことがある」と81.4%が回答。(問3－1参照)
- これまでに実施経験のある運動・スポーツ等については、ボッチャ(4.5%)、散歩(ぶらぶら歩き)(4.5%)、ボウリング(4.0%)、水泳(4.0%)等が主に挙げられた。(問3－3参照)

(4)スポーツ大会(学校の運動会や行事を除く)への出場経験

- 学校外でのスポーツ大会への参加経験は、89.3%が経験ありと回答。(問4－1参照)
- ルールや使用用具の制約により大会に参加できなかった経験は、21.4%が経験ありと回答した。(問4－2参照)
- 制約により参加できなかった経験について、主に以下のような主旨の回答があった。

[フライングディスク]

- ・ 不公平なルール(障害者団体フライングディスクの部で視覚障害なのに晴眼者との区分がない為、ハンデ差がある。)
- ・ 申し込み等の諸手続きが困難
- ・ 審判員の理解不足(1人での移動が出来ないため、競技中も通訳・介助員が必要だが、一般の審判員ではコミュニケーションが通じず大変困った)

[陸上競技・水泳]

- ・ 盲ろう者部門を設けてほしい(全国障害者スポーツ大会で部門視覚部門、聴覚部門合併になっているため)

[その他]

- ・ 盲ろうに合った種目がない

- 大会側の対応によって参加できるようになった経験は、23.3%が経験ありと回答した。(問4－3参照)

(5)運動・スポーツ等に参加する上での課題・障壁

- 障壁としては、主に「盲ろう者の障害の特性を理解して指導できる人員の不足」(63.2%)、「盲ろう者が参加できる運動・スポーツに関する分かりやすい情報の不足」(57.9%)、「実施できる種目が無い・少ない」(56.6%)等が挙げられた。(問5－1参照)
- 障壁に関して、ルール等に関連する以下のコメントが挙げられた。(問6参照)
 - ・ 50メートル走には伴走がつけられないが100メートル走には伴走がつけられる。配慮を求めたところ、伴走なしで、一人で走れるようスタートの合図で肩を叩いてもらった。白い線があまり見えていないので左側に五人右側に五人並んでもらうことで白い線のかわりとして配慮してもらった。

(6)盲ろう者の運動・スポーツ等の実施に関する工夫

- 工夫としては、以下の趣旨のコメントが挙げられた。(内容の類型ごとに整理)(問5-2 参照)

【運動・スポーツ種目別の配慮に関する工夫】

- ・ ランニング：伴走者の動きがわかり易いように手作りの伴走ロープを作った。口頭での指示だけでなく、サインを決めて伴走者の手に直接触れてサインを受けとる。
- ・ フライングディスク：ディスクの方向(状況、様子)を背中に大きく書いてもらう、予めサインを決めておく。競技直前まで、スローイングエリアで慣れている通訳・介助者に移動介助、通訳を受けられるようにする(安心して試合に臨める)。自身の状況を説明してもらい、把握できるようにする(落ちついて試合に臨める)。
- ・ 柔道：相手と組んだ状態から開始する。練習や試合中も相手と離れた時は肩をたたくなどの合図で再度取り組みができるようにしている。
- ・ 水泳：手引、スタート時の合図(肩をたたく)、ターンの時は長い棒で頭を軽くたたく。
- ・ 卓球：卓球台の上に体をもたれさせた状態で卓球をする(音の響きで分かりやすい)。もしくは肩をたたいて合図してもらう。
- ・ クライミング：仲間に登る壁の形(斜面の向きなど)や難度の違いなどを教えてもらってから、自力で登る。初めて登った頃は、バイブレーターを使って、登っている時に、ホールドの位置を伝えるために、右、左、上といった合図をしてもらった。慣れたら登る方向は自分で判断しながら自力で登る。
- ・ ブラインドテニス：サーブ時の合図がわかるように支援者(通訳・介助者)の同行を認めてもらう。
- ・ 円周走：広場に杭を打ちロープを張って、それを持って杭を中心にグルグル回る形でトレーニングを実施。

【周囲からのサポートに関する工夫】

- ・ 通訳介助員からの道案内以外のサポート(手とり足とりして教えてもらう、ルールの説明)
- ・ コミュニケーション(指点字、指文字、触手話等)が取れる伴走者との伴走。事前に送付される資料も手話で説明を受ける。
- ・ サークルによる伴走者を見つけてもらう支援。
- ・ 周囲の方が、本人が楽しくなるために一緒に盛り上がったり、個別の障害について、配慮事項など事前に確認し情報共有してもらう。
- ・ 配慮について特別視することなく皆で楽しく過ごすことだけを考えてもらう。
- ・ 使いやすく改造した乗り物の使用

3.2.2 ご家族または介助者等向けアンケート調査結果

全国盲ろう者協会会員・ふうわ会員の計 696 名にアンケートを実施。当事者に、最大 1 名までの介助者へのアンケート協力を依頼いただくよう依頼。介助者・家族 50 名から回答を得られた。

(1)回答者の基本情報

- 「家族」(44.9%) および「介助員（通訳含む）」(44.9%) が主だった。(問 1－1 参照)
- 「60 歳以上」(44.0%) および「50 歳代」(26.0%) が主だった。(問 1－2 参照)
- 「女性」(82.0%) が主だった。(問 1－3 参照)
- 習得しているコミュニケーション方法（複数回答）としては、「音声」(53.1%)、「触手話」(51.0%)、「指文字、手書き文字」(それぞれ 46.9%) が主だった。(問 1－4 参照)

(2)介助の方法

- 運動・スポーツの際は、「競技時の付き添い・身の回りの支援者として介助を行っている」(63.6%) のが主だった。(問 2－1 参照)
- 介助内容としては、「移動支援（競技中以外）」(84.8%)、「情報保障（コミュニケーションにおける通訳等）」(78.8%) が主だった (問 2－2 参照)

(3)ご家族または介助者等自身の課題

- 盲ろう者の運動・スポーツ等の実施を介助する上で、家族・介助者自身に課題を感じるという回答がほとんどであった。 (「とても課題を感じる」(40.5%)、「やや課題を感じる」(35.7%)) (問 3－1 参照)
- 課題の内容としては、「盲ろう者の運動・スポーツ等に関する知識不足や運動・スポーツ実施時の介助方法に関する知見の不足に関する課題」が 55.8%で最も多く、次いで「運動・スポーツ等を実施できる場所等の情報収集に関する課題」が 51.2%、「ご家族または介助者等の体力不足に関する課題」が 46.5%、「ご家族または介助者等の人手や時間等の負担に関する課題」が 39.5%であった。(問 3－2 参照)
- 課題の内容について、具体的に以下のような意見が上がった (自由記述欄、問 6)

[家族]

- ・ 「このスポーツがやりたい！」と思っても色々考えてしまい躊躇してしまう。
- ・ 知的障害もある盲ろう（弱視ろう）でルールを理解することが難しくまわりに迷惑をかけるのではないか、という親の不安もある。
- ・ 家族の車での送迎が必要。
- ・ 本人に、生活介助員、通訳介助員、親の 3 人体制で同行。

[介助員（通訳含む）]

- ・ 盲ろう者の介助となると長時間になってしまうので、介助者が少ない。介助者の年齢が高いため体力的にも限界がある。

(4)盲ろう者の運動・スポーツ等の実施環境に感じる課題・障壁

- 盲ろう者の運動・スポーツ等の競技の実施環境に対して、課題を感じるという回答が多く得られた。「とても課題を感じる」(40.0%)、「やや課題を感じる」(22.2%))(問4-1 参照)
- 課題の内容としては、「障害特性を理解して指導できる人材の不足」が 66.7%で最も多く、次いで「盲ろう者が参加できる運動・スポーツに関する情報発信の不足」が 57.6%、「スポーツ実施における介助者への理解や介助者に対するサポートの不足」が 51.5%、「一緒に活動する仲間が不足している」が 48.5%、「実施できる競技の少なさ」が 45.5%であった。(問4-2 参照)
- 課題の内容について、具体的に以下のような意見が上がった(自由記述欄、問6)

[家族]

- ・ スポーツのルール等を理解することが難しいのでスポーツができないという現実がある。しかし盲ろう児が理解できるよう丁寧に何度も教えてくれるスポーツの指導者がいれば、スポーツをする機会ができるのではないかと思う
- ・ 介助している家族が競技場フロアに入れないことがある
- ・ 障害者スキーの道具(レンタルや介助の料金)が高い
- ・ 預かる方は「大丈夫です」といっても障害に関するノウハウがない

[介助員(通訳含む)]

- ・ 盲ろう者が安心して楽しめる場所を作ってほしい
- ・ 盲ろうという障害のみならず、その通訳・介助方法への認知、理解がまだなされていない
- 個別の運動・スポーツの場面に限っては、水泳(水中ウォーキング含む)、マラソン、ウォーキング、フライングディスクなどの運動・スポーツについて、障壁についての回答が得られた。(問5 参照)

[水泳(水中ウォーキング含む)についての障壁]

- ・ 周囲の人からの理解が足りないと違和感を抱かれる
- ・ コーチの指示が分からない、プールサイドからの手話が見えない、グループでの流れがつかめない 等
- ・ 保護者や通訳士がプールサイドに行くというのがスイミング側に伝わらない

[マラソンについての障壁]

- ・ タイムと距離を伝えること
- ・ 慣れた(数回会っている)方の介助等だと安心だが初めての方とは難しい

[ウォーキングについての障壁]

- ・ 盲ろう者の見え方、聞こえ方がまちまちなので、個人に合わせた満足のいくウォーキングが出来ない
- ・ 参加者名がわからない

[フライングディスクについての障壁]

- ・ フライングディスクの特にアキュラシー（輪の中に何回入れられるか）において、現在、視覚障害の有無の区分がない。明らかに不平等。大きな大会では視覚障害のハンデがないようなルール変更が必要。
- ・ 盲ろうという障害の理解不足、配慮の足りなさ。競技場内での状況説明の意味（必要性）を理解してもらえなかった。

(5)盲ろう者の運動・スポーツ等の実施に関する工夫

- 個別の運動・スポーツの場面に關しては、水泳（水中ウォーキング含む）、マラソン、ウォーキング、フライングディスクなどの運動・スポーツについて、工夫点についての回答が得られた。（問5 参照）

[水泳（水中ウォーキング含む）についての工夫]

- ・ スイミングキャップに大きく「盲ろう者」と書いている
- ・ 自分の状態とコミュニケーション手段を職員に知ってもらうために施設宛てに手紙を書いた
- ・ 何度も運営側に障害や配慮や信念を伝えてプールサイドに通訳を入れられた。前もって情報カードを準備した

[マラソンについての工夫]

- ・ タイムは1kmを何分で走るか事前に決めておく
- ・ 距離は1kmごと伝える
- ・ 上り下りの長さは、サインで決めておく

[ウォーキングについての工夫]

- ・ 何度か参加するうちにみなさんから名前を名乗ってくれるようになったこと

[フライングディスクについての工夫]

- ・ 直接、都、スポーツ協会または大会運営者に向けて要望を盲ろう者と共に提出し、競技中にも状況説明可となるルール改善があった。まだ定着していない

3.3 調査結果のまとめ

3.3.1 盲ろう者本人向けアンケート

- 運動・スポーツ等への参加機会に関する情報は、障害者スポーツセンターや地域のスポーツ施設が出している案内、家族や知人からの紹介について約 3 割の回答者が回答している。媒体としては「プリント等の紙媒体」を約 3 割の回答者が回答している。
- 約 8 割の回答者がこれまで運動・スポーツ等を行ったことがあると回答している。
- これまでに実施経験のある運動・スポーツ等については、ボッチャ（4.5%）、散歩（ぶらぶら歩き）（4.5%）ボウリング（4.0%）、水泳（4.0%）等が挙げられた。
- 学校外でのスポーツ大会への参加経験は、89.3%が経験ありと回答している。一方、ルールや使用用具の制約により大会に参加できなかった経験は、21.4%が経験あり、大会側の対応によって参加できるようになった経験は、23.3%が経験ありと回答している。
- 活動場所は、障害者スポーツ専用・優先施設が約 3 割、公共スポーツ施設が約 2 割の回答を得ている。
- 障壁としては、主に「盲ろう者の障害の特性を理解して指導できる人員の不足」(63.2%)、「盲ろう者が参加できる運動・スポーツに関する分かりやすい情報の不足」(57.9%)、「実施できる種目が無い・少ない」(56.6%) 等が挙げられた。
- 工夫としては、スタートの合図やサインを決める、触覚を使い状況を伝える、伴走者をつける等、個別の運動・スポーツ実施に関して多様な工夫がされていた。また、周囲から受けてよかったサポートについては、盲ろう者を特別視することなくみんなで楽しめるような雰囲気にくれた、障害（個別）について、配慮事項など事前に確認してもらい情報共有ができた等の意見があった。

3.3.2 ご家族または介助者等向けアンケート

- 運動・スポーツの際は、「競技時の付き添い・身の回りの支援者として介助を行っている」のが約 6 割であり、介助内容としては、「移動支援（競技中以外）」、「情報保障（コミュニケーションにおける通訳等）」が約 8 割であった。
- 盲ろう者の運動・スポーツ等の実施を介助する上で、家族・介助者自身に課題を感じると、約 8 割の回答者が回答している。課題の内容としては、「盲ろう者の運動・スポーツ等に関する知識不足や運動・スポーツ実施時の介助方法に関する知見の不足」、「運動・スポーツ等を実施できる場所等の情報収集に関する課題」を半数以上の回答者が回答している。
- また、盲ろう者の運動・スポーツ等の競技の実施環境に課題を感じると、約 6 割の回答者が回答している。課題の内容としては、「障害特性を理解して指導できる人材の不足」、「盲ろう者が参加できる運動・スポーツに関する情報発信の不足」、「スポーツ実施における介助者への理解や介助者に対するサポートの不足」を半数以上の回答者が回答している。

- 運動・スポーツ実施時の工夫については、スイミングキャップに大きく「盲ろう者」と書く、タイムは1kmを何分で走るか事前に決めておく等の工夫が挙げられた。また、障害の状態とコミュニケーション手段を施設宛てに手紙を書く、運営側に障害や配慮や信念を伝えてプールサイドに通訳を入れられるよう交渉する等、盲ろう者が運動・スポーツを実施しやすくなるために、運営や施設側へ情報伝達や調整等を行っている工夫も挙げられた。

第4章 団体ヒアリング調査

4.1 調査の目的と方法

盲ろう者に対して団体からどのように運動・スポーツへの参加機会が提供されているのかその実態と、団体が講じている工夫や感じている課題を明らかにすることを目的に、特別支援学校や当事者団体、障害者スポーツ協会、障害者スポーツセンター、障害者スポーツ提供団体、支援機器開発機関、盲ろう者向けの相談窓口等、盲ろう者への運動・スポーツ等の提供に関わる団体にヒアリング調査を行った。

ヒアリング先については、本事業の有識者委員会で得られた意見を踏まえて選定し、オンラインと対面により実施した。

ヒアリング項目は、調査目的に沿うよう、各団体の活動実態を把握するとともに、盲ろう者に対する運動・スポーツ提供機会時の工夫や必要な配慮、抱えている課題を拾い上げられるように半構造化ヒアリングとした。

4.2 調査対象と主な調査項目

調査の初期段階において、盲ろう者の生活全般及び運動・スポーツ等の実施実態について見があると想定された当事者団体、障害者スポーツセンター、支援機器開発団体等にヒアリングを行った。その結果と有識者委員会で得られた意見を踏まえて、特別支援学校、福祉施設、障害者スポーツセンター、運動・スポーツ等提供団体、支援機器開発機関等を対象に調査を行った。調査対象とヒアリング実施日は以下のとおり。

#	団体分類	名称	ヒアリング 実施日
1	運動・スポーツ等提供 団体	ランニングクラブ	2023/10/25
2		クライミングクラブ	2023/10/30
3		ゴールボールクラブ	2024/1/13
4		柔道関連団体	2024/2/1
5		フライングディスク関連団体	2024/2/1
6	障害者スポーツセンタ ー	A 障害者 SC	2023/8/8 (パイロット)
7		B 障害者 SC	2023/10/12
8	特別支援学校	A 特別支援学校	2023/8/4 (パイロット)
9		B 特別支援学校	2023/11/14
10		C 特別支援学校	2023/11/14

11	当事者団体	当事者団体	2023/8/9 (パイロット)
12	支援機器等開発機関	支援機器開発団体	2023/10/24
13	盲ろう者向け相談窓口	支援センター	2023/10/13
14	障害者施設	障害者施設	2023/11/27

ヒアリング項目は、団体ごとに調整を行ったが、主に下記の項目で実施した。

主な調査項目

- ・ 団体の概要
 - 設立年、設立経緯
 - 実施頻度（練習・試合等）、参加者数、指導者数・保有資格（パラスポーツ指導員等）
 - 盲ろう者の参加者数、参加に至った理由、参加頻度
 - （盲ろう者が運動・スポーツに参加しやすくなるために）他団体の紹介・連携の有無
- ・ 参加のあった重度障害者について
 - 障害の程度（見え方、聞こえ方、先天性／後天性、補助具の使用、コミュニケーション方法）
 - 年齢層・性別
 - 補助具の使用、介助者の有無
 - コミュニケーション方法（日常生活および運動・スポーツ場面）
- ・ 盲ろう者への運動・スポーツ等の提供の実態
 - 実施する運動やスポーツの種類
 - （上述の運動やスポーツを提供する際に）行っている工夫や配慮、課題
 - （上述の運動やスポーツに）参加しやすくなるために今後必要な工夫や配慮、環境整備・課題
- ・ 当該スポーツに関する大会やイベント等について
 - 盲ろう者が参加できる当該スポーツに関する大会
 - 盲ろう者が大会に参加しやすくなるために、現在実施されている工夫や配慮
 - 盲ろう者にとって参加が困難な場合、その課題や改善策（大会側の規定や環境面）
 - 盲ろう者が大会に参加しやすくなるために、今後必要な工夫や配慮、環境整備
- ・ 今後の有効な調査に向けて
 - ヒアリングをすすめる個人（盲ろう者で大会に出場した方/大会に参加できなかった方、大会に参加できなくても運動を楽しんでいる方、およびその介助者等）

4.3 団体ヒアリング調査結果

団体ヒアリング調査で得られた意見を、①スポーツ分野に限らず日常生活全般において盲ろう者に関わる団体と、②主にスポーツ分野で盲ろう者に関わる団体とに分けたうえで、どのように運動・スポーツ等が盲ろう者に提供されているのかを整理した。

4.3.1 運動・スポーツ等提供団体

(1) マラソンクラブ

1) ヒアリング実施団体概要

毎週土曜日の午前中に、関東のある公園を中心に活動。定員は 100 名に対し、常時 50～60 名が参加。会員名簿上盲ろう者は 20 名くらいの登録あり。参加する盲ろう者は 10 名程。

参加者の中に、スポーツ指導に関する資格保有者はいない。参加者に一度伴走を体験してもらい、伴走方法を学んでもらった後に伴走をしていただく。盲ろう者のみでなく、視覚障害者も一緒に走っている。スタッフは 12 名。手話ができる方は 3 名程。

2) マラソン・ランニング機会の提供方法

日常的にランニングしたい盲ろう者には伴走者が必要であり、その伴走者探しを支援している。団体のメーリングリストで協力可能な伴走者を探し、盲ろう者とマッチングしている。

また、当団体と同様な盲ろう者のランニングを支援する団体と連携しており、大会出場時の通訳介助者や練習場所等の情報連携を実施している。

【伴走時（安全確保）の工夫】

安全を確保するため、盲ろう者への伴走方法を HP・YouTube にアップし、伴走の際には事前に必ず見てもらい、勉強してもらうことで、安全な伴走を実現している。

【ランニング中の困りごと】

公園をランニング中に、他のランナーやサイクリングしている人から、盲ろう者と伴走者が 2 人並んで走っているので抜きにくいというクレームがあった。伴走者が他のランナーにどいてくれという事に対してクレームがくることもあるため、伴走者がビブスを着用し、盲ろう者、伴走者であることが分かるようにすることが必要である。

(2)クライミングクラブ

1)ヒアリング実施団体概要

視覚障害や、その他の障害がある方へもクライミングの機会を提供したいという思いで2005年に設立。スクール企画運営、多様性理解促進クライミング事業、普及啓発・広報事業・クライミング施設等運営事業を行う。

2)クライミング機会の提供方法

盲ろう者友の会と協働し、民間のクライミングジムでイベントを2期実施した。

【盲ろう者の参加者募集に関する工夫・難しさ】

盲ろう者は、応募するのに時間がかかる点にも配慮が必要であった。事前に友の会のスタッフの方にもクライミングを体験してもらい、体験会後にはすぐに相談ができるような体制にした。盲ろう者の方は、友の会の方からの情報があるからこそ前向きに参加ができる。友の会の方が間に入ってくれたことが成功のカギだった。

【盲ろう者とスタッフのコミュニケーションの工夫】

安全に特化した3種類のジェスチャーを決めて、クライマーは、自分の意思をジェスチャーで下にいるスタッフに伝えるようにした。

例1)手を横に動かすジェスチャー：「ロープを張ってください」

例2)手を上下させる：「おろしてください」

【ルールの工夫】

本来は、「同じ色のホールドだけで上る」などのルールがあるが、盲ろう者は視覚でルートを理解することができないため、上に登る時は、どんなホールドも触ってもいいルールで実施した。地面で足がつく状態で、触っていいホールドを確かめ、身体の動きを理解してもらった。

【指導の工夫】

まずは、盲ろう者にやってもらい、次に、体の動きを理解してもらうため、指導者がホールドにのっている壁についた状態で、盲ろう者が覆いかぶさる形で指導者の動きを後ろから触ることで、動き方を確かめてもらった。

ロープをかけるカラビナがあるが、触ると怪我をしてしまう可能性があるため、先に触ってもらい、触っていけないものであることを伝えた。また、安全のサポートをする方が使用する器具（ロープを裁くためのブレーキになる機器）も触ってもらい、安全の仕組みを伝えた。

(3)ゴールボールクラブ

1)実施団体概要

ゴールボールチーム。盲ろう者友の会と連携して盲ろう者向けのゴールボール体験会を企画している

2) ゴールボール機会の提供方法

ゴールボールを始める前にコート全体像を立体的に印刷可能なプリンターで印刷をして盲ろう者に確認をしてもらうと共に、実際にゴールポストを触りながらコートを歩いてもらいコート全体感を掴んでもらう。

練習においてはボールの投げ方についてフォームを教えたり、投げる方向の捉え方（プレー中は介助者が投げる方向を教えたりできない）を教えている。

試合は特別ルールとして、4対4で行っている。両チームともに前衛1名と、後衛3名の内の中央の1名に視覚障害者を配置し、左右に盲ろうの選手を配置している。盲ろうの選手は音が聞こえず守備をするのは危ないため中心の選手のみが守備を行う。一方、攻撃の時は中心の選手が左右のどちらかの選手にボールを渡して投げてもらうが、中心の選手が左右の選手にボールを渡す際、左右の選手には常にゴールポストを触っておいてもらい、中心の選手がゴールポストを通じて振動を左右の選手に伝えることで指示を伝えている

1回振動させた場合は、その場に座ってもらいパスを待ってもらう。2回振動させた場合は中心までゴールポストを触りながら来てもらいボールを手渡しするといった形で実施している。

4.3.2 障害者スポーツセンター

(1)ヒアリング実施団体概要

規模が大きく、盲ろう者の利用者実績があることが確認された 2 つの障害者スポーツセンターから伺った。

- A 障害者スポーツセンター

日常の施設利用支援、スポーツ相談、スポーツ教室、記録会、地域振興や交流活動等の地域に関する事業、講習会等を行う。職員は約 20 名、他にアルバイト職員。

- B 障害者スポーツセンター

障害者スポーツセンター（施設）、スポーツ教室・練習の実施、各種相談事業を行う。職員は約 30 名。

(2)利用者数とその把握方法

盲ろう者の利用者の把握方法は、2 つのセンターで異なっている。双方とも利用者登録の際に登録された情報を基に、利用者の障害区分を把握しているが、A は利用者登録の分類の中に「重複障害」という分類があり、この中で集計をしている。「重複障害」の中には、視覚と聴覚の双方に障害がある方のみでなく、その他の障害も含めて 2 つ以上の障害がある方が含まれているため「盲ろう者」の利用者数を把握できるようになっていない。

一方、B は視覚と聴覚両方の障害者手帳を持っている方を集計することで「盲ろう者」の数を把握できるようになっている。1 日 300 人くらいの方が B を利用するが、その中で盲ろう者の方は 1～2 人いるかないか、といった状況。

(3)具体的な運動・スポーツ等の提供方法

1)フライングディスク

【当事者や他の人にディスクがぶつからないための工夫】

盲ろう者の場合、障害特性上（見えない・聞こえないため）人がいるのに投げてしまったり、仲間が投げたものがぶつかってしまったりする可能性がある。そのため A では、投げる人の配置の工夫、投げてよいタイミングの伝達、壁になるようなネットの設置などの環境整備を行った。

B では、投げる方向を一方向にして、間隔を開けてディスクが当たらないようにしている。1 回ずつ『投げる』『止まる』を指示しながら実施している。

【正しいフォーム伝授のための工夫・難しさ】

A ではスモールステップでできることから始めていく。短い距離で練習を始めて、より良い回転をつける事やディスクを傾けないようにすることに留意した指導をしている。正しい方向に投げる練習としては、タオルなどの身近な用具を活用した練習方法もあると考えている。

Bは、全盲ろうの方には、センターの指導員が見本を見せて体を触ってもらってひじや肩の位置、リリース位置を認識してもらう。聞こえる方には、加えて口頭で伝えてイメージしてもらっている。一方、弱視難聴の方に対しては、本人がどこにディスクが飛んだのかを見えているため、耳元で大きな声で距離や方向、ズレを伝えている。

全盲ろうの方に実施している方法は、同性であればできるが異性で同じように教えることは難しい、と感じている。

【投げる方向を伝えるための工夫・難しさ】

A・B共に、背後等から全盲ろう者の両腕をもって方向を示し投げる方向を伝え、聞こえる方の場合、手をたたいて投げる方向を伝えている。

Bは、アキュラシーにおいて、位置や距離のずれを伝えることが難しいと感じている。通訳・介助員もご本人もスポーツに特化した方ではないため、解釈の違いがあり伝わりづらいことがある。右に数センチずれていると伝えるだけでは、人によって位置の感覚が伝わりにくい。投げた後に手や腕を動かしてズレを指摘したり、背中に丸（アキュラシーゴール）を書いて「この辺に飛んだよ」と教えたりしている。どう伝えるか、介助者と試行錯誤して、本人も分かりやすいということで、この方法を採用した。センターのスタッフが1対1で指導を行えば良いが、いろいろな障害の人と一緒に行動するため難しい、と感じている。

2)水泳

【盲ろう者と通訳・介助員を介したコミュニケーションの工夫】

プールサイドやプールの中でも壁側に近いところでは、プールサイドにいる通訳・介助員が、盲ろう者の傍に行きコミュニケーションをとっている。その際は、盲ろう者の方から何かアクションがあった際は、Bの指導員も話を聞きに行き、通訳者を介して、もう少し肘を上げたほうが良いなどアドバイスをすることもある。

盲ろう者がプールの真ん中で止まってしまうと、その場で通訳・介助員とコミュニケーションを取ることが難しいため、センターの指導員がプールに入り、通訳介助員の方とコミュニケーションがとれるよう、プールの壁際まで連れて行ったりしている。

【正しいフォーム伝授のための工夫・難しさ】

センター職員は、監視しつつ泳法のフォームなどについてアドバイスをするが、盲ろう者の場合、感覚の違いがありイメージしていることが違うため、こちらが伝えたいことを正確に伝えることが難しい、と感じている。

盲ろう者に泳ぎ方のフォームをイメージしてもらうために、口頭だけではなくて、小さい人形を用いて、腕のフォームや、足の形を触ってもらいながら指導できるような体制が出来たら良いという話を指導員間でしている。

3) トレーニング室

【物の位置が分かるようにするための工夫】

A では、物の配置や動線を理解してもらうために、ざらざらするラインテープを活用したり、ホワイトボードを使ったりすることで、配置を触覚で理解してもらう事や他の利用者（晴眼者）が一目で利用状況を分かるようにコーンなどの用具を置き、注意喚起を行う対応をとっている。

B では、全盲ろうの方に関しては、トレーニング室内を一周回って一度マシンを全部触ってもらい配置を紹介したり、点字を触ってもらい重りの重さ等を教えたりしている。

(4) 運動・スポーツ等への参加機会の紹介に関する取組み

盲ろう者の所属する団体や個人に、運動・スポーツ等への参加機会を紹介するような取組について、B は個人利用で来られる方が中心であるため、これまで他団体の紹介等を行ったことはない。また盲ろう者に限ってという形でセンターに情報が届いたことはなく、視覚障害、聴覚障害対象の団体や大会の案内がたまに来ることはある。

4.3.3 特別支援学校

(1)ヒアリング実施学校概要

盲ろうの児童・生徒が複数在籍する3つの特別支援学校から伺った。なお、以下では、ヒアリングを実施した学校の匿名化のため、普通学級以外の学級を「重複学級」として記載する。

- A 特別支援学校
2名の盲ろう児（全盲難聴、弱視難聴）が在籍する。
- B 特別支援学校
2名の盲ろう児（弱視難聴）が在籍する。
- C 特別支援学校
7名の盲ろう児（全盲ろう2名、全盲難聴4名、弱視難聴1名）が在籍する。

(2)運動・スポーツ等の提供方法

A 特別支援学校では、盲ろう児と身体を動かすことで関わる場面は、体育、休み時間、自立活動、運動会等。体育の授業は、週に3時間あり、週2時間は視覚単一障害の児童と合同で授業を行っている。週に1時間は重複学級の児童のみの体育の授業を行っている。重複学級の児童は、一人ひとりの実態に合わせて目標を設定し、取り組んでいる。一人の児童は社会一般のスポーツはまだハードルが高く、スポーツについてはピンとこないため、散歩等、自分で「安心して」体を動かすことがまず重要である。もう一人の児童は目の前で一緒に動くことで真似してもらったり、後ろから身体の動かし方を教えてあげたりしている。

B 特別支援学校に在籍する男子児童は、特別支援学校内の普通学級の他の児童と一緒に体育を実施していた。女子生徒も、重複学級に在籍する他の生徒と一緒に体育を実施していた。運動・スポーツをする際は、目付近にボールが当たると危険なため、柔らかいボールを使用することや、集団走や持久走をするときには、他の児童と接触しないよう、白線の上を走ってもらう、短距離走の時は、インコース・アウトコースなど、本人に決めてもらうなどの方法で運動・スポーツを実施していた。学校側としては事故が起きないように配慮し、自立して運動ができるためにはどうしたらいいか、という観点から配慮を行っていた。

C 特別支援学校では、盲ろう者以外の生徒とも一緒に体育の授業を行っている。盲ろう児については、一人ひとりに説明の手立てが異なるので、教員が傍について個別に対応している。トランポリン・マット運動、鉄棒、プール、バランス運動、持久走、ボウリング・ボッチャ、鉄線走等を実施していた。持久走ではルビナにチェーンを繋いだ道具を学校で自作し、周回したらチェーンをカップに入れることで残りの周回数を把握できるような工夫を、ボウリング・ボッチャでは、ミニチュアを作成し、倒したピン・残っているピンを生徒に伝えたり、ボッチャについては見やすいようにコーンを目標にし、タンバリンなどの音で示して

あげることで距離を提示するといった工夫をしている。また近くの学校とのエンジョイルール（通常よりもルールをやさしくしたもの）による大会を開催している。

(3)運動・スポーツに関する情報提供の状況

A 特別支援学校では、外部のスポーツ団体等から情報が日常的に届くということはないということであったが、高等部の先生が企画したスポーツ選手が学校に訪問するイベントの情報が小学部にも共有されていた。

B 特別支援学校には、多くの案内や情報が届くことから、積極的に直接盲ろうの児童・生徒に運動・スポーツに関する情報が周知されている状況ではなかった。B 特別支援学校が所在する自治体が主催・後援している案内であれば全体配布するが、それ以外の案内は玄関のパンフレットラックに入れる形で案内をしていた。

C 特別支援学校では、運動・スポーツに関する情報について、外部の団体（行政やスポーツセンターなど）からの案内については、基本的に児童・生徒にチラシ（またはそのコピー）を渡しており、年齢や居住区に制限があるものを除き全体に一律で配布していた。

4.3.4 支援機器開発団体

(1)ヒアリング実施団体概要

盲ろう児者が指や肩等に装着し、デバイスの振動を通じて情報を伝えることができるデバイス（以降、装着型振動デバイス、と呼ぶ）を開発。

(2)具体的な運動・スポーツ等での支援機器の活用方法

①マラソン

装着型振動デバイスを使って“右に危険有”や“段差有”といった重要なサインを事前に伴走者とランナーの間で特定のキーを決めてコミュニケーションを取ることで、短時間のコミュニケーションを実現している。

②タンデム自転車

盲ろう者は後ろに座ることが一般的だが、装着型振動デバイスを用いることで右や左、ブレーキといったコミュニケーションを取ることができるようになり、前に座ってこぐことができるようになる。

タンデム自転車では、自分がハンドルを握って自転車を運転しているという感覚を得られ、盲ろうになる以前の数十年前の感覚をよみがえらせることができ大変に感謝された。

③スキー・スケート・ボルダリング

両手と両足をコントロールする競技を実施するために、装着型振動デバイスを 2 系統で用意して、遠隔からでも指示ができるようにし、事前に施設と協議して、安全にできるよう許可の取得や区画を貸切るなどの対応をしている。

④卓球

右左とシュートさえわかれば手を動かして競技することができるため、装着型振動デバイスでそれらの 3 通りの指示ができれば、卓球を行うことも可能となる。

(3)当該支援機器の利用による効果・課題

先天性の全盲ろうの方は、周囲の状況がわからず常に不安にさらされているが、装着型振動デバイスを使うことで、遠隔からでも見ていることを伝え、コミュニケーションを取ることができるようになると、歩行訓練や一人遊び、食欲増進など社会参加に対しても積極的になることができるようになり、タンデム自転車の大会にも出るようになった。

電子機器（Bluetooth）は混線したり電池が切れたりする場合があります、ICT 機器を用いる際に介助者の情報リテラシーが必要になる。情報リテラシーの高い介助者を育成していくことが重要である。そうでなければ、当事者の安全性を担保することができない。

4.3.5 当事者団体

ある地域の盲ろう者友の会から話を伺った。盲ろう者の福祉向上、盲ろう者が社会参加するために、目と耳の障害がある人やその家族、支援者、福祉関係者などが集まって立ち上げた団体である。盲ろう者の会員は 30 人程、支援者や家族を含めて 150 人程。途中で盲ろうになった方が多い。

(1)当事者団体における運動・スポーツに関する状況

友の会を立ち上げてから、毎年、ボウリング大会を行っている。ハイキングに行ったことや、グランドゴルフも行ったことがある。運動会、フライングディスクも行っている。盲ろう者の会員がどんなスポーツであれば参加できるのかを 1 人ずつに確認するのは難しい。友の会では色々なスポーツの企画を立てて「一緒にやってみよう」と呼びかけを行っている。

(2)運動・スポーツに関するイベントの開催や活動の実施

<ボウリング>

アスリートのように行うのではなく楽しむことを目的に参加する盲ろう者 10 人程で実施したことがある。ガイドレールを左で触りながら、ボールを右手で投げる、ボールがガターに落ちないように、バンパーを使用する、ボールを持ってから投げる位置まで移動する際に支援が必要な方は、支援者と一緒に投げる位置まで歩いて投げる等の工夫をして実施した。

<ハイキング>

盲ろう者 10 人程と支援者 10～20 人程で近くの山を登るといった活動をしたことがある。特別に配慮していることはないが、盲ろう者も安心して歩けるような道を選んだ。

<グラウンド・ゴルフ>

盲ろう者 10 人程と支援者 20 人程で行ったことがある。

カップ(ホール)がある方向をつかむために、支援者の腕の方向を触れるなど、工夫した。盲ろう者もできるということと呼びかけたいと思っている。自身は極力ルール通りにプレーしたいと考えているため、ボールの大きさや、カップの大きさを変えることはしていない。

<運動会>

運動会を開催したのは、2、3 回程度。会員に参加を呼び掛けて実施した。かけっこ、玉入れ、パン食い競争、綱引きなどを行った。障害者の福祉施設の体育館を借りて実施した。

4.3.6 盲ろう者向け相談窓口

盲ろう者への通訳・介助者派遣事業や、通訳・介助者養成研修事業、訓練事業、総合相談支援事業、専門人材養成事業、社会促進事業等を実施している、ある地域の相談窓口（以下、支援センター）から伺った。

支援センターの運営は、地域の盲ろう者友の会が担っており、支援センターに14名が在籍、その内12～13名が盲ろう者からの相談業務に携わっている。

(1)通訳・介助者派遣事業の全体像とスポーツに関連する派遣の状況

通訳・介助者派遣事業では、コロナ前とコロナ後で状況は異なるものの、2019年度には1万件以上の通訳・介助者を派遣していた。内容としては、「買物」が最も多く、次いで「通勤・通学・通所」「通院・入院」となっている。「スポーツ」に関する派遣は約880件であり、利用内容で7番目に多いものとなった。

スポーツに関する派遣の際は、フライングディスク、柔道、ブラインドラグビー、スポーツセンターのジムでの筋力トレーニングなどを目的に派遣制度を利用する方がいる。マラソンやジョギングを目的とした利用も多い。

(2)総合相談支援事業の全体像とスポーツに関連する相談の状況

総合相談支援事業では、盲ろう者本人、家族、通訳・介助者、関係者、盲ろう者の受け入れ機関等からの相談を受けている。2021年度は約400件の相談に対応。「通訳・介助者派遣に関する相談」が最も多く（約180件）、次いで「日常生活に関する相談」が多い（約80件）。相談内容の分類方法に「スポーツ」が無いため、正確な相談件数は分からないものの、相談記録を見ても年に数件程度となっている。一例としてはフライングディスクの大会での通訳体制によるものがあつた。

これまで、地域の障害者スポーツ振興事業（パラスポーツ用具等の貸出、指導員の派遣等）に関して相談を受けることや、制度の紹介をしたことはない。

盲ろう者が参加できる地域の団体やイベントの紹介等についても経験は少なかった。過去に、盲ろう者からの相談でマラソンをしたいというニーズがあつた際に、伴走クラブがあるということを相談の一環で紹介したことはあるが、特定の団体を紹介したことはなかった。

(3)クライミングイベントの開催

支援センターとして、運動・スポーツ等に関数する取組みを積極的に進めてきたわけではないが、コロナ前に主に視覚障害者を対象に活動するクライミングクラブの協力のもと、クライミングの体験会を開催した。クライミングはコミュニケーションを取らなくても比較的参加しやすいスポーツであり、盲ろうであっても参加しやすいと考えた。

4.3.7 障害者施設

(1)ピアリング実施団体概要

盲ろう者の支援を行っている。盲ろう者は必ず通訳・介助者と一緒に、障害者施設に通われている。就労継続支援事業所 B 型のため、メイン業務は仕事だが、仕事だけでは盲ろう者の方にそぐわない部分もあるため、お昼以降に盲ろう者に自由に過ごしてもらう時間を設けている。

職員数、利用者数

- ・ 職員数：11 名（正職員：7 名、アルバイト：4 名）
- ・ 利用者：盲ろう者が 20 名、ろう者も若干名いる。

(2)運動・スポーツ等の提供方法

定期的実施しているのは、タップダンス。現在の参加者は、全盲ろうの方（1 名は少し聴力が残っている）4 名。1 か月に 1 回実施しているが、イベントや行事で舞台披露がある場合は、練習が増える。タップダンスの先生にリズムを教えてもらい、職員が覚えて、盲ろう者に伝える。通訳・介助者がリズムに合わせて盲ろう者の背中や肩をたたき、盲ろう者がそれに合わせて足を動かす。盲ろう者がリズムを覚えるためには、通訳・介助者と盲ろう者の意思疎通が重要なため、練習では毎回同じ通訳・介助者とペアにしている。

空手も実施している。全盲ろうの方 3 名（内 1 人は車いす）が参加。1 か月に 1 回（1 時間）先生が教えに来る。型の動きは、まず先生が見本を見せてそれを通訳・介助者が伝える。その後、先生の修正（足がどれくらい開くか、どれくらい腰をかがめるか等）が入る。盲ろう者が先生の体の動きを触ることで、感覚を学ぶこともある。

マラソン大会に参加する盲ろう者方がいる場合は、事前に実施団体に協力をお願いすることはあったが、連携を取るということまでではない。

(3)各種相談（ピア・カウンセリング等を含む）について

運動に関しての相談は少ない（走ってみたい、という相談があることはある）。心理的な相談が多い。盲ろう者でも、マラソン等いろいろなことができると言っても、気持ちが落ち込んでいる場合はなかなか信頼してくれず、言葉だけで説明するだけではうまく伝わらないことがある。クラブ活動に参加していただくと、他の盲ろう者もできていることを理解できるので、やる気が出るようだ。

4.4 調査結果のまとめと考察

4.4.1 調査結果のまとめ

(1)運動・スポーツの機会の提供状況（頻度・対象者数・場所）

運動・スポーツ等の機会は、学校においては体育や自立活動の授業の他、休み時間等、多様な場面で提供されている。一方、福祉施設や障害者スポーツセンター、個別のスポーツ提供団体では希望者に対して、月に1回～数回の機会が提供されている。このように、学齢期と卒業後では提供状況に大きな差があることが明確に分かった。

○ 運動・スポーツ等提供団体

ランニングクラブでは、月に4回、約10人の盲ろう者（他に視覚障害者含む）に機会が提供されていた。クライミングクラブでは、過去に盲ろう者友の会とイベントを企画したことがあるが、その後、継続的に盲ろう者の利用があるわけではないとのことであった。

○ 障害者スポーツセンター

盲ろう者を含め、障害者等に向け運動・スポーツの機会は日常的に提供されているが、盲ろう者の利用頻度は、月に1回～数回程度であった(A 障害者 SC・B 障害者 SC)。大会前にはもう少し多頻度で利用する盲ろう者もいた(B 障害者 SC)。利用者数は数名か、団体の場合は1団体程度であった(A 障害者 SC、B 障害者 SC)。B 障害者 SCでは月に1回フライングディスクの教室を開催し、盲ろう者が2名参加している。なお、A 障害者 SCでは、盲ろうの利用者数を正確に集計していなかった。

○ 特別支援学校

体育や自立活動の授業で運動・スポーツが実施される。体育や自立活動の授業の他、休み時間や部活動等で提供されている学校もあった。

○ 盲ろう者向け相談窓口

スポーツを目的とした通訳・介助員の派遣が2019年に881件(全体の6.8%)、2020年に469件(全体の5.4%)であった。運動・スポーツに関する相談は、正確な件数は把握されていないが、ごく少数とのことであった。過去にスポーツ関連団体と協力し、盲ろう者向けのクライミング教室を1度開催していた。

○ 障害者施設

運動・スポーツに特化した企画は月に1回程度、ヨガ、空手、タップダンス等複数の種目で実施されており、希望する盲ろう者が3～8名程度参加していた。(障害者施設)

(2)提供されている運動・スポーツ等

学校においてはチームスポーツ/個人スポーツ問わず機会提供がなされている。その他の団体では、主に個人スポーツの機会が提供されている。このように、学齢期と卒業後では提供される競技内容が異なることが示唆された。

○ 運動・スポーツ等提供団体

ランニングと、クライミング、ゴールボールの機会の提供団体の活動が、見受けられた。

○ 障害者スポーツセンター

フライングディスク、水泳、筋力トレーニングが利用されている。

○ 特別支援学校

体育の授業では学習指導要領に基づき運動・スポーツ等が提供されているが、ヒアリングの中では体育・自立活動・部活動について特に以下が挙げられた。

【A 特別支援学校】

- サウンドテーブルテニス、ゴールボール、フロアバレーボール、プール遊び、トランポリン、円周走、リズム体操、散歩・ブランコ（自立活動）

【B 特別支援学校】

- 集団走・持久走、陸上、卓球(部活動)

【C 特別支援学校】

- トランポリン、マット運動、プール遊び、バランス運動、持久走、鉄線走、ボウリング、ボッチャ、サウンドテーブルテニス(部活動)、散歩(部活動)

○ 当事者団体

会員向けのボウリングやグラウンドゴルフ、フライングディスク等の実施機会が提供されている。

○ 盲ろう者向け相談窓口

運動・スポーツ等の機会を日常の相談業務の中で紹介することは、ほとんど無いとのことであったが、クライミングの団体と連携して盲ろう者へクライミング機会を提供している例がみられた。

○ 障害者施設

タップダンス、空手、ヨガ、タンDEM自転車等の機会が提供されている。

(3)運動・スポーツの機会の情報提供や普及の取組

- 今回ヒアリングを実施した団体で、能動的に盲ろう者を対象に運動・スポーツに関する情報提供をしている団体はなかった。盲ろう者向けという形で情報が団体に届くことはなく、団体に届いた障害者全般向け、視覚障害者向け等の案内を団体の利用者全員に向け、メールやチラシラックにおいて案内する形で周知をしていた。

相談窓口では、盲ろう者からマラソンをしたいという相談があった際に、特定の団体ではないものの、伴走支援団体の存在を情報提供した事例があった。一方で、相談窓口で集計している相談内容分類に「スポーツ」は存在しなかった。スポーツの相談を受け付けたり、受け付けた相談を障害者スポーツセンターや障害者スポーツ協会等に連携し具体的な相談は障害者スポーツセンターと障害者スポーツ協会で受けるといった対応を行えるような取組みはなされていなかった。

(調査で得られた情報)

- ・ 相談内容の集計における相談種別で、「スポーツの種別」は設けていないため、スポーツに関する相談件数はすぐ出てこないが、相談記録を見ても、スポーツに関する相談は少数である。(盲ろう者向け相談窓口)
- ・ これまで、地域の障害者スポーツに関する事業(用具等の貸出、指導員の派遣等)に関して相談を受けたり、制度の紹介をしたことはない。盲ろう者が参加できる地域の団体やイベントの紹介等についてもあまり経験はない。過去に、盲ろう者からの相談でマラソンをしたいというニーズがあった際に、伴走クラブがあるということを相談の一環で紹介したことはある。特定の団体を紹介したことはない。(盲ろう者向け相談窓口)

(4)運動・スポーツ実施時の工夫・配慮

【視覚・聴覚情報の双方の取得が難しい方には触覚情報を提供】

- 視覚・聴覚情報の双方の取得が難しい方に対しては、本人に直接触れる、道具を介して伝達するといった、触覚を用いた方法で運動・スポーツ等実施時に必要な情報を提供していることが分かった。
- 視覚・聴覚情報の何れかを取得可能な方に対しても、補足情報として触覚の情報は活用されていた。

(調査で得られた情報)

- ・ クライミングでは、クライマー(盲ろう者)の腰に紐をつけて垂らし、下にいるスタッフからの合図は紐を引っ張ることで伝える。(クライミングクラブ)
- ・ (体に付ける)装着型振動デバイスを使うことで、遠隔からでも見ていることを伝え、コミュニケーションを取ることができるようになると、(中略)タンデム自転車の大会にも出るよう

になった(支援機器開発団体)

- ・ 全盲ろうの方は、センターの指導員が見本を見せて体を触ってもらってひじや肩の位置、リリース位置を認識してもらう。アキュラシーの種目をする際に、背中に丸(アキュラシーゴール)を書いて、この辺に飛んだよ、と教えている。(B 障害者 SC)
- ・ カラビナにチェーンを繋いだ道具を学校で自作し、周回したらチェーンをカップに入れることで残りの周回数を把握できるようにしている。(C 特別支援学校)
- ・ 全盲ろうの方に関しては、一度(筋力トレーニングの)マシンを全部触ってもらい、トレーニング室内を一周回って配置を紹介した。点字を触ってもらい、重りの重さ等を教えている。(B 障害者 SC)
- ・ 盲ろう者に泳ぎ方のフォームをイメージしてもらうために、口頭だけではなくて、小さい人形を用いて、腕のフォームや、足の形を触ってもらいながら指導できるような体制が出来たらいいというような話は指導員間でしている。(B 障害者 SC)

【視覚・聴覚情報のいずれかを取得できる方には、その機能を活かすように工夫】

- 視覚・聴覚情報の何れかを取得可能な方に対しては、情報取得が可能である手段を通じて、情報提供や工夫がなされていることが分かった。

(調査で得られた情報)

- ・ 集団走や持久走をするときには、他の児童と接触しないよう、白線の上を走ってもらうことにしている。短距離走の時は、インコース・アウトコースなど、本人に決めてもらっている。(B 特別支援学校)
- ・ 卓球において盲ろうの生徒が見える場所にボールが入れば打ち返せるため、教員側は見えるところに入るようにトスを打つという配慮をしている。(B 特別支援学校)
- ・ ボッチャについては見やすいようにコーンを目標にし、タンバリンなどの音で示してあげることで距離を提示している。ミニチュアを使って誰がどれだけ近くに投げられたか伝達している。(C 特別支援学校)
- ・ 体育館だと普段、補聴器で拾える音が拾いにくい。相手の声が聞こえないため、「いくよー」「はい」など、相手の声がロジャーを介して補聴器で聞き取れるようにした。(A 特別支援学校)

【それぞれの盲ろう者が参加しやすいルールで実施する工夫】

- 盲ろう者だからこうする、という一律のやり方に対応するのではなく、それぞれの盲ろう者の障害の状況等に合わせて、実施しやすいルールで既存の運動やスポーツを楽しむような工夫がされていた。

(調査で得られた情報)

- ・ （クライミングには）本来は、「同じ色のホールドだけで上る」などのルールがあるが、盲ろう者は視覚でルートを理解することができないため、地面で足がつく状態で触っていいホールドを確かめ、身体の動きを理解してもらった。（クライミングクラブ）
- ・ （ゴールボールについて）しゃがんだ姿勢になってボールが聞こえた方に飛びつくというのがゴールボールのやり方であるが、（弱視難聴のある児童は）しゃがんだ状態を保つことが難しいため、足を開いて座り、手の届く範囲でボールをとる形で参加している。座った状態で参加している。（A 特別支援学校）
- ・ 盲ろうの児童ができる動きの中で楽しめるような運動・スポーツを作りたい。運動会にはそういったものがある。皆はバランスボールの上を音に合わせて飛んでいる中で、盲ろうの児童は好きなように飛んでいる。（A 特別支援学校）

【団体競技で活用するコート上の設備を使ったコミュニケーション】

- 盲ろう者のゴールボール体験会では、中心の選手が左右の選手に指示を出す際に、事前に決めた合図を背面にあるゴールを揺らすことで伝え、指示をだしていた。

（調査で得られた情報）

- ・ 3 対 3 の団体競技であるゴールボールを盲ろう者が行う際には、両チームともに中心の選手に視覚障害者を配置し、左右に盲ろうの選手を配置している。盲ろうの選手は音が聞こえず守備をするのは危ないので中心の選手のみが守備を行う。一方、攻撃の時は中心の選手が左右のどちらかの選手にボールを渡して投げてもらうが、中心の選手が左右の選手にボールを渡す際、左右の選手には常にゴールポストを触っておいてもらい、中心の選手がボールポストを通じて振動を左右の選手に伝えることで指示を伝えている。（1 回振動させた場合は、その場に座ってもらいパスを待ってもらう。2 回振動させた場合は中心までゴールポストを触りながら来てもらいボールを手渡しする）（ゴールボールクラブ）

【通訳・介助員も含めた情報保障の配慮】

- 大会で全体アナウンスを行う際に、盲ろう者の通訳・介助員がろう者である場合もあるため、ろう者の通訳・介助員と共に来ている盲ろう者をビブス等で把握できるようにしておく必要があることが指摘された。

（調査で得られた情報）

- ・ FD の大会において大会側は、競技者（ろうの方）向けに手話通訳を用意していたが、盲ろう者が帯同したろうの通訳・介助者に対するフォローの体制がなく、ろうの通訳・介助者に大会の全体アナウンスなどの情報が伝わらないことがあった。（支援センター）

4.4.2 考察

(1)運動・スポーツ等実施のための課題

【当事者同士の情報発信や指導者の育成・派遣等ができるネットワークの不足】

- 盲ろう者や家族・介助者から、運動・スポーツ等に関する情報（実施可能な場所や運動・スポーツ等の例等）が伝わりにくいという意見が複数あった。
- 盲ろう者に運動・スポーツの情報が届き、実施に至るには、提供団体からの情報発信や申込方法の工夫に加え、盲ろう者が信頼する当事者団体のフォロー等や、盲ろう者同士、通訳・介助員等が運動・スポーツの経験を共有し、誘い合える環境が重要である可能性が示唆された。

（調査で得られた情報）

- ・ 外部のスポーツ団体等から情報が日常的に届くということはない。（特別支援学校）
- ・ 教員による情報の収集・提供、卒業後は本人の情報へのアクセス環境についても、今後の課題となるかと思いました。（特別支援学校）
- ・ 盲ろう者に限ってという形でセンターに情報が届いたことはない。視覚障害、聴覚障害対象の団体や大会の案内がたまに来ることはある。（盲ろう者向け相談窓口）
- ・ 個人利用で来られる方が中心のため、これまで他団体への紹介や連携を行ったことはない。（障害者スポーツセンター）
- ・ 募集を載せる→ヘルパーや介助者が盲ろう者の自宅等に来た時にお便りを確認し盲ろう者に伝える→盲ろう者が参加を検討→支援者がいるタイミングで申し込み、の流れとなるため、盲ろう者に情報が届き、申し込みをするまでに時間がかかる。2回目の際は、誰に情報が届いているのかを友の会が探ってくれたり、参加を打診してくれたため、参加者がスムーズに増えた。（クライミングクラブ）
- ・ 盲ろう者でも、マラソン等いろいろなことができると言っても、気持ちが落ち込んでいる盲ろう者は信頼してくれない。（中略）盲ろう者同士の誘い合い、仲間同士のコミュニケーションや信頼できる人からの誘いが大事。職員に心を開いてくれなくても、障害を持つ者同士で、気持ちが前向きになり、切磋琢磨できる。（障害者施設）
- ・ 盲ろう者は、支援者（盲ろう者向け通訳・介助員養成講座を受けた人）と一緒にあれば何でもできる。（障害者施設（団体））

【他の参加者・利用者と状況理解や意思疎通のタイミングが合わないこと】

- 盲ろう者と他の参加者が、同じ空間で運動・スポーツ等を行う際、盲ろう者が通訳を利用することもあり、情報保障として通訳を介するため状況の理解や他の利用者との意思疎通のタイミングが合わず、孤独感を感じてしまうといった課題があることが示唆された。
- 盲ろう者と他の利用者が、同じ空間で運動・スポーツ等を行う場合、他の利用者が盲

ろう者による利用を認識できず、盲ろう者の方に冷たい態度をとってしまうことがあることが示唆された。

(調査で得られた情報)

- ・ ある盲ろう者の方は、旦那さんと一緒にスクールに参加した。楽しんでいる様子ではあったが、継続しなかった。その理由は確認できていないが、友の会の時はゆっくり進んで交流をされていたが、スクールに参加された時は、スピード感があったため、それが理由だった可能性がある。(クライミングクラブ)
- ・ 公園をランニング中に、他のランナーやサイクリングしている人から、盲ろう者と伴走者が2人並んで走っているのが抜にくいというクレームがあった。(ランニングクラブ)

【学齢期と比較し、学校を卒業すると地域からの運動・スポーツ等の機会提供が減少】

- 特別支援学校では日常的に体育や自立活動の授業や、部活動などの教育課程外の活動等で運動・スポーツ等に触れる機会があり、また教員が工夫を凝らし、運動・スポーツ等のルール・やり方の変更、安全性の高い用具や状況を理解出来るような用具の活用、人員によるサポートの充実等がなされていた。
- 一方、スポーツ分野で盲ろう者に関わる団体である障害者スポーツセンターやクライミングの提供団体においては、盲ろうの利用者や運動・スポーツ等実施の機会提供は月に数回程度であった。
- 卒業後は運動・スポーツ等へ参加する機会や集団で運動・スポーツ等を行う機会が減少するという声があった。盲ろう者が卒業後にも運動・スポーツ等に参加できるような仕組みの強化の必要性が示唆された。

(調査で得られた情報)

- ・ 卒業後は本人の情報へのアクセス環境についても、今後の課題となるかと思いました。(A 特別支援学校)
- ・ 盲ろう者の利用者は4名おり、視覚、聴覚両方の障害者手帳をお持ちの方である。(B 障害者SC)
- ・ (クライミングについて)盲ろう者友の会のイベント以外では、3名の盲ろう者の参加があったが、続かなかった。(クライミングクラブ)
- ・ 施設ではタップダンスを1か月に1回実施。イベントや行事で舞台披露がある場合は、練習が増える。(障害者施設)

【盲ろう者の参加を勇気づける配慮】

- 盲ろう者が安心して参加できるよう、運動・スポーツの機会に盲ろう者が参加した実績等がある場合はその旨を伝えることや、盲ろう者の誘い合いが重要という観点から、盲

ろう者が自身の運動・スポーツの経験等を共有できる場やネットワークの構築が重要であることが示唆された。また、複数の参加の機会がある場合、毎回同じ通訳・介助員が担当したりする配慮を行う等の工夫が必要であることが示唆された。

- 家族等が盲ろう者と一緒に参加することで、家族から障害者スポーツセンター等へ情報提供を行うことで、盲ろう者がより参加しやすくなることが示唆された。参加を勇気づけるためには、盲ろう者についての社会的周知も重要であることが示唆された。

(調査で得られた情報)

- ・ クラブ活動に参加していただくと、他の盲ろう者もできていることを理解できるので、やる気が出るようだ。盲ろう者同士の誘い合い、仲間同士のコミュニケーションや信頼できる人からの誘いが大事。職員に心を開いてくれなくても、障害を持つ者同士で、気持ちが前向きになり、切磋琢磨できる。(障害者施設)
- ・ 盲ろう者がリズムを覚えるためには、通訳・介助者と盲ろう者の意思疎通が重要なため、練習では毎回同じ通訳・介助者とペアにしている。(障害者施設)
- ・ 盲ろう者が、クライミングがどんなスポーツであるかわからず、クライミングを怖いものなのではないか、自分に関係ないだろう、と思っていたようであった。2回目は、参加者からの口コミもあり、参加者の募集がスムーズだった。盲ろう者に情報が届き、申し込みをするまでに時間がかかる。2回目の際は、誰に情報が届いているのかを友の会が探ってくれたり、参加を打診してくれたため、参加者がスムーズに増えた。(クライミングクラブ)
- ・ 他のランナーやサイクリングをしている人から、盲ろう者と伴走者が2人並んで走っているので抜きにくいというクレームがあった。伴走者が他のランナーにどいてくれという事に対してクレームがくることもある。(ランニングクラブ(団体))

【試合相手についての情報保障】

- 試合の前に対戦相手の情報を伝えるための時間の確保や、工夫が必要であることが示唆された。

(調査で得られた情報)

- ・ 視覚から相手の情報を得られないため、試合前に相手がどんな人かを知ることができない。試合が終わった後に、どんな対戦相手だったのかを通訳・介助者から知ることになる。試合の前に相手の情報保障をできれば良いが、時間の関係から実現が難しい面がある。(障害者施設)

第5章 個人ヒアリング調査

5.1 調査の目的と方法

盲ろう者が実施している運動・スポーツの実態について以下を把握することを目的に日ごろから運動やスポーツを実施している個人へのヒアリング調査を行った。

- ① 盲ろう者が競技により参加する際の現状、の課題や改善点を把握する。(ルール・規定・大会運営面等)
- ② 盲ろう者が運動やスポーツを楽しむために、地域資源(スポーツ施設や、スポーツ提供団体、施設、学校、放課後デイサービス、等)における現状、課題や改善点を把握する。

団体ヒアリングの結果を踏まえ、盲ろう者に配慮したルール設計が行われているスポーツ等を実際に実施している個人の方に対してヒアリング調査を行った。

団体のヒアリング調査に協力した団体から、当該スポーツに積極的に取り組んでいる個人の紹介を受け、ヒアリングを進めた。また、特別支援学校については、本事業の委員からの紹介を受けた。スポーツの種目は満遍なく網羅するように配慮し、水泳、ボッチャ、ハンドサッカー、卓球バレーなどに取り組む個人に対してヒアリングを行った。

ヒアリングは、主にオンラインで実施した。オンラインでの実施が難しい場合や、本人等が対面を希望する場合は、本人と通訳・介助者同席のもと対面で実施した。先方の希望により電話でヒアリングを行うケースもあった。また、介助者や保護者がヒアリングに同席した場合には、介助者や保護者の視点で運動・スポーツの実施時の工夫点や課題などを伺った。

ヒアリング項目は、調査目的に沿うよう、個人の障害の程度や運動・スポーツの実施実態を把握するとともに、運動・スポーツ実施時の工夫や抱えている課題を拾い上げられるように半構造化ヒアリングとした。

5.2 項目と調査対象

調査対象は、盲ろう児・者の区別を行ったうえで、実施競技種目に偏りが出ないように配慮しながら選出し、実施した。介助者にもヒアリングを実施した。

記号	対象者	年齢層	障害種別	在学区分	ヒアリングをした運動・スポーツ	ヒアリング実施日
A	本人	30代	弱視難聴	卒業	柔道	2023/6/9
B	本人	30代	弱視ろう	卒業	柔道、筋力トレーニング、アーチェリー、自転車、マラソン、ボウリング、綱引き、グランドゴルフ、バスケットボール、フロアバレー、空手、グランドソフトボール、剣道	2023/11/19
C	本人	60代	弱視難聴	卒業	フライングディスク(全スポ参加選手)	2023/10/29
D	本人	10代	弱視ろう	在学中	立ち幅跳び、100m走(全スポ参加選手)	2023/10/28
E	本人	70代	弱視難聴	卒業	砲丸投、ソフトボール(全スポ参加選手)	2023/10/29
F	本人	50代	弱視ろう	卒業	トライアスロン、ボルダリング	2023/10/17
G	本人	10代	全盲ろう	在学中	自転車、ストレッチ、マラソン、トランポリン、乗馬、水泳	2023/11/30
H	本人	20代	弱視ろう	在学中	マラソン、水泳、タンデム自転車、フライングディスク、ボウリング、スキー、卓球、バレーボール、空手、柔道	2023/10/5
I	本人	50代	弱視ろう	卒業	水泳、マラソン、タンデム自転車、陸上競技、柔道、フライングディスク	2023/10/16
J	本人	40代	弱視難聴	卒業	ブラインドラグビー	2023/11/5
K	本人	10代	弱視難聴	在学中	卓球、陸上競技	2024/1/12

L	介助者	20代	全盲ろう	卒業	ブランコ、自転車	2023/12/7
M	介助者	10代	全盲難聴	在学中	筋トレ	2023/12/11
N	本人	50代	弱視難聴	卒業	フライングディスク、水中ウォーキング、エアロバイク、筋トレ	2023/12/25
O	介助者	30代	全盲ろう	卒業	ペダルバギー、ボール投げ	2024/1/5
P	本人	70代	弱視ろう	卒業	ハマピックスライニングディスク	2024/1/6
Q	本人	60代	全盲ろう	卒業	水泳、筋トレ、散歩	2023/12/19
R	本人	40代	弱視難聴	卒業	ブラインドテニス	2023/12/19
S	介助者	10代	弱視難聴	在学中	スキー、卓球	2024/1/12
T	介助者	30代	全盲難聴	卒業	ウォーキング、プール	2023/12/20
U	介助者	20代	弱視ろう	卒業	トランポリン、プール	2023/12/22
V	介助者	50代	弱視難聴	卒業	ウォーキング、散歩	2024/1/9
W	介助者	10歳未満	全盲ろう	在学中	ボッチャ	2024/1/15
X	指導者	—	—	—	柔道	2024/2/1
Y	大会運営者	—	—	—	フライングディスク	2024/2/1
Z	本人	50代	全盲ろう	—	マラソン	2024/2/14
a	本人	60代	弱視ろう	卒業	卓球、陸上競技	2024/3/10
b	大会等企画者	—	—	—	運動・スポーツ全般の体験会、大会	2024/3/6

※介助者には家族も含まれる

※介助者に対するヒアリングの場合、記載している年齢は盲ろう者の方の年齢

5.3 個人ヒアリング調査結果

ヒアリングで情報を得られた運動・スポーツ等のうち、主なものについて、運動・スポーツ等の種目毎に以下の項目の整理を行った。

5.3.1 個別の運動・スポーツ等について

(1) マラソン・ランニング

1) ヒアリング対象者について

1. 全盲ろう 10代 G (在学中)
2. 弱視ろう 30代 B (卒業後)
3. 弱視ろう 20代 H (在学中)
4. 弱視ろう 50代 I (卒業後)

2) 運動・スポーツ等の実施方法・工夫

<実施状況・方法>

- 走るというよりは歩いている。走り方・走る意味についてもあまりよく分かっていない。走るとき先生が背中を押して補助したりするが、やらされている感を感じると大変嫌うので、座り込んだりしてしまう。その日の気分に応じて歩くこと以外も含めてやる内容を変えている。(G)
- 今は走るのが苦手。あるマラソンの大会で10km 走ったことがある。通訳介助者ではなく伴走者とロープをつないで一緒に走った。(B)
- 伴走クラブの練習に月に1、2回参加(H)
- 伴走クラブで伴走者と一緒に走っている。走る距離は10km。去年までは1か月に4回程度通っていた。エントリーした大会が近づくにより高頻度に通う。(I)

<工夫>

【盲ろう者とわかるビブスの着用】

- 「盲ろう」と書いてあるビブスを着て、ガイドロープを二重にして伴走者と一緒にもって走る。(伴走者は「伴走者」と書かれたビブスを着る)(H)

【装着型振動デバイスを活用した合図】

- 走るときに専用の装着型のデバイスを使うこともある。前を走っている人の情報(進む方向や、止まるか等)が目の代わりに指につけた装置を通じて伝わるため、ガイドロープ無しで走ることができる。(G)

3) 運動・スポーツ等の実施時や大会参加の際の課題

【大会の際に周囲の状況をもっと知りたい】

- 走っている際に周りの情報を教えてもらいたい。例えば給水の時に水だけでなく食べ物
物が置いてあることがある。そうした情報も得られると良い。(B)

(2) タンデム自転車/2人乗り自転車

1) ヒアリング対象者について

1. 弱視ろう 20代 H (在学中)
2. 弱視ろう 50代 I (卒業後)

2) 運動・スポーツ等の実施方法・工夫

<実施状況・方法>

- 伴走クラブのスタッフの方 2 人がタンデム自転車を持っているため、ランニングクラブのメンバーと乗ることがある。目が見える方が前に乗り、後ろに盲ろう者が乗る。楽しむ頻度はあまり決まっていない。(H)
- 現在はやっていないが、かつて交流会があつて走ったことがある。今でも乗りたいと思う。(I)

<工夫>

【合図もしくは装着型振動デバイス活用によるコミュニケーション】

- 目が見える方が自転車の前に乗り、後ろに盲ろう者が乗る。体に触れるなどの合図、もしくは装着型振動デバイスのどちらかを使って前後の人でコミュニケーションをとる。(H)

3) 運動・スポーツ等の実施時や大会参加の際の課題

【手を使う合図を出すときに自転車が不安定になること】

- 合図は自転車の走行中に手を動かす必要があるため、自転車が不安定になり、倒れやすくなる。合図は場合によっては危ないため、装着型振動デバイスの方が安心できる。(H)

【タンデム自転車を所有していないこと・同乗者の不足】

- 現在、同乗してくれるパイロットがおらず、自転車もないので走れていない。(I)

(3)水泳、水遊び

1)ヒアリング対象者について

1. 全盲ろう 10代 G (在学中)
2. 全盲ろう 10代 L (在学中) 介助者
3. 全盲ろう 60代 Q (卒業後)
4. 全盲難聴 30代 T (卒業後) 介助者
5. 弱視ろう 20代 H (在学中)
6. 弱視ろう 50代 F (卒業後)
7. 弱視ろう 50代 I (卒業後)
8. 弱視ろう 20代 U (卒業後) 介助者
9. 弱視難聴 40代 J (卒業後)

2)運動・スポーツ等の実施方法・工夫

<実施状況・方法>

- プライベートレッスンをしてくれるスクールに通わせていた。顔を付けたり潜る練習、バタ足の練習をさせていた。第二次成長に伴う身体の変化で、プールに行かなくなってしまった。水に入ること自体は好き。機会があれば行きたいという話を別の保護者としている。(G)
- 中学時代は障害者水泳指導のアスリートの先生が近所にいて、たまたま紹介を受けて週に一回程度、近くのプールで指導を受け、泳げるようになった。コロナを機にできなくなってしまった。(L)
- スタートの時(手をたたく)やターンの時(棒でたたく)の合図によって競技に参加できている。もともとあるルールで実施している。(Q)
- 水中ウォーキングはコースロープを触りながらひとりで歩いており、横に介助者が付く形で実施をしている。対向から人が来たら知らせている。歩行の専用のコースもあるが、高齢者の利用が中心でペースが遅く、避けたり追い越したりすることも難しいため、自由なコースで歩いている。(T)
- 小学生の頃に水泳教室に通っており、他の子どもと一緒に教わった。手話ができる指導者がいなかったなので、母親が通訳をした。(H)
- 更衣室まで施設の職員に案内してもらい、水の中では単独で泳いでいる(主にクロールと平泳ぎ)(I)

<工夫>

【プール施設への問い合わせと相談】

- 事前に施設に対しメールで問い合わせ、自分の障害等の状況や、盲導犬待機の場所を相談。盲導犬は観覧席で通訳者と待機させている。プール以外であれば入っていいように

してもらっている。(I)

【周囲への声掛け】

- 周囲の泳いでいる人たちに対しては、監視の施設担当員から、盲ろう者が泳いでいるので避けるように、声がけいただいている。(I)

【専用のコースの設定】

- 介助者から誰も泳いでいないレーンを探してもらったり、視覚障害用のレーンで泳いでいる方に声をかけて譲ってもらったりして、1人でレーンを使えるようにしている。(F)

3)運動・スポーツ等の実施時や大会参加の際の課題

【盲ろう者用のコースがないこと】

- 障害者スポーツセンターでは、プールに知的障害者用のコースや視覚障害者用のコースなどもあるが、盲ろう者用のコースがないため、自分が盲ろう者であることに気づいてもらえず、トラブルになることもある。盲ろう者用のコースがあると助かる。(F)

【スタート時の課題】

- 水泳に関してルールに対しての要望があるわけではないが、音が聞こえる競技者と比べると、盲ろう者への（スタートの）合図は少し遅れが出るので、不公平さを感じる。(Q)
- 水泳をやっていたのが小学生から中学生のときで、一般校に入っていた時であったが、スタートのピストルの音が聞こえない。少し聞こえたとしても1～2テンポ遅れてしまっていた。そのため、リレーでは一番になることを敢えて避けていた。(J)

【広い更衣室や個室の整備】

- 更衣室に介助者と一緒に入れる個室があればいいが、他の方と一緒にいる場合、着替えるとスペースを取ってしまう。狭いと接触の可能性があるので、個室があると助かる。ロッカーも大きい方が助かる。(T)

【家族の負担】

- 親も水に入らなければならず、自宅からも遠いため家族の負担が大きかった。(L)

【その他の課題】

- 周囲の理解は増えてきているが、混んでいる時間は案内いただくのが難しい。(I)

4)当運動・スポーツを楽しむ方が増えるために今後必要な配慮や環境整備

- プールの底にも点字ブロックのようなものがあれば、コースロープを触らなくてもまっすぐ歩けて良いと思う。(T)

(4)柔道

1)ヒアリング対象者について

1. 弱視ろう 30 代 B (卒業後)
2. 弱視ろう 20 代 H (在学中)
3. 弱視難聴 30 代 A (卒業後)

2)運動・スポーツ等の実施方法・工夫

<実施状況・方法>

- 小学 5 年の時から実施。一般高校の柔道場を借りて稽古している。(B)
- 本当はやりたいが怖い。情報が得られにくいスポーツだと思う。相手の顔が近くにくるのでぶつかるイメージが強く、怖さを感じる。突然来るものがとにかく怖い。(H)
- 海外の柔道協会に所属。柔道は身体で感じるスポーツであるため、視覚や聴覚の障害の有無に関わらず共に練習することが可能である。視覚が大きく低下した代わりに、他の感覚が鋭くなった。柔道において手の感覚は重要であるため、むしろ良い方向に働いた。(A)

<工夫>

【必要な物や設備、コーチの配置場所の固定】

- 視覚障害がある選手に危険がないように、練習場では、練習に必要な物や設備の配置、コーチが立つ位置等を固定し、視覚の障害があるアスリートも介助なしに空間を把握できるようにされていた。(A)
 - 一方、初めて訪れる場所は物や設備の配置を把握できていないため、練習を開始する前に配置を教えてもらう必要がある。しかし、視覚障害のある人にはそのような介助が必要であるという認識が薄い場合もある。(A)

【柔道着に盲ろう者とわかる刺繍】

- 審判が盲ろう者を認識できるように、柔道着の両肩から 15cm 位のところに赤い円形マークや黄色い円形マークをつけて、背中のゼッケンの中央から 7cm のところに青色の円マークを道着に縫い付けている。(B)

【審判への事前の周知】

- 段を取るため毎月試合がある。そこでは自分で赤線まで移動しなければならない。担当の審判に盲ろう者の選手がいるということを事前に伝え、組んだ状態から始めるようにしてもらう。盲ろう者のことを理解していない審判がいるときは、相手にも前もって伝え、相手から審判に伝えてもらうように協力を依頼することもある。(B)

【身体を触ることによる技の研究・コミュニケーション】

- 技の研究をするときには、組になった二人の最初から技に入って投げた状態までの一連の身体の動きを触って確認している。(B)
- 指導者から技が完璧と認められたら、背中に手で丸を書いてもらう。(B)

【審判による合図】

- 審判が手のひらに数字等のサインを書いてもらうことで、得点や勝敗を伝えてもらう。(B)

3)運動・スポーツ等の実施時や大会参加の際の課題

【審判の協議内容の把握が難しい】

- 赤線の中で審判とのコミュニケーションがとりにくいことが一番に挙げられる。例えば、相手が、視覚障害者や健常者のとき、審判が2、3人で判定内容を話すところがある。その内容が分からない。(B)

4)当運動・スポーツを楽しむ方が増えるために今後必要な配慮や環境整備

- 柔道を他の盲ろう者がやりたいと思った場合、筋力トレーニングが必要。盲ろう者への理解がある指導者が近くにいると良い。最初は怪我をするリスクは高いので投げないが、ゆっくり投げて、受け身ができるようになり、技も覚えたら乱取り試合をする。基礎から覚えていくと段々楽しくなる。(B)
 - 怪我をするリスクがあるので受け身が一番大事。相手に投げられたら一番大事な頭を守るために、無理なく手を放し、手のひらを床に当てて音を響かせるようにする。頭はへそを見るようにして守る。受け身の後は座った状態から受け身を始める。次に立った状態から受け身、膝を立てての受け身、横受け身などを習得する。基礎の後に寝技の基本をやる。いろいろやった後に立った状態で立ち技の指導を受ける。(B)

補足)筋力トレーニング実施の際の留意点・工夫

団体ヒアリングにおいて、施設が筋力トレーニング機会を提供する際の留意点に以下が挙げられた

- 全盲ろうの方に関しては、一度マシンを全部触ってもらいトレーニング室内を一周回って配置を紹介した。点字を触ってもらい、重りの重さ等を教えている。(B 障害者SC)

(5)フライングディスク

1)ヒアリング対象者について

1. 弱視ろう 20 代 H (在学中)
2. 弱視ろう 70 代 P (卒業後)
3. 弱視難聴 50 代 N (卒業後)
4. 弱視難聴 60 代 C (卒業後)

2)運動・スポーツ等の実施方法・工夫

<実施状況・方法>

- 盲ろう者通訳・介助員から情報保障をしてもらい大会に参加した。(実施に際して)特に困ったことはなかった。(H)
- 家の中で 5m のスペースを見つけて練習している。障子に当たって障子が破けないように、障子の前に、ネットを張って練習している。(P)
- 6、7 年やっている。以前、砲丸投げをやっていて、記録が下がってきたので別の種目をやろうと思ったのがきっかけ。(N)
- ディスタンス、アキュラシー共にルールの変更はなく実施している。補聴器をつけていれば、聴覚については問題ない。(C)

<工夫>

【自作の道具を使った練習】

- 高さのある台に子ども用のフラフープを付けた自作のアキュラシーゴールを用いて、練習している。今年は初めてディストリート・セブンの競技に出場するため、アキュラシーゴールを 7m 離して投げて練習した。(C)

【投げる方向や外した位置の指示】

- (アキュラシーをした際) 通訳・介助員が手を動かして、方向や、どのように外れたかを教えてくれた。(H)
- 投げたディスクがゴールに入らなかった場合、どちらにずれたのかを、○を書いて教えてくれる。(P)

3)運動・スポーツ等の実施時や大会参加の際の課題

【アキュラシーゴールの見えにくさ】

- アキュラシーゴールの輪が光に反射して見えにくく、投げづらいときがある。ただ、色は見やすさに関係ないと思う。(C)

【障害毎のクラス分けがないこと】

- ルールについて、晴眼者と視覚障害者とのクラス分けがないのが一番不満。ハンディキャップがあり不公平に感じる。(N)

【大会による配慮の有無の違い】

- 大きな大会になればなるほど、配慮が行われているが小さい大会では、そういった配慮が行われていないところもある。配慮や工夫の方法を全国で統一してほしい。(P)

(6)ボルダリング

1)ヒアリング対象者について

1. 弱視ろう 50代 F (卒業後)

2)運動・スポーツ等の実施方法・工夫

<実施状況・方法>

- ボルダリング大会に参加している。ボルダリング大会では、視覚障害の方は音声情報を頼りにして登るが、盲ろうの場合は石の形のみを頼りに上る。(F)

3)運動・スポーツ等の実施時や大会参加の際の課題

【盲ろう者に不利な状況での大会参加】

- ボルダリング大会では、視覚障害の方は周囲の声を頼りに掴むべき石をつかんで登っているが、盲ろうは石の形を頼りに上るしかない。視覚障害の方が音を聞こえない状態で競技するような種目があれば、盲ろうと視覚障害が同じカテゴリで競い合うことができる。(F)

4)当運動・スポーツを楽しむ方が増えるために今後必要な配慮や環境整備

【ルールの変更】

- ガイドなどを必要としないボルダリングは、最も盲ろうが参加しやすい競技だと感じている。競技設計次第で、盲ろうの方でも視覚障害の方と対等に競技できる可能性があるのも、より多くの盲ろうの方がボルダリングを楽しめるようになっていくと感じる。(F)

(7)ボウリング

1)ヒアリング対象者

1. 弱視ろう 70 代 P （卒業後）
2. 弱視難聴 50 代 V （卒業後）介助者
3. 当事者団体（プレヒアリング）

2)運動・スポーツ等の実施方法・工夫

<実施状況・方法>

- ボウリングのイベントに招待されて参加した際に、投球補助スロープ（ボールを押すと転がるレール）が設置されており、活用して実施したことがある。自分でボールを投げるのではなく、ボールを転がして、実施した。（V）
- ピンが何本倒れたかは、職員が教えてくれた。（V）
- アスリートのように行うのではなく楽しむことを目的に参加する盲ろう者 10 人程で実施したことがある。ガイドレールを左で触りながら、ボールを右手で投げていた。ボールがガターに落ちないように、バンパーを使っていた。（当事者団体）

<工夫>

【触覚を活用した状況把握】

- ある障害者スポーツセンターには、残りのピンの位置が、触れてわかるようにボールの取り出し口の傍に、下からピンの模型が残りのピンの位置に合わせて出てくるような仕組みがある。そういう仕組みがあると良い。（P）
- ボールを持ってから投げる位置まで移動する際に支援が必要な方は、支援者と一緒に投げる位置まで歩いて投げていた。スペアを狙う 2 頭目を投げる際には、ピンの位置を把握するために、支援者に手のひらにピンの位置を示してもらい、把握できるようにした。（当事者団体）

3)運動・スポーツ等の実施時や大会参加時の課題

- 個人として以前、視覚障害者のボウリング大会に出た際、ボックスの中に通訳者は入っていけないと言われた。これでは、ボックスに配置される競技役員から説明を受けたり、競技役員に残りの方向やスコアを確認したりすることができないため、特例として、通訳者も一緒にボックス内に入ることを認めてもらった。（当事者団体）

(8)100m 走

1)ヒアリング対象者

1. 弱視ろう 10 代 D (在学中)
2. 弱視難聴 40 代 R (卒業後)

2)運動・スポーツ等の実施方法・工夫

<実施状況・方法>

- 日常の練習としては、走るフォームを確認しながら走り込みを行った。前は、学校で毎日走っていたが、今は時間がない。(D)
- 今回、視覚障害の方でのエントリーだが、聴覚障害の方でエントリーをしていたら早い人が多いため、全国大会参加は難しかったかもしれない。中学の時に、視覚障害の方でエントリーすることを先生から薦めてもらった。(D)
- 20 歳くらいの時に、ある大会に出場した。100m、400m に視覚障害者の枠で出場した。当時は通訳・介助員の制度を利用できなかったため、通訳・介助者ではなく障害者スポーツ協会の方と一緒に参加をした。当時は補聴器をつけていたので、障害者スポーツ協会の方に補聴器に話しかけてもらった。(R)

<工夫>

【スタートの合図に関する工夫】

- スタートランプを使用することで、視覚障害部門の 100m 走に他の走者と共に走ることができている。(D)

3)運動・スポーツ等の実施時や大会参加時の課題

【支援者が競技場内に入れない】

- ある大会に出た際、当時はスタートの際、支援者が競技場内に入れないというルールがあった。位置につくところまでは大丈夫だが、その後のスタートの合図を支援者に助けてもらうことができなかった。主催者と相談し、光と音両方でスタートをすることをお願いし、練習をした。どちらかだけだと心配だった。ふたつあることで、より分かりやすくなったが、音や光の情報を掴めるか不安だった。(R)

4)当運動・スポーツを楽しむ方が増えるために今後必要な配慮や環境整備

【支援者にスタートの合図を覚えてもらうこと】

- スタートのとこまで支援者が一緒に来て、スタートの合図をしてもらえると助かる。音と光でスタートの合図を出してもらったが、どちらもあやふやなので、音や光をつかめるかなという心配があった。肩や背中をたたいて合図をしてもらえると良かった。(R)

(9)中長距離走

1)ヒアリング対象者

1. 弱視難聴 10代 K（在学中）

2)運動・スポーツ等の実施方法・工夫

<実施状況・方法>

- 体育連盟実施の大会で 800m を走った。走る際は、隣に先生がいて、一緒に走った。先生がいても 1 人でも走ることで、どちらでも問題ない。(K)

<工夫>

【グラウンドの白線の活用】

- 1 人で走る時は、白いラインを見ながら走った。(K)

(10)ブラインドラグビー

1)ヒアリング対象者

1. 弱視難聴 40代 J（卒業後）

2)運動・スポーツ等の実施方法・工夫

<実施状況・方法>

- 練習は、夏は月に 2 回程度。6 月から 8 月までは自主練という形で個別に練習は行っていた。(J)
- 基本的に芝の白線は見える。レフェリーが見えづらいときもあるが、仲間の動きを見ながら感じ取る。(J)

<工夫>

【音声や触覚を活用したコミュニケーション】

- 得点の状況やポジションの移動については、声で教えてもらったり、タイムアウトの時間に背中に書いてもらったりしている。(J)

3)運動・スポーツ等の実施時や大会参加の際の課題

【通訳・介助者がフィールドには入れないこと】

- 盲ろう者が実施する場合、通訳・介助者を入れる必要があるが、試合中にフィールド上に入れることは無理だと思うので実施が難しいと思われる。(J)

(11)ロービジョンフットサル

1)ヒアリング対象者

1. 弱視難聴 40代 J (卒業後)

2)運動・スポーツ等の実施方法・工夫

<実施状況・方法>

- 盲学校に入学後、先輩に誘ってもらい始めた。(J)
- ライン(ゴールエリアを表す半円のライン等)の位置を確認することで大体の自分のポジションが分かる。PKの際にボールをセットする場所が少し凹んでいる。そういった情報からも自身が今どこにいるか凡そわかる。(J)

3)運動・スポーツ等の実施時や大会参加の際の課題

【通訳・介助者がフィールドには入れないこと】

- 盲ろう者が実施する場合、通訳・介助者を入れる必要があるが、試合中にフィールド上に入れることは無理だと思うので実施が難しいと思われる。(J)

(12)ブラインドテニス

1)ヒアリング対象者

1. 弱視難聴 40代 R (卒業後)

2)運動・スポーツ等の実施方法・工夫

<実施状況・方法>

- 練習会は1か月1回(県の障害者スポーツセンターを借りて実施)。最近は2、3か月に1回程度参加している。通訳・介助者の方と一緒に参加をしている。(R)
- ボールが比較的大きいので、見えにくいときもあるが、感覚でボールを捉えることができ、実施している。(R)

<工夫>

【通訳・介助者とのコミュニケーション】

- 試合の際には、ボールが入ったか、入っていないかを通訳・介助者に教えてもらう。ラリーの途中では通訳・介助者がコートに入るのが危険なため、ボールがアウトになったときなど、要所で通訳してもらう。筆談、サイン(イン、アウト)や、手話でコミュニケーションを取っている。(R)
- ブラインドテニスには、サーブをする際、サーバーが「いきます」と発言し、相手(レシーブ)が「はい」と答えてからサーブを打つというルールがある。しかし、サーバーの「いきます」という発声が聞こえないため、「はい」と言えない。レシーバーが「はい」と答えないとサーバーはサーブを打つことができず、試合を始められない。そのた

め、サーバーが「いきます」と言ったら、Rさんから見える距離にいる通訳・介助者にも手を上げてもらうようにした。通訳・介助者が手を上げることを合図にして、Rさんがレシーブの態勢をつくり、「はい」と発声した後に、サーブを打ってもらうようにしている。(R)

3)運動・スポーツ等の実施時や大会参加の際の課題

【コミュニケーションに起因する課題】

- 試合の進行状況をいかにうまく把握しながらプレーできるのかについては、試行錯誤している。通訳・介助者とは、筆談やサイン、手話でコミュニケーションを取っているが、「イン」「アウト」について筆談でコミュニケーションをすると時間がかかるため、サインの仕方について、検討している。サインは、まだ開発途中である。(R)
- チームメイトが視覚障害者のため、わーっとおしゃべりが始まることもあり、通訳が追いつかないことがある。コミュニケーション方法が難しい。ひとりでは練習ができないことも課題である。(R)

【実施しやすいルールの変更】

- 弱視のため、視力を頼ってブラインドテニスをできているが、視野が狭い方は実施が難しいだろう。また、テニスボールには鈴が入っており、視覚障害者はその鈴の音を頼りにして動くが、盲ろう者は鈴の音が分からない。ボールの位置や動く方向を教えてもらうことを許容するルールになれば、盲ろう者もできる可能性は広がると思う。(R)

【その他の課題】

- シングルでやっているが、ダブルスはお互いの声がけが大事なため、プレーは難しいと思う。(R)

(13)サウンドテーブルテニス

1)ヒアリング対象者

1. 弱視難聴 40代R(卒業後)

2)運動・スポーツ等の実施方法・工夫

<実施状況・方法>

- 体験会で実施した。(R)

3)運動・スポーツ等の実施時や大会参加の際の課題

【アイマスクの着用】

- 視覚障害者のスポーツは音を頼りにするので、音が聞こえない場合、通訳・介助者の支

援を必要なところで受けたり、ウェアラブル機器を活用できるといいと思う。サウンドテーブルテニスも、本来のルールであれば音だけを頼りにしてアイマスクをするルールとなっているが、そうすると盲ろう者の実施は難しい。アイマスクを着用する場合は、聞こえる人と聞こえない（にくい）人が一緒に戦うということになり、不公平になるということで介助者等が指示を出すことを禁止するルールは、場合によっては指示を認めていただく等、柔軟に対応できることが必要だと思う。（R）

4) 当運動・スポーツを楽しむ方が増えるために今後必要な配慮や環境整備

【アイマスクの着用をしなくても良いルールでの実施】

- サウンドテーブルテニスは、アイマスクを必ずすると聞いていたので、無理だと思ってやったことがなかったが、体験会があり参加した。体験会では、アイマスクなしで実施をして、とても楽しく実施をできた。アイマスクをしないルールであれば、盲ろう者も取り組みやすいと感じた。（R）

(14) スキー、バ이스キー

1) ヒアリング対象者

1. 弱視ろう 20代 H（在学中）
2. 弱視難聴 10代 S（在学中）

2) 運動・スポーツ等の実施方法・工夫

<実施状況・方法>

- 小学校1年生の頃から、毎年1回、1泊2日でスキー場に行き、ボランティアの方や両親と一緒に楽しんだ。小学校3年生くらいから一人で滑れるようになった。毎年練習を重ねて、できるようになった。（H）
- リフトに乗る時は少し怖かった。小学校低学年の際には両親に抱えてもらって乗っていた。大きくなって、通訳の方とも一緒に乗るようになったがリフトから降りる際に立ち上がるタイミングが合わなくて転んでしまうことがあった。リフトが近づいているという情報を貰えていれば良いが、リフトを止めないように乗ることが以前はとても怖かった。徐々に慣れてきて、タイミングなどを習得していった。（H）
- 一年に1度、スキーに行っている。これまでは、スキーを滑ることはあきらめており、スキー場の雪遊びのスペースで、遊んでいたが、初めてバ이스キーに挑戦した。（S）
- Sさんの弱視難聴のお子様がバイスキーに座り、体を複数のベルトでバイスキーに固定した状態で、両手でストックを持ち、滑っている間に制御できるように後ろからバイスキーを引っ張ってもらいながら滑る。お子様が体勢を変えることで滑る際の方向がつく。お子様が滑るための角度つけることで方向をつけて滑り降りることができるため、達成感があった。（S）

<工夫>

【ハーネスの着用】

- スキーはハーネスを使って楽しんだ。前に盲ろう者、後ろに介助者がいて、盲ろう者の体につけたハーネスを後ろで滑っている方が持って、止めてくれる。ハーネスを使えば安全に滑ることができる。(H)

3)運動・スポーツ等の実施時や大会参加の際の課題

【バイスキーを実施できる機会や団体が限定されていること】

- バイスキーは、提供団体のご厚意で協力してもらったことで、実現ができた。障害児を受入れる施設や団体がないとスポーツを楽しめない。受け入れてくれる場所、費用の問題がある。バイスキーは高額（50-70 万）で数もない。また、指導者が高齢のこともあるため、若い人たちを指導していく場所も必要なのではないかと思う。(S)

5.3.2 全国障害者スポーツ大会の盲ろう者向けルール改訂について

全国障害者スポーツ大会においては、令和 5 年度に視覚と聴覚の両方に障害がある方向けに以下のルールを大会規定上に盛り込んだ。これについて、全盲ろう者および全スポ参加経験のある盲ろう者（弱視ろう）に、効果や期待等について伺った。

#	種目	追加された競技規則内容
1	競走競技	8.視覚部門の競争競技では、障害区分 24 に属する競技者の 50m 競争を除き、次のような範囲で伴走者を認める。（中略） （2）いかなる場合も、伴走者は競技者を引っ張ったり、押して前進させるといった推進を助けるようなことはしてはならない。ただし、<u>視覚と聴覚の障害が重複している競技者の伴走者は、スタートのピストル音を競技者に伝えるため、ピストル音の直後のみ競技者を引っ張ったり、押したりする行為は認められる。</u>
2	競走競技	9.<u>視覚と聴覚の障害が重複し、クラウンチングスタートの「Set」という合図が聴こえない競技者が視覚部門に出場する場合は、スタート時に競技者と伴走者が静止する必要があるため、伴走者とは別に介助者がクラウンチングスタートの「Set」のタイミングを競技者に伝えなければならない。</u>介助者が競技者に伝える方法は、介助者が競技者に触れるなどの方法を用いるが、これは助力とはみなされない。なお、スタンディングスタートの場合は伴走者が「Set:セット」のタイミングを伝えるものとする。
3	跳躍競技	9.<u>視覚と聴覚の障害が重複している競技者が視覚部門に出場する場合、試技に入る前に限り、介助者または通訳者（以下、介助者など）は審判員の競技開始などの旗の合図を競技者に伝えることができる。</u>介助者などが競技者へ伝える方法は、介助者などが競技者に触れるなどの方法を用いるが、これは助力とはみなさない。なお、介助者などは競技者に審判員の旗の合図を伝えた後は、速やかに競技エリア外に移動しなければならない。
4	投てき競技	13.<u>視覚と聴覚の障害が重複している競技者が視覚部門に出場する場合、試技に入る前に限り、介助者または通訳者（以下、介助者など）は審判員の競技開始などの旗の合図を競技者に伝えることができる。</u>介助者などが競技者へ伝える方法は、介助者などが競技者に触れるなどの方法を用いるが、これは助力とはみなさない。なお、介助者などは競技者に審判員の旗の合図を伝えた後は、速やかに競技エリア外に移動しなければならない。
5	水泳	7.<u>視覚と聴覚の障害が重複している競技者が出場する場合は、審判長</u>

		の長いホイッスル、出発合図員の号令、スタートの合図を競技者に伝えるため、介助者が競技者の身体に触れることが認められる。ただし、スタートの合図を競技者に伝える際に、介助者は競技者に勢いを与えてはならず、その場合はフォルススタートとする。
6	フライング ディスク	⑨プレーヤーが視覚と聴覚の障害を重複している場合、介助者が通訳者を兼ねることができる。介助者は、投げる方向、通過・不通過の状況を手話、触手話、指点字、要約筆記などの方法でプレーヤーに伝えることができるが、技術的な助言等は行ってはならない。(※)

出所) 全国障害者スポーツ大会 競技規則集 令和5年度版

(※) 全国障害者スポーツ大会の競技規則では、介助者及び通訳者による競技中の助力行為(技術指導を含む)は認められていない。

(1)競走競技においてピストル音の直後のみ競技者を引っ張ったり、押したりする行為が認められることについて

- 選手は競技しやすくなるし、安心して参加出来るようになると思う。まだ慣れない点もあり、不便なところがあると思う。たくさん試して、どう改善するか考えることが必要だと思う。スタートのタイミングは、誰かから教えてもらうのが一番良いと思う。その方が安心できる。選手の実力を発揮できるように環境を作れると期待している。(弱視ろう D)
- そもそも人間が合図するとなると視覚だけの人より少し遅くなることになるため難しいと思う。合図のタイミングが課題となる。(全盲ろう Q)
- 伴走者が叩いて知らせてくれることはよいが、伴走の方の合図も本来のスタート合図から遅れる可能性があるため、振動でスタートの合図を知らせてほしい。(全盲ろう Z)
- スタートの際に、手で体に触れてそれを知らせるというのは、競争競技のようにコンマ一秒を争う競技においては、少しタイミングが遅れてしまうという問題がある。(弱視ろう a)

(2)クラウチングスタートの「Set」のタイミングを介助者が伝える行為が認められることについて

- 人に押してもらうより、指先に振動を感じ、触覚でセット・スタートできるとよい。見える人と同じようにスタートを切れるとよい。(全盲ろう Z)
- 身体に直接触れるのはわかりやすく、有効だと思う。大会運営者はクラウチングスタートの動きを確認し、様子を見てから判断するということに気を付ける必要がある。(弱視ろう D)

(3)跳躍競技において、介助者または通訳者が競技開始などの旗の合図を競技者に伝えることができることについて

- いつ始めてもよいかが分かればスムーズに競技出来る。始めても良いことが分かれば何時でも出来るので、一般の障害者と同じ結果になると思う。(全盲ろう Q)
- これまで参加した大会では、スタート位置までの誘導は介助者がしてくれていたが、その後介助者がいなくなると情報が途絶え、身体の向きの調整等が困難であった。見える人と同じ条件を手に入れるよう触れて教えてもらえると良い。(全盲ろう Z)
- 教えてもらうのが、安心。まだ慣れない人も居るが、その時は、教えてあげて、安心して競技が出来たら良いと思う。実力を出すことが一番なので、サポートしてあげられたら良いと思う。(弱視ろう D)

(4)投てき競技において、介助者または通訳者が競技開始などの旗の合図を競技者に伝え

ることができることについて

- いつ始めてもよいかが分かればスムーズに競技出来る。始めても良いことが分かればいつでも出来るので、一般の障害者と同じ結果になると思う。(全盲ろう Q)
- 教えてもらうのが、安心。まだ慣れない人も居るが、その時は、教えてあげて、安心して競技が出来たら良いと思う。実力を出すことが一番なので、サポートしてあげられたら良いと思う。(弱視ろう D)
- 始めてよいことが身体に触れて教えてもらえるというのは良い。(弱視ろう a)

(5)水泳において、ホイッスルや出発合図員の号令、スタートの合図を伝えるために介助者が競技者の身体に触れることが認められることについて

- 競技しやすくなると思う。あまり刺激などは与えないように、優しく教えてあげられるようになると良い。競技を安心して出来る環境があると、実力を発揮できると思う。(弱視ろう D)
- 実施しやすくなると思うが、合図のタイミングが課題だと思う。(全盲ろう Q)

(6)全般について

- 人間が合図するというのはやはりタイミングが問題になるので、例えばピストルを打った事を振動で伝えられるようにして欲しい。ピストルが鳴った時に振動する物を体に付ける等して欲しい。(全盲ろう Q)
- 選手たちが実力を出せるよう、周囲の人がサポートをしてあげることが重要。選手たちが安心して、競技に参加できたら良いと思う。選手の不安を与えないように気をつけることも大事。(弱視ろう D)
- 短距離や競泳種目については、IT の進歩したこの時代、スタートを振動で伝えるようなものがあると良いのではないかな。例えば水泳の踏切版が振動で動く等。(弱視ろう a)

5.4 調査結果のまとめと考察

個人ヒアリングの対象者から伺った情報のみでなく、団体ヒアリングにて、団体に所属する盲ろう者個人の方から伺った内容も踏まえた結果となっている。

5.4.1 調査結果のまとめ

(1)運動・スポーツの実施状況（種類、頻度、場所）

運動・スポーツの種類については、マラソン・ランニングやタンDEM自転車、水泳・水遊び、柔道、フライングディスク、水泳・水遊び、柔道、ボウリングを現在実施している方・過去に実施された方が複数いた。学齢期の方については、学校で様々な運動の経験をしていた。ボルダリング、スキー、卓球、空手、乗馬、トランポリン、ブラインドラグビー等を楽しんでいる方もいた。

実施の頻度については、日常的に実施している方から、大会前のみ、体験教室やイベント時のみ実施されている方などさまざまであった。マラソンは、伴走クラブに参加し定期的の実施されている方が複数いた (B,G,H,I)。タンデム自転車は、実施の際に自転車を持っている方や一緒に乗る方が必要なため、希望するタイミングで実施できるわけではなかった (I)。

実施の場所については、フライングディスク、砲丸投げやソフトボール投げの投てきの競技の場合でも、自宅の近く等で実施している方も複数いた (C,E)。水泳を楽しまれている方は、事前に使用するプールの施設との調整などの必要があった。施設を使用しないと実施が難しい場合は、参加に当たり事前の調整が必要であった。

(2)運動・スポーツ等の実施時や大会参加の際の課題

<大会機会の不足>

- 盲ろうというカテゴリがあれば一番良いが、競技人口が少ないためカテゴリにするのは難しい。少なくとも盲ろうに配慮がある大会とわかれば参加しやすくなる。(F)
- 都道府県の障害者スポーツ大会に出場する時、「盲ろう者枠」はないので、視覚障害者の B1 などの枠で出場し、視覚障害者と競う形になる。都道府県で成績の良い選手は全国大会へ出場する権利を得られるが、視覚障害者にまじって競技した結果、視覚障害者選手にまけてしまい、盲ろう者が全国に選ばれないことが多い。(I)

<指導者の不足>

- 練習時の課題は、盲ろうの方に対する指導者が不足すること。ガイドの方に教えてもらうという方法を取っているが、ガイドも専門家ではなく、毎回変わるため継続的な指導を受けるのが難しい。(F)
- 障害に理解のある指導者に恵まれると良い。できないと決めつけず、できること・できたことを発見してくれる先生だと良い。(G)

<受け入れ施設の不足>

- 実施場所をどうやって確保するか課題がある。(B)
- 盲ろう者を受け入れてくれる施設・環境が身近にあると良い。(G)
- 学校なら先生の支援があるが、自宅で運動・スポーツをさせようとしても連れ出すのが大変。さらにコロナで外出がおっくうになってしまった。外出を助けてくれる人がいればよい。(G)

<指導者や運営側の盲ろうの障害に関する知識不足>

- 盲ろうという障害区分が社会的に認知されていないため、スポーツに限らず社会の色々な面で、盲ろう者に合わせた配慮が受けられないこと。(S)

(3)運動・スポーツ等の実施方法・工夫

- 視覚・聴覚の障害の程度に関わらず、盲ろう者に共通して触覚を通じたコミュニケーションや道具の活用によって運動・スポーツの実施方法について指導がなされたり、運動・スポーツ実施中の状況把握や仲間との連携が図られたりしていた。その中で視覚機能が活用可能な弱視ろうや弱視難聴の盲ろう者は、審判等や相手の合図を視覚的にわかるように手を上げて伝えてもらうといった工夫等を行っている。また、聴覚機能が活用可能な全盲難聴、弱視難聴の盲ろう者は、音で目標の場所や相手の位置を理解する等といった工夫を行っていた。
- また、盲ろう者が運動・スポーツ等を実施していることがわかるよう盲ろう者であることが分かるものを身に付ける等も行っていた。

(調査で得られた情報)

- ・ 走るときに専用の着装のデバイスを使うこともある。前を走っている人の情報(進む方向や、止まるか等)が目の代わりに指につけた装置を通じて伝わるため、ガイドロープ無しで走ることができる。(全盲ろう G)
- ・ 投げたディスクがゴールに入らなかった場合、どちらにずれたのかを、○を書いて教えてくれる。(弱視ろう P)
- ・ 「盲ろう」と書いてあるビブスを着て、ガイドロープを二重にして伴走者と一緒にもって走る。(伴走者は「伴走者」と書かれたビブスを着る)(弱視ろう H)
- ・ 得点の状況やポジションの移動については、声で教えてもらったり、タイムアウトの時間に背中に書いてもらったりしている。(弱視難聴 J)
- ・ 通訳・介助者とは、筆談やサイン、手話でコミュニケーションを取っているが、「イン」「アウト」について筆談でコミュニケーションをすると時間がかかるため、サインの仕方について、検討している。サインは、まだ開発途中。(弱視難聴 R)

(4)全国障害者スポーツ大会における盲ろう者向けの新ルールについて

- 全国障害者スポーツ大会が全盲ろう者を想定して改訂した競走や競泳のスタート時等や、跳躍・投てきの試技時等の合図に関する新たなルールがあることで、全盲ろう者は安心して参加できるようになることが示唆された。
- タイムを競う競技については合図のタイミングの厳密性に関する難しさもあり、振動を通じて合図が伝わるよう機器等の活用が求められていることが示唆された。

(調査で得られた情報)

- ・ 新ルールがある場合、競走競技、水泳に関してスタートはしやすくなると思われるが、そもそも人間が合図するとなると視覚障害のみの人より少し遅くなることが懸念であり、タイミン

グが課題である。一方、投てき、跳躍競技に関しては、スタートしてよいことが分かればいつでも開始でき、一般の障害者と同じ結果になると思われるため、新ルールの場合も特に課題は残らない。(全盲ろう Q)

5.4.2 考察

(1)地域資源（スポーツ施設や、スポーツ提供団体、施設、学校、放課後デイサービス、等）の活用を促進するために

【盲ろう者の利用に対する理解促進】

- 施設や場所を利用しているのが盲ろう者であることに周囲の利用者が気付かず、周囲の利用者が盲ろう者に対して不満を表現してしまうことがある。周囲の利用者への理解促進の重要性が示唆された。

(調査で得られた情報)

- ・ 障害者スポーツセンターでは、プールに知的障害者用のコースや視覚障害者用のコースなどもあるが、盲ろう者用のコースがないため、自分が盲ろう者であることに気づいてもらえず、トラブルになることもある。(弱視ろう F)
- ・ 周囲の泳いでいる人たちに対しては、監視の施設担当員から、盲ろう者が泳いでいるので避けるように、声がけいただいている。周囲の理解は増えてきているが、混んでいる時間は案内いただくのが難しい。(弱視ろう I)
- ・ (盲ろう者は) 触ってから動くため、本人の動くペースも周囲の方より時間がかかり、周囲の理解が必要。早くしないと厳しい態度で接してくる方もいる。(全盲難聴 介助者 T)

【掌を通じたやりとり等、接触による情報伝達】

- 視覚・聴覚の双方での情報伝達が困難な場合、指導者等が盲ろう者の掌等に指で情報を伝えたり、身体の一部を実際に動かして指導することが有効であることが分かった。

(調査で得られた情報)

- ・ (アーチェリーについて)的の位置を指で教えてもらい、どのあたりに飛んだかを一投一投的まで歩いて行って触って確かめることで楽しめる。(弱視ろう B)
- ・ (柔道について) 組になった二人が最初の状態から技に入って投げた状態までの流れを体の形を触らせてもらっている。指導者から技が完璧と認められたら、背中に手で丸を書いてもらう。(弱視ろう B)
- ・ 自転車道を直に触れてもらって、今から自転車をやる等の伝達方法をとっている。(全盲ろう G 介助者)
- ・ (S さんのお子様に)見えにくさがあるため、(水泳の際、先生に) 体を触って動かし方を教えてもらうこともしてもらいたかったが、特別扱いになってしまうということで、ほとんど対応

してもらえなかった。(弱視難聴 S 介助者)

- ・ (ある障害者スポーツセンターでは、ボウリングについて) 残りのピンの位置が、触れてわかるようにボールの取り出し口の傍に、下からピンの模型が残りのピンの位置に合わせて出てくるような仕組みがある。そういう仕組みがあると良い。(弱視ろう P)
- ・ 単独の技の動きをコマ送りする形で教える。指導側が技をかけている際の体の向きを横から触ってもらふ。健常者同士で形を作り、盲ろう者に触ってもらふ(指導者 X)

【盲ろう者のための運動機会・スポーツ大会の開催】

- 盲ろう者のためのスポーツ大会の開催に対する期待が示された。
- 実施の検討にあたっては、区分を細かく設定しすぎると参加者が少なくなってしまう点に留意するほか、全国的に開催されている大会や、一エリアで開催されている大会が、他の大会で講じられている配慮を参考に、自らが主宰する大会におけるルール設定や配慮の在り方を検討することが重要であると考えられる。

(調査で得られた情報)

- ・ 他のサッカーなどの盲の競技やろうの競技では、全盲の方やろうの方も対等にスポーツができるように目隠しをしたり声を出したりしてはいけないなどルールが変わってきている部分があるため、ボルダリングも、そのようにルールが変わってほしいと感じる。(弱視ろう F)
- ・ 都道府県の障害者スポーツ大会に出場する時、「盲ろう者枠」はないので、視覚障害者の B1 などの枠で出場し、視覚障害者と競う形になる。都道府県で成績の良い選手は全国大会へ出場する権利を得られるが、視覚障害者にまじって競技した結果、視覚障害者選手にまけてしまい、盲ろう者が全国に選ばれないことが多い。盲ろう者にも、全国、世界の舞台を経験してもらえるように、ルール等の見直しをしていただけると嬉しい。(弱視ろう I)
- ・ 投擲や跳躍など合図に合わせることを気にする必要のない種目なら盲ろう者でもできるので、盲ろう者の大会があると良いと思う。(全盲ろう Q)

【通訳・介助員の派遣制度に関する意見】

- 地域によって差はあるが、どの地域も通訳・介助員を利用できる時間の上限があるため、運動・スポーツ等に参加するための時間を十分に割くことには課題があるとの意見があった。また、通訳・介助員が運動・スポーツ等について学ぶ機会が必要との意見もあった。

(調査で得られた情報)

- ・ 盲ろう者は介助者を通じて、技術的な指導が伝達されることになるために、介助者が競技や技術的なポイントを理解することが必要。実際に介助者も(フライングディスクを)投げないと、

うまくいくときといかないときの違いが分からない。(Y 大会運営者)

(2)大会・体験会運営に求められる配慮・ルール調整

【掌を通じたやりとり等、身体接触による情報伝達】

- 視覚・聴覚の双方での情報伝達が困難な場合、審判や運営者が選手の掌等に指で情報を伝える等、身体接触による情報伝達が有効であることが示唆された。

(調査で得られた情報)

- ・ 審判に、手のひらに数字等のサインを書いてもらうことで、得点や勝敗を伝えてもらう。審判も少しずつ盲ろう者に理解を示してもらえると嬉しい。(弱視ろう B)
- ・ (技の習得の際) 指導者から技が完璧と認められたら、背中に手で丸を書いてもらう。(弱視ろう B)
- ・ (ブラインドサッカー等を実施する際) 得点の状況やポジションの移動については、声で教えてもらったり、タイムアウトの時間に背中に書いてもらったりしている。(弱視難聴 J)

【スタートの合図に関する工夫】

- タイムを競う陸上競技や競泳等においては、盲ろう者の障害特性に合わせた情報保障機器(スタートランプ等)を活用し、スタート合図の発信が重要であることが示唆された。

(調査で得られた情報)

- ・ (100m 走において)今はスタートのシグナル(スタートランプ)があるので良いが、昔は無かったためスタートを上手く切ることができなかった。(弱視ろう D)
- ・ (競泳において)介助者にスタートの合図をしてもらう。スタートとゴール(ターン含む)の2箇所に介助者がいる必要のある大会がある。(弱視ろう I)

【現在の時間・残り時間の伝え方の工夫】

- タイムを競う競技や時間制限のある競技においては、現在の時間の把握が必要となるが、視覚・聴覚双方からの情報を取得し辛い場合、時間を伝えるための工夫が必要であることが示唆された。

(調査で得られた情報)

- ・ 10km マラソンの際は2時間を切らないといけないルールがある。走っている最中に残り時間を盲ろう者が知ることができるようにして欲しい。(団体ヒア対象のランニングクラブの参加者個人)

【物や設備、人の立ち位置・配置の一貫性】

- 初めて訪れる会場では、どこに何があるかの把握が難しい。大会毎や会場毎に異なる物や設備、人の立ち位置を盲ろう者が理解できるよう、大会期間中は物や設備、人の立ち位置等を極力変えないことが望ましいとの意見があった。

(調査で得られた情報)

- ・ (海外の柔道の) 練習場では、練習に必要な物や設備の配置、コーチが立つ位置等を固定し、視覚の障害があるアスリートも介助なしに空間を把握できるようにしている (Familiarity と Consistency を重視している)。初めて訪れる場所は物や設備の配置を把握できていないため、練習を開始する前に配置を教えてもらう必要がある。日本の柔道の練習場は、障害のあるアスリートが練習しやすい環境が整っていると感じているが、物や設備、人の配置に一貫性を持たせ固定するという試みをすると更に良いと感じる。(全盲難聴 A)

【広い空間における案内の配慮】

- 水泳の場合、一般の更衣室が広いため、案内があることが望ましいとの意見があった。

(調査で得られた情報)

- ・ 水泳の場合、一般の更衣室だと広く、どこに行けばいいのかわからないため、案内をしてけると助かる (弱視ろう I)

【大会への申し込み方法・当日の受付についての配慮】

- 大会によっては、申し込みの際の申込書類が見にくい、支払アプリのダウンロードが必要といったことや、大会当日にスマホでの顔認証が必要であるなど、盲ろう者が申込・参加しづらい方法が採用されているものもあるため、申し込み方法への配慮が必要であることが指摘された。

(調査で得られた情報)

- ・ 大会の申込方法が難しい。データで申し込むが、書類が見にくく、支払方法も複雑(特定の支払いアプリをダウンロードしなければならない)で、自分で手続きをするのがとても大変。(弱視ろう H)
- ・ スタート前にゼッケンを貰うために受付にて本人確認のための名前・顔写真・スマホを見せた。盲ろう者はスマホを持っていない人が何人かいる。盲ろう者向けに特別なフォローをして欲しい。(団体ヒア対象のランニングクラブの参加者個人)

- 格闘技や柔道等の、相手と1対1組み合った状態、接した状態で対面して勝負するような運動・スポーツ等であれば、挑戦の幅が広がることが示唆された。

(調査で得られた情報)

- ・ 柔道やレスリングのように相手と組んでから始めるスポーツが楽しい。ボクシングは間合いを取る必要があるためパンチが難しくて諦めた。(弱視ろう B)

第6章 調査結果のまとめと結論

6.1 盲ろう者が運動・スポーツ等を実施する上での障壁

盲ろう者が運動・スポーツ等を実施する際の障壁を運動・スポーツ等との「出会い・気づきのフェーズ」「参加・体験のフェーズ」「継続のフェーズ」に分類して整理を行った。

6.1.1 出会い・気づきのフェーズ

(1)盲ろう者や家族・介助者等に情報が効果的に伝わっていない。体験機会が限定的である。

- 盲ろう者が実施しやすい運動・スポーツの種類や実施機会について、盲ろう者本人や家族・介助者等に情報が届いていないこと、家族や介助者等に運動・スポーツに関する知識や運動・スポーツ実施時の介助方法に関する知識が不足しているため、参加したくてもしにくい状況があることが示唆された。
- 自宅近くでの体験機会でない場合は参加しにくいことや、特に途中で盲ろう者となった方の場合、自分で運動・スポーツをすることは難しいと思い込んでしまうこと等により、盲ろう者の運動・スポーツの体験機会が限定的であることが示唆された。
- 盲ろう者や家族・介助者等に情報が伝わるためには当事者同士のつながりが重要であり、当事者団体が情報発信の起点になることへの期待があることが示唆された。

(調査から得られた情報)

- ・ 盲ろう者の運動・スポーツに関する情報をあまり見ない。もう少しわかりやすく周知されれば、利用者に参加を提案できるのではないかと思います。(弱視難聴 介助者 V)
- ・ 運動・スポーツ等について他人から勧められたことはなく、現状ネットで自分で探すしかない。学校からも情報が欲しい。(全盲ろう 介助者 L)
- ・ 運動・スポーツを実施させたく療育センターに相談に行ったが、医師等は運動等ができる場所の情報を持っていなかった。冊子の中で、障害者の運動・スポーツのための情報が集まるページがあれば、目次を見てすぐ調べられるので良いと思う。(…) 本事業のアンケート調査がきっかけとなり、どんな障害者スポーツがあるかを改めて調べなおしたところ、バイスキーの情報を得た。(その後、体験した)(弱視難聴 介助者 S)
- ・ 家族や介助者の課題は「盲ろう者の運動・スポーツ等に関する知識不足や運動・スポーツ実施時の介助方法に関する知見の不足に関する課題」が 55.8%で最も多く、次いで「運動・スポーツ等を実施できる場所等の情報収集に関する課題」が 51.2%となっていた。(ご家族または介助者等向けのアンケート調査結果問3-2)
- ・ こういう団体がこういう支援をしている等どんな指導者やボランティアが、どこにいるのか、情報を発信してもらいたい。(全盲ろう 介助者 L)
- ・ 最近、ウェアラブル指文字を使って情報を頼りにタンデムやマラソンを楽しむ人、砲丸投げを楽しむ人などそれなりの方法でスポーツを楽しんでいらっしゃる盲ろう者もいるよう。大切なことは、個人での活動にとどまらず友の会などのつながりを作って情報発信していくことだと思います。(アンケート自由記載)

- ・ 家の近所の実施でないと参加は厳しい。(弱視ろう 介助者 U)
- ・ 開催場所が一番の障壁。市内であれば、調整して利用者複数人と一緒にイベントとして行くことはできるが、遠方の場合、施設として可能な支援の範囲外になる。(介助者 V)
- ・ 盲ろう者だから危ない、無理だ、という理由で止めるということはない。そう言われ続けて心を閉ざしてしまった盲ろう者も多い。(…) 盲ろう者でも、マラソン等いろいろなことができると言っても、気持ちが落ち込んでいる場合はなかなか信頼してくれず、言葉で説明するだけではうまく伝わらないことがある。クラブ活動に参加していただくと、他の盲ろう者もできていることを理解できるので、やる気が出るようだ。(障害者団体)

6.1.2 参加・体験のフェーズ

(1)盲ろう者に運動・スポーツ等を指導できる人材の不足

- 盲ろう者の障害特性を理解して、盲ろう者ができることを盲ろう者と一緒に発見しながら、個々の実態に合った方法を工夫して見出し、目標達成に向けて指導できる人材が不足していることが示唆された。

<調査から得られた情報>

- ・ 盲ろう者が運動・スポーツ等に参加する上での障壁としては、主に「盲ろう者の障害の特性を理解して指導できる人員の不足」(63.2%) 等が挙げられた。(本人向けのアンケート調査結果 問5-1)
- ・ 障害に理解のある指導者に恵まれると良い。できないと決めつけず、できること・できたことを発見してくれる先生だと良い。盲ろう者を受け入れてくれる施設・環境が身近にあると良い。(全盲ろう G(個人))
- ・ 歩く時は跳ねるように歩くので、介助がつかれる。前に進むということがあまり理解できていない。盲ろうに理解のある体育の先生やPTに指導を受けたい(全盲ろう 介助者 L)
- ・ 情報カードを作ったが、(スイミング教室の)先生に使ってもらえなかった。理由として、先生に知識がなく、情報カードの使い方や使うタイミングがわからなかった可能性がある。(弱視難聴 介助者 S)
- ・ 障害者の中には、どういう種目が向いているか、実施するスポーツを選ぶことに困っている方や、実際に実施しているスポーツが本人にとって向いているのかわかっていない方もいる。そういう方にとっても、見識の広い助言ができるような指導者を増やすことは大切である。(フライングディスク関連団体)
- ・ 被指導者が持っている動きを見せてもらいそれを踏まえて技や回り方を教える。(柔道関連団体)

(2)支援機器(装着型振動デバイス等)の活用場面が限定的であることや安全性の確保に課題があること

- 支援機器(装着型振動デバイス等)は、盲ろう者が運動・スポーツをする際に方向や動作の合図を伝える情報保障の補助的な手段として、容易に周りの環境や次に起こることを理解するための有用性があると考えられる一方、開発段階であるため利用している方が少ないこと、使用事例がマラソンやタンデム自転車等であり拡張の余地が十分にありそうであるが、使用場面がまだ限定的であることが示唆された。また、利用に当

たっては、安全性の実証が十分になされ、安全に利用できる支援機器であることが大前提であることとの指摘もあった。

＜調査から得られた情報＞

- ・ レギュレーションのバリアは、指点字等の情報保障のためのデバイスの使用を大会によっては認めてくれない場合がある。事前にデバイスの確認をお願いして、担当者には認めていただいている状況であっても、大会当日の現場にまで情報伝達がうまく行き届いていない場合もあり、情報保障のためのデバイスのレギュレーションも改善の必要がある。(支援機器開発団体(団体))
- ・ 去年、ある県の障害者大会の陸上競技に参加した。立ち幅跳びと砲丸投げでは、機械の持ち込みは規約で禁止となっていた。ある県の大会では、装着型振動デバイスを持ち込み、後ろから補助をして立ち幅跳びをした。砲丸投げも補助してもらってできた。大会や地域によってばらつきがあるので、機械の持ち込みが認められるよう、今後、見直しを要望したい。(ランニングクラブ(団体))

(3)大会やイベント等での運動・スポーツ等実施の際に、盲ろう者が参加できるような情報保障や配慮を受けられていないことがある

- 視覚・聴覚の双方での情報伝達が困難な場合、触覚での情報保障がないと勝敗等の情報が伝わらない、試合状況の把握が困難となる可能性が示唆された。
- 他の参加者と一緒に実施する際に、必要な情報保障が受けられないことで、盲ろう者の運動・スポーツの実施が困難となることが示唆された。
- 大会によっては、申し込みや当日の手続きが複雑であり、盲ろう者の参加を困難にしている可能性が示唆された。
- 大会運営側が盲ろう者の通訳・介助員の中ろう者がいることを念頭においた情報伝達を行えておらず、大会中の情報が盲ろう者に届かないことがあることが示唆された。
- 運動・スポーツ等の実施に関する情報保障に時間がかかることもあるため、健常者や盲ろう者以外の障害者に合わせた進行の場合、盲ろう者が進行についていくことが困難となる可能性が示唆された。

(調査で得られた情報)

- ・ 大会の申込方法が難しい。データで申し込むが、書類が見にくく、支払方法も複雑(特定の支払いアプリをダウンロードしなければならない)で、自分で手続きをするのがとても大変。(弱視ろう H)
- ・ スタート前にゼッケンを貰うために受付にて本人確認のための名前・顔写真・スマホを見せた。盲ろう者はスマホを持っていない人が何人かいる。盲ろう者向けに特別なフォローをして欲しい。(ランニングクラブ(団体))
- ・ FD の大会において大会側は、競技者(ろうの方)向けに手話通訳を用意していたが、盲ろう者が帯同したろうの通訳・介助者に対するフォローの体制がなく、ろうの通訳・介助者に大会の全体アナウンスなどの情報が伝わらないことがあった。(相談窓口(団体))
- ・ 調査期間中のランニングクラブ参加者へのヒアリングや、ゴールボールクラブへの見学の際、複数人の盲

ろう者が参加していたが、いずれにもろう者の通訳・介助員が含まれていたため、ろう者の通訳・介助員に情報を伝える手話通訳者が手配されていた。

- ・ 交流をしながら、自由にクライミングを楽しむスタイルは盲ろう者にはハードルが高いと感じた。ゆっくりした進行、交流の時間が必要。(クライミング提供団体)
- ・ 介助者にも実際に投げてもらい、投げ方等を理解してもらうためには、時間をかけて指導する必要がある。ゆっくり時間をかけて実施することが大切。(フライングディスク関連団体)
- ・ 審判に、手のひらに数字等のサインを書いてもらうことで、得点や勝敗を伝えてもらう。審判も少しずつ盲ろう者に理解を示してもらえると嬉しい。(弱視ろう B)
- ・ 視覚障害者のボウリング大会に出た際、ボックスの中に通訳者は入っていけないと言われた。これでは、ボックスに配置される競技役員から説明を受けたり、競技役員に残ピンの方向やスコアを確認したりすることができないため、特例として、通訳者と一緒にボックス内に入ることを認めてもらった。(当事者団体)
- ・ サウンドテーブルテニスも、本来のルールであれば音だけを頼りにしてアイマスクをするルールとなっているが、そうすると盲ろう者の実施は難しい。指示を出して不公平になるルールなどは、柔軟に対応することが必要だと思う。(弱視難聴 R)
- ・ (S さんの娘(弱視難聴)がスイミングスクールに通っていたが) 受入れの体制は万全な状態ではなく、必要な支援や情報保障もない状況であったため、途中でやめてしまった。スイミングスクールのスタンスが、障害のあるなしに関わらず、関わり方を変えない、特別扱いをしないというスタンスであったため、必要な支援や情報保障を十分にしてもらえなかった。スイミングスクールでは、上達するにつれ級を上げていく仕組みになっていたが、先生からの指導が伝わらず級を上げることが難しくなったため、本人のモチベーションが下がってしまった。(弱視難聴 介助者 S)

(4)全国障害者スポーツ大会の盲ろう者向けルールの課題

- 全国障害者スポーツ大会の盲ろう者向け新ルールは、安心感を与えるという意見を得られた一方、他の競技者とのより公平なスタートのためには、振動を通じてスタートの合図を機械的に送るといった対応を検討する必要があることが示唆された。

(調査で得られた情報)

- ・ (新ルールにより実施しやすく) なると思うが、そもそも人間が合図するとなると視覚だけの人より少し遅くなることになるので、難しいと思う。(全盲ろう Q)
- ・ ピストル音による合図だけではなく、伴走の人が手を叩いて知らせてくれるとよいが、伴走の方の合図も本来のスタート合図から遅れる可能性があるため、機器を導入してはどうか。ピストル音に対し、機械は振動で選手にすぐ合図を伝えることができる。(全盲ろう Z)

6.1.3 継続のフェーズ

(1)卒業後に運動・スポーツ等の機会提供が減少する

- 特別支援学校では日常的に体育や自立活動の授業や、部活動などの教育課程外の活動等で運動・スポーツ等に触れる機会がある。また、運動・スポーツ等のルール工夫や変更、安全性に配慮した環境整備用具の活用等、個々の実態に応じた始動や支援等がなされていた。一方、卒業後は運動・スポーツ等へ参加する機会や集団で運動・スポーツ等を行う機会が減少するという声があった。盲ろう者が卒業後にも運動・スポーツ等に参加できるような仕組みの強化の必要性が示唆された。

(調査で得られた情報)

- ・ 学校の体育があることは運動の実施という点で大きかった。成人すると運動する機会がなく、太ってしまう。(弱視ろう 介助者 U (個人))
- ・ 長年、知的障害特別支援学校で働いた。その際、知的障害の児童・生徒が学校卒業後もフライングディスクを実施できるよう、クラブチームを2つ作った。現在は、保護者が中心となってクラブの運営・活動をしている。(フライングディスク関連団体)
- ・ 地域とのつながりや、地域で安心して運動できる機会や場の確保が必要。また、教員による運動・スポーツ等に関する情報の収集・提供の促進、卒業後は本人の情報へのアクセス環境についても課題となる。(A 特別支援学校)

(2)盲ろう者に合わせたルールの周知・柔軟な変更がなされないことがある

- 大会規約等についての十分な情報保障を得にくい等の理由から、盲ろう者が大会に参加する際にルールに関して正しく理解できていない可能性があることが示唆された。
- 音を頼りにする種目を実施する際に、視覚条件に関して公平になるようアイマスク着用など厳格なルールで実施する場合、聴覚を活用できない盲ろう者が参加する上で障壁となる可能性が示唆された。
- 装着型振動デバイスが大会の中で助力と見なされて使用できなかった事例があり、盲ろう者が運動・スポーツ等に参加する際に使用する用具の柔軟な変更がなされにくいことが参加する上で障壁となっている可能性が示唆された。

(調査で得られた情報)

- ・ 大会の規則の文章が難しい。点字で読めても、点字の情報は視覚障害者に必要な情報しか書いておらず、盲ろう者に必要な情報が書いていない (全盲ろう Z (個人))
- ・ 盲ろう者はルールに関する思い込みをしている場合があるため、年に1回の講習会の中で、ルールを正しく理解してもらうようにしている。(指導者 X)
- ・ サウンドテーブルテニスは、アイマスクを必ずすると聞いていたので、無理だと思ってやったことがなかったが、体験会があり参加した。体験会では、アイマスクなしで実施をして、とても楽しく実施をできた。アイマスクをしないルールであれば、盲ろう者も取り組みやすい。(弱視難聴 R)

- ・ 装着型振動デバイスの使用を大会によっては認めてくれない場合がある（支援機器開発団体）
- ・ サウンドテーブルテニスは、アイマスクを必ずすると聞いていたので、無理だと思ってやったことがなかったが、体験会があり参加した。体験会では、アイマスクなしで実施をして、とても楽しく実施をできた。アイマスクをしないルールであれば、盲ろう者も取り組みやすい。（弱視難聴 R）
- ・ その人ができるルールを決めて、その中で試合を試しあうことが大切。試合と大会は分けて考える。試合は練習の延長戦にある。健常者の方に、アイマスクや耳栓をするということも考えられる。試合であれば、ルールを適宜色々変えて、対等な状況でできることが可能。（指導者 X）

6.2 盲ろう者が運動・スポーツ等を実施するために必要な環境整備に関する結論

(1)地域の関連団体による盲ろう者や家族・介助者等への情報提供や運動・スポーツ機会の充実

- 学齢期には運動・スポーツ等の実施機会が提供されているものの、学齢期を終えるとその機会が減少してしまう状況に鑑み、盲ろう者が学齢期から地域の運動・スポーツ等活動に参加し、学齢期の段階から地域での運動・スポーツ等活動に参加する機会を用意する必要があると考える。また、盲ろう者に運動・スポーツ等に関する情報が届きやすい仕組みを整備する必要があると考える。具体的には、以下のようなことが考えられる。
 - 当事者団体において、盲ろう者が参加できる運動・スポーツ等の紹介を行う窓口を整備する。
 - 盲ろう者向け相談窓口で、運動・スポーツ実施機会や用具の貸出に関する制度の紹介を行う。
 - 特別支援学校等の運動部活動の地域連携・地域移行の取組とあわせて、学齢期の児童生徒が地域のスポーツ施設、スポーツクラブ、放課後等デイサービス、福祉施設等において運動・スポーツ活動を行えるよう機会の充実を図るとともに、学校や放課後等デイサービス、福祉施設等で、児童生徒に対する運動・スポーツ等参加機会に関する情報提供を行う。
 - 盲ろう者が運動・スポーツ等に参加しやすいネットワークが構築されるよう、当事者団体、スポーツ団体、障害者スポーツセンター、学校をはじめとする教育機関や、障害者施設をはじめとする福祉関係機関、医療機関、行政機関等の連携強化を図る。

(2)盲ろう者の運動・スポーツ等への参加を支援できる人材の育成

- 盲ろう者の運動・スポーツ等への参加を支援できる人材が不足している可能性が示されたことから、盲ろう者が運動・スポーツ等に安全に楽しく参加できるよう、指導者や支援を行える人材を増やしていく必要がある。専門家のみでなく家族や介助者等もできる限り障壁の低い形で運動・スポーツ等に参加することが期待されるとともに、支援に関する知識や情報を共有する機会ともなる。具体的には、以下のようなことが考えら

れる。

- 核となる障害者スポーツセンターや地域の障害者スポーツ協会にて、盲ろう者が運動・スポーツに参加する際の支援方法についてノウハウを蓄積し、他の施設や学校と連携して情報共有や研修を行う取組を促進する。
- 盲ろう者の運動・スポーツ等に関する指導について学ぶための研修の機会を整備する。その際、障害の程度や時期等、盲ろうの障害の状態による違いを理解し、個別の支援を適切に行うことができる人材を育成する必要がある。
- 家族や介助者が運動・スポーツ等の体験会への参加を通じて一緒に盲ろう者と活動することで、支援方法を学ぶ機会や活動機会を提供する。

(3)安全性が確保された支援機器活用に関する周知の促進

- 盲ろう者が運動・スポーツ等を実施している最中に、介助者などの存在に加え、必要な情報を補助的に取得できる支援機器（装着型振動デバイス等）の活用が、利用者にとって有効なひとつの情報保障手段となりうる可能性が示された。ただ、技術的に発展途上の状況でもあり、盲ろう者がスポーツ実施時に安全に利用できることが活用の大前提となる。今後、安全性が確保された支援機器の活用により、振動による信号を本人に送るなどして移動や動作の合図についての情報保障の一部を補い、本人が介助者とともに運動・スポーツ等を実施することが容易になるよう、こうした安全性が確保された支援機器の活用のメリットや活用方法に関する周知を促進する。

(4)合理的配慮の提供の促進

- 盲ろう者が運動・スポーツに参加しやすいよう、運動・スポーツ等の提供者により適切な合理的配慮が提供されるよう、周知啓発等を行う。具体的な合理的配慮の内容としては、以下のようなことが考えられる。
- 盲ろう者が大会や体験会に申し込みを行いやすいよう、大会や体験会運営側は申込方法を盲ろう者の実態に応じて対応可能なよう簡易で明確なものにするといった配慮や、通訳・介助に係る時間も踏まえて申込期間にゆとりを持つ。
- 盲ろう者の障害の状態に応じ、より参加が容易となるルールを採用したり、他の参加者と一緒に活動できるようルールを工夫したり、競技において盲ろう者の役割を作ったり、安全に配慮した道具の採用を行ったりする。
- 大会や体験会時においては、盲ろう者への情報保障があることを踏まえ、あらかじめゆとりをもった進行となることをアナウンス等で、周知するなど、盲ろう者を含む参加者全体へ配慮する。

(5)全国障害者スポーツ大会における盲ろう選手へのルール適応について

- 全国障害者スポーツ大会については、多くの盲ろう者のスポーツの貴重な成果発

表の機会となっていることから、令和5年に行われたルール改正の成果を検証し、必要な改善方策について引き続きフォローアップを行い、さらなる改善に努める。

(6)盲ろう者が参加しやすい大会の整備

- 盲ろう者が参加しやすくなるよう、盲ろう者のための大会の開催、既存の大会の競技における盲ろう者を想定した区分の設定、参加者の条件を揃えた競技を行う大会（等の開催を支援する。

第7章 参考資料

7.1 障害のある子供の教育支援の手引き上の記載

「障害のある子供の教育支援の手引～子供たち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて～」(令和3年6月 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課)では、障害の状態等に応じた教育的対応についての方針等が記載されている。

障害の種別は視覚障害、聴覚障害、知的障害等が記載されているが「盲ろう」については記載がなされていない。そこで、「視覚障害」と「聴覚障害」のある児童について記載されている「障害のある子供に対する特別な指導内容」、「障害のある子供の教育における合理的配慮を含む必要な支援の内容」の内容を一部抜粋した。また学習指導要領に記載のある「重複障害者の内、障害の状態により特に必要がある場合についての教員課程の取扱い」についても抜粋した。

ヒアリング調査においてはここに記載されている指導内容や合理的配慮について、盲ろう者にも当てはまるものはなされている(合理的配慮については、状況に応じて過重な負担のない範囲でなされている)ため、これらに加え、盲ろう者が運動・スポーツ等に参加する上で更なる工夫としてどのような指導や配慮が行われているかを伺っている。

(1)視覚障害のある子供に対する特別な指導内容

視覚障害のある子供に対する義務教育段階での特別な指導内容として、次のようなことが挙げられている。(詳細は参考資料を要参照)

- (ア) 保有する視機能の活用と向上を図ること
- (イ) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること
- (ウ) 感覚の補助及び代行手段の活用に関すること
- (エ) 状況に応じたコミュニケーションに関すること
- (オ) 身体の移動能力に関すること

なお、子供の実態によっては上記(ア)～(オ)以外の特別な指導内容も考えられることに留意する必要がある。

(2)視覚障害のある子供の教育における合理的配慮を含む必要な支援の内容

視覚障害のある子供に必要な合理的配慮を行ったり、必要な支援を行ったりすることで、学習への参加や学習内容の理解などが可能となるようにする必要があるため、「教育内容・方法」、「支援体制」、「施設・設備」の3つの観点から教育における合理的配慮を含む必要な支援の内容について、具体例が記載されている。

ア 教育内容・方法

(ア) 教育内容

- a 学習上又は生活上の困難を改善・克服するための配慮
見えにくさを補うための支援等
- b 学習内容の変更・調整
視覚による情報が受容しにくいことを考慮した学習内容の変更・調整 等

(イ) 教育方法

- a 情報・コミュニケーション及び教材の配慮
視覚障害を補う視覚補助具や I C T機器を活用した情報保障 等
- b 学習機会や体験の確保
実物や模型に触る等の能動的な学習活動を多く設定する 等
- c 心理面・健康面の配慮
身の回りの状況が分かりやすい校内の環境作り 等

イ 支援体制

(ア) 専門性のある指導体制の整備

特別支援学校（視覚障害）のセンター的機能及び弱視特別支援学級、通級による指導（弱視）等の専門性の積極的な活動 等

(イ) 子供、教職員、保護者、地域の理解啓発を図るための配慮

子供一人一人の見えにくさ、使用する視覚補助具・教材についての理解啓発 等

(ウ) 災害時等の支援体制の整備

災害とその際の対応や避難について理解できるような支援 等

ウ 施設・設備

(ア) 校内環境のバリアフリー化

段差や明るさの確保等、校内での活動や移動に困難がないように校内環境を整備する 等

(イ) 発達、障害の状態及び特性等に応じた指導ができる施設・設備の配慮

見えやすいような環境の整備（ブラインド、カーテン、拡大読書器） 等

(ウ) 災害時等への対応に必要な施設・設備の配慮

避難経路に明確な目印や照明の設置

ア～ウは代表的な例であり、上記以外でも「学校や学びの場の基礎的環境整備の状況や、子供の実態によっては、上記以外の教育における合理的配慮を含む必要な支援の内容も考えられることに留意すること」が重要である。

(3)聴覚障害者児に対する義務教育課程における特別な指導内容

聴覚障害のある子供に対する義務教育段階での特別な指導内容として、次のようなことが挙げられている。(詳細は参考資料を要参照)

- (ア) 自分の障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること
- (イ) 障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること
- (ウ) 他者の意図や感情を理解することや集団への参加に関すること
- (エ) 保有する聴覚の活用やその補助及び代行手段の活用に関すること
- (オ) 意思の疎通を図るための言語の受容と表出に関すること
- (カ) 生活や学習に必要な言語概念の形成や言語による思考力の伸長に関すること
- (キ) コミュニケーション手段の選択と活用に関すること

なお、子供の実態によっては上記(ア)～(オ)以外の特別な指導内容も考えられることに留意する必要がある。

(4)聴覚障害のある子供の教育における合理的配慮を含む必要な支援の内容

聴覚障害のある子供に必要な合理的配慮を行ったり、必要な支援を行ったりすることで、学習への参加や学習内容の理解などが可能となるようにする必要があるため、「教育内容・方法」、「支援体制」、「施設・設備」の3つの観点から教育における合理的配慮を含む必要な支援の内容について、具体例が記載されている。

ア 教育内容・方法

(ア) 教育内容

a 学習上又は生活上の困難を改善・克服するための配慮

聞こえにくさを補うことができるようにするための配慮を行う(補聴援助機器等の活用, 相手や状況に応じた適切なコミュニケーション手段(身振り, 手話, 筆談等)の活用 等

b 学習内容の変更・調整

音声による情報が受容しにくいことを考慮した学習内容の変更・調整 等

(イ) 教育方法

a 情報・コミュニケーション及び教材の配慮

聞こえにくさに応じた視覚的な情報提供(分かりやすい板書, 教科書の音読箇所等の位置の明示, 要点を視覚的な情報で提示, 身振り, 手話, 文字等の使用等) 等

b 学習機会や体験の確保

言語概念が形成されるよう体験したことや事物と言葉とを結び付けるよう配慮した指導 等

c 心理面・健康面の配慮

周囲の話し声や音などの情報が入らないことによる孤立感を感じさせないような学級の雰囲気作り 等

イ 支援体制

(ア) 専門性のある指導体制の整備

特別支援学校(聴覚障害)のセンター的機能及び難聴特別支援学級、通級による指導

(難聴)等の専門性の積極的な活用 等

(イ) 子供、教職員、保護者、地域の理解啓発を図るための配慮

使用する補聴器・人工内耳や多様なコミュニケーション手段についての理解啓発等

(ウ) 災害時等の支援体制の整備

放送等による避難指示を聞き取ることができない子供に対する緊急時の安全確保と避難誘導等を迅速に行うための校内体制の整備

ウ 施設・設備

(ア) 校内環境のバリアフリー化

放送等の音声情報を視覚的に受容できる校内環境の整備(教室等の字幕放送受信システム等)

(イ) 発達、障害の状態及び特性等に応じた指導ができる施設・設備の配慮

教室等の聞こえの環境の整備(絨毯(じゅうたん)・畳の指導室の確保等) 等

(ウ) 災害時等への対応に必要な施設・設備の配慮

緊急情報を視覚的に受容することができる設備の設置

ア～ウは代表的な例であり、上記以外でも、「学校や学びの場の基礎的環境整備の状況や、子供の実態によっては、上記以外の教育における合理的配慮を含む必要な支援の内容も考えられることに留意すること」が重要である。

(5)重複障害者の内、障害の状態により特に必要がある場合についての教育課程の取扱い

「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説(総則編(幼稚園・小学部・中学部)平成30年3月)」(特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編(幼稚園・小学部・中学部))では、重複障害者のうち、障害の状態により特に必要がある場合についての教育課程の取扱いを示している。

重複障害者のうち、障害の状態により特に必要がある場合には、各教科、道徳科、外国語活動若しくは特別活動の目標及び内容に関する事項の一部又は各教科、外国語活動若しくは総合的な学習の時間に替えて、自立活動を主として指導を行うことができるものとする。

障害の状態により特に必要がある場合には、各教科、道徳科、外国語活動、特別活動の目標及び内容に関する事項の一部に替えて、自立活動の指導を主として行うほか、各教科や外国語活動の目標及び内容の全部又は総合的な学習の時間に替えて、主として自立活動の指導を行うこともできることを示している。

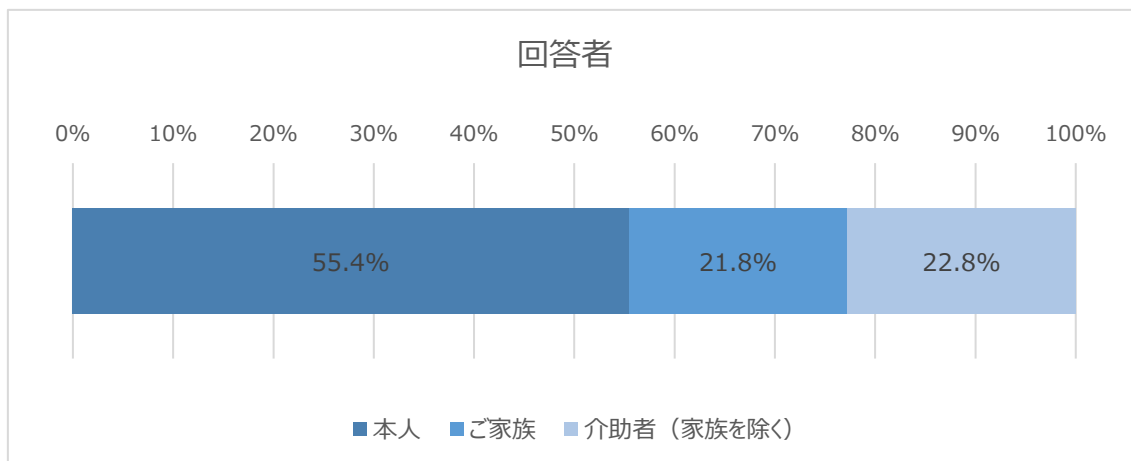
なお、この規定を適用する際には、重複障害者についても他の児童生徒と同様、第1章総則第1節「教育目標」において示したとおり、各教科、道徳科、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動に加えて、自立活動を取り扱うことが前提となっていることを踏まえる必要がある。その上で、各教科と自立活動の目標設定に至る手続きの違いを踏まえ、小・中学部の在学期間に学校教育として提供すべき教育の内容を卒業後の生活も考慮しながら、障害の状態により特に必要がある場合か否かを検討していくことが必要である。

7.2 アンケート調査結果

(1)本調査票に回答を記入した方を教えてください。

「本人」による回答が 55.4%で最も多く、次いで「介助者(家族除く)」による回答が 22.8%、「ご家族」による回答が 21.8%であった。

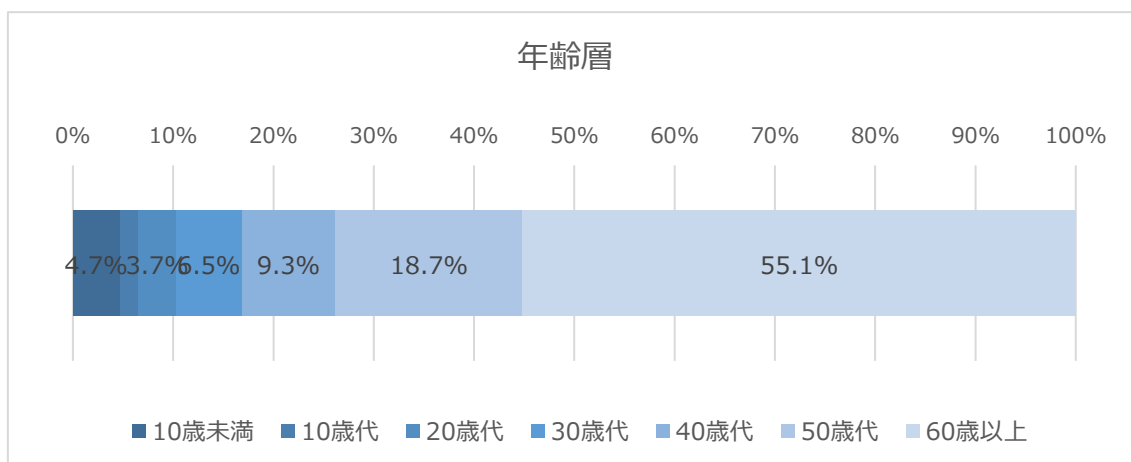
n=101



(2)問1-1 年齢層年齢層を教えてください。(当てはまるもの一つを選択)

「60歳以上」が 55.1%で最も多く、次いで「50歳代」が 18.7%、「40歳代」が 9.3%であった。

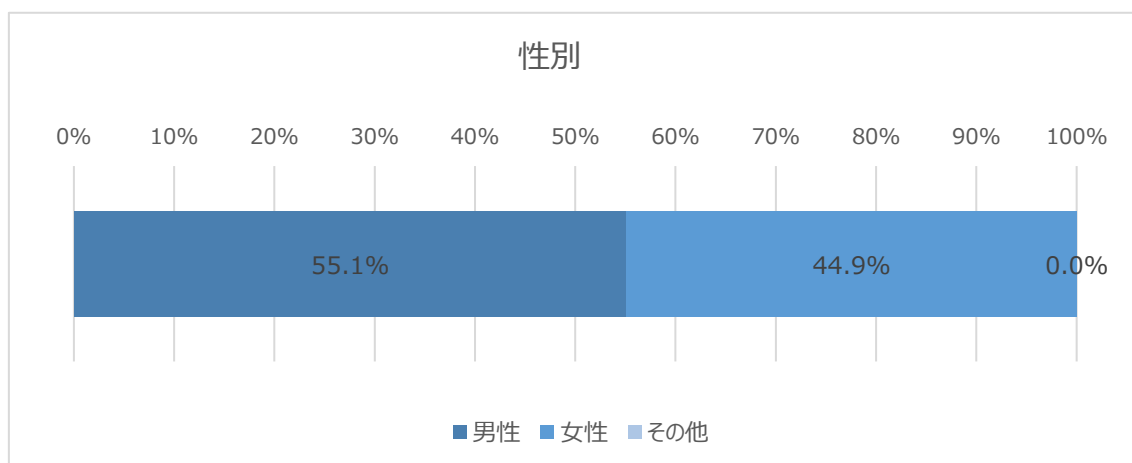
n=107



(3)問1-2 性別を教えてください。(当てはまるもの一つを選択)

「男性」が 55.1%、「女性」が 44.9%であった。

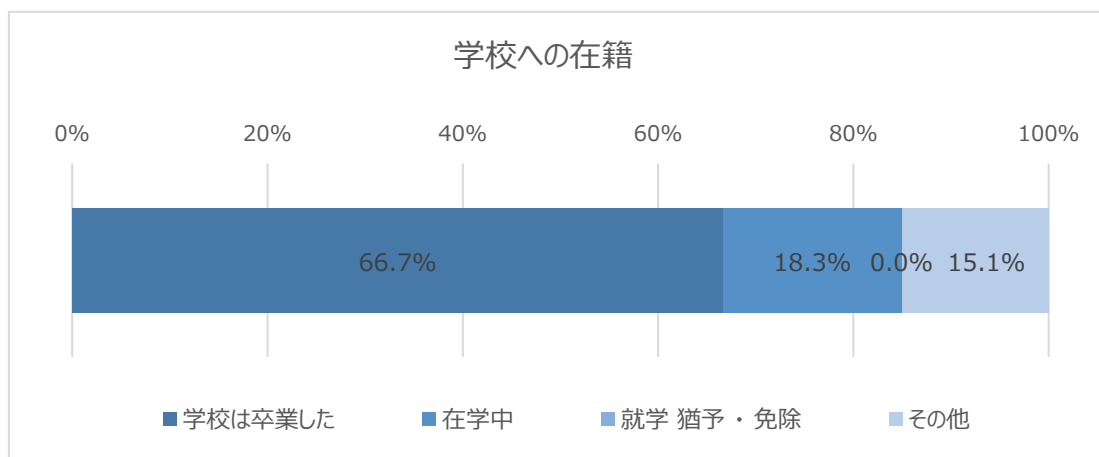
n=107



(4)問 1－3 現在、在籍している学校について教えてください。(当てはまるもの一つを選択)

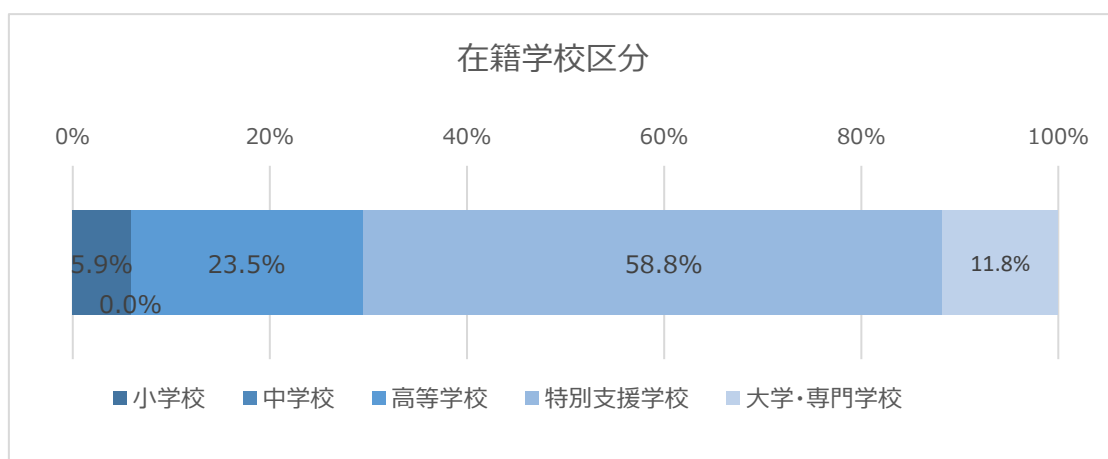
「学校は卒業した」が 66.7%で最も多く、次いで「在学中」が 18.3%であった。

n=93



在学中の 18.3%の在学学校区分は「特別支援学校」が最も多く 58.8%、次いで「高等学校」が 23.5%であった。

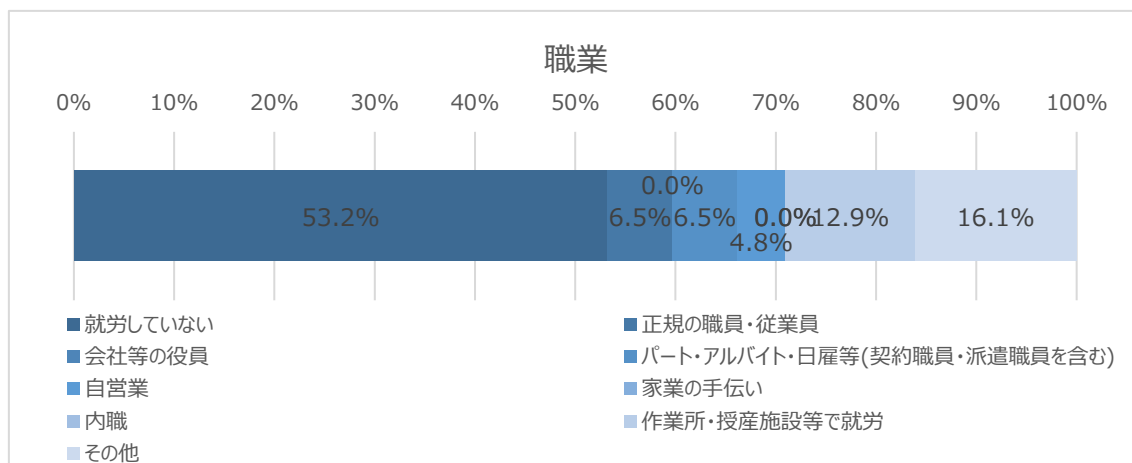
n=17



(5)問1－4 現在、就労されている職業について教えてください。（当てはまるもの一つを選択）

問1-3で「学校は卒業した」と回答した方について、「就労していない」が53.2%で最も多く、次いで「作業所・授産施設等」で就労が12.9%、「正規の職員・従業員」「パート・アルバイト・日雇等(契約職員・派遣職員を含む)」6.5%であった。

n=62



(6)問 1－5－1 視覚障害について

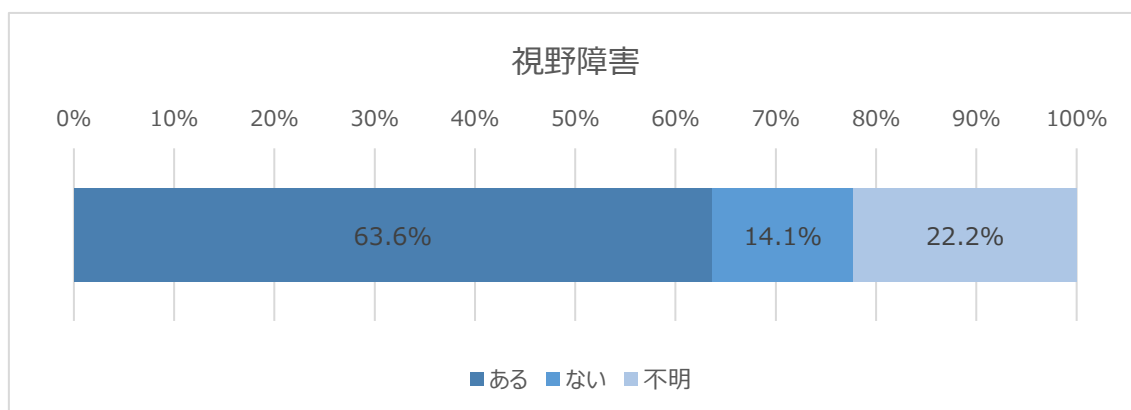
(1) 測定視力

個人毎に回答を記入いただいた。本委員会資料では割愛。(見え方の概要については(3)参照)

(2) 視野障害

「ある」との回答が 63.6%、「ない」が 14.1%であった。

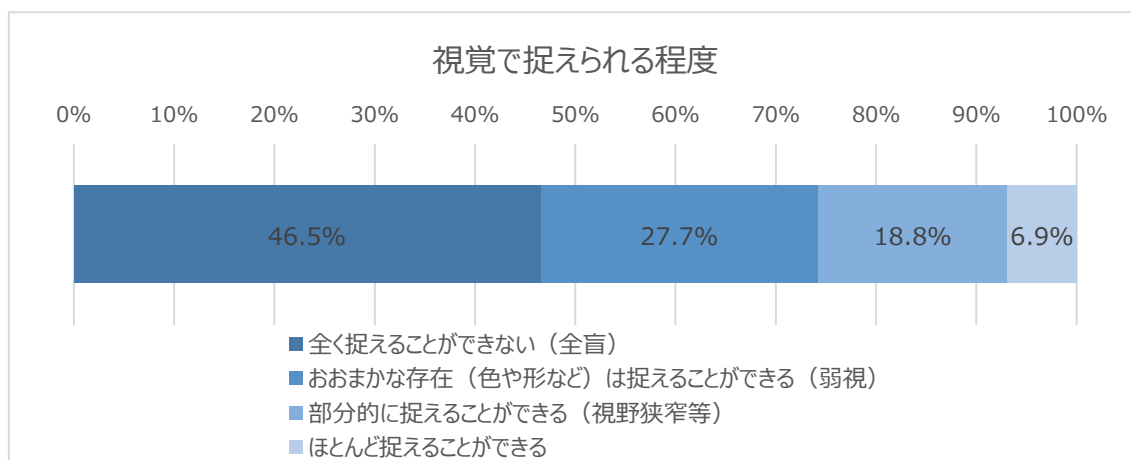
n=99



(3) 運動・スポーツ等を実施する際に、競技において用いるグラウンドや体育館に引かれたラインや道具、他の競技者を視覚的にどの程度捉えることができるか（当てはまるもの一つを選択）

「全く捉えることができない（全盲）」が 46.5%で最も多く、次いで「おおまかな存在は捉えることができる（弱視）」が 27.7%、「部分的に捉えることができる（視野狭窄等）」が 18.8%であった。

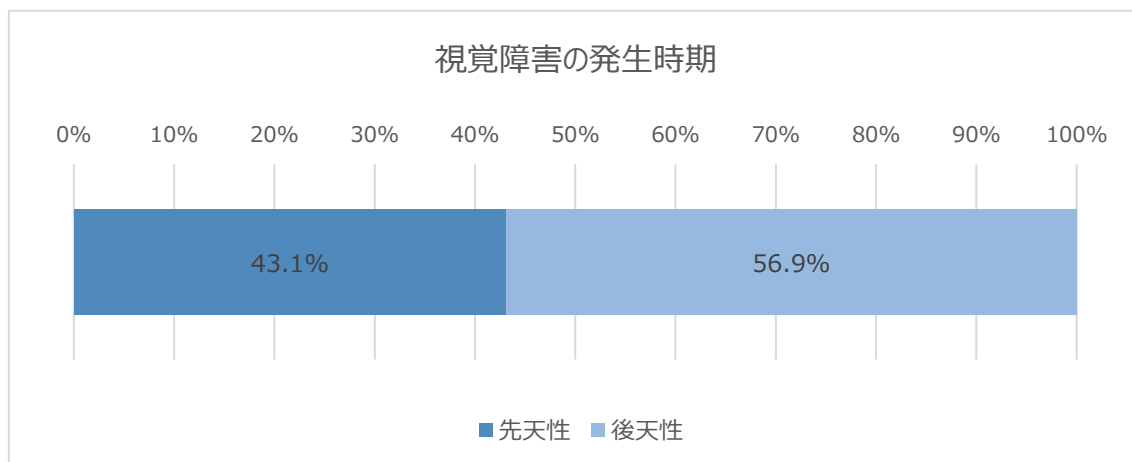
n=101



(4) 視覚障害の発生時期について教えてください。（当てはまるもの一つを選択）

「後天性」が 56.9%、「先天性」が 43.1%であった。

n=102



(7)問 1－5－2 聴覚障害について

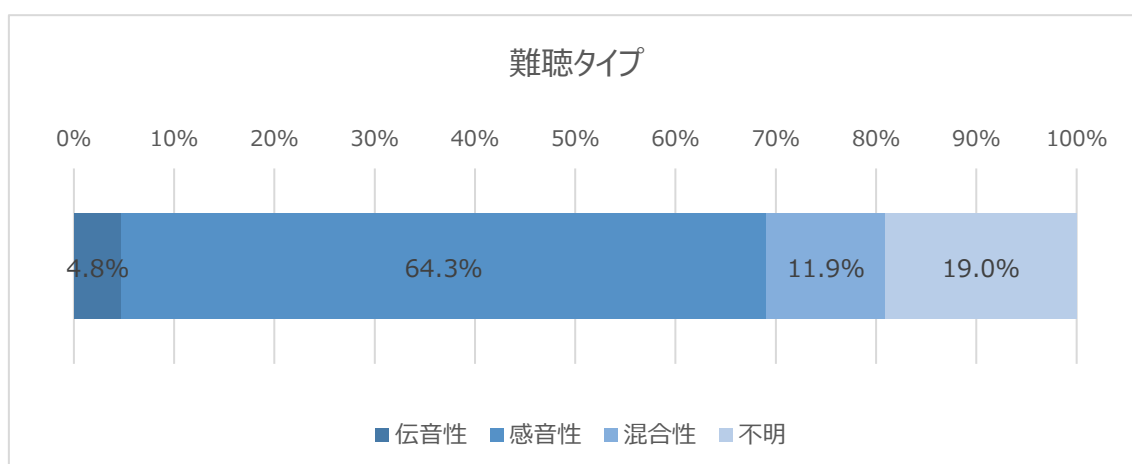
(1) 測定聴力

個人毎に回答を記入いただいた。本委員会資料では割愛。(聴こえ方の概要については(3)参照)

(2) 難聴のタイプ

「感音性」が最も多く、64.3%、次いで「不明」19.0%、「混合性」11.9%であった。

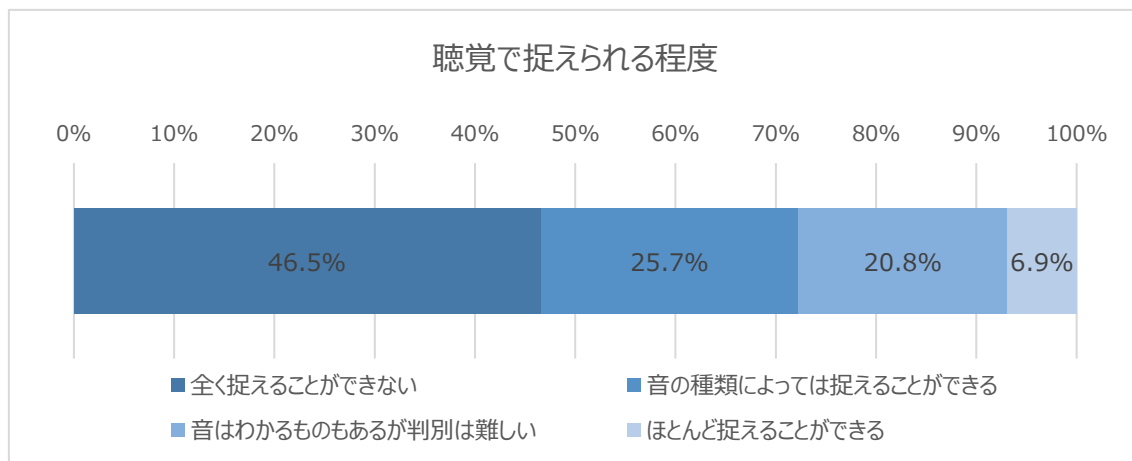
n=84



(3) 運動・スポーツ等を実施する際に、競技中に発せられる音（合図、他の競技者の様子、道具から発せられる音等）を聴覚的にどの程度捉えることができるか

「全く捉えることができない」が46.5%で最も多く、次いで「音の種類によっては捉えることができる」が25.7%、「音はわかるものがあるが判別は難しい」が20.8%であった。

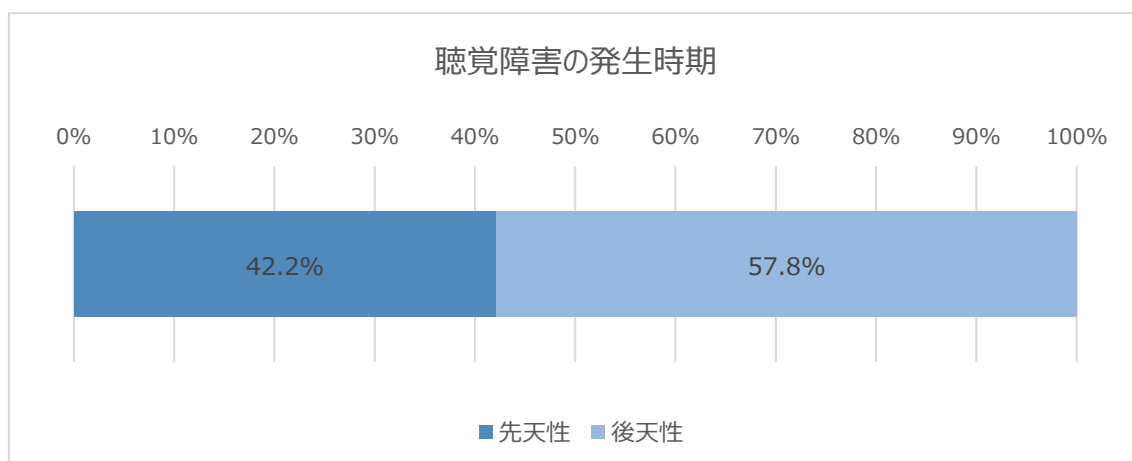
n=101



(4) 聴覚障害の発生時期について教えてください。（当てはまるもの一つを選択）

先天性が42.4%、後天性が57.8%であった。

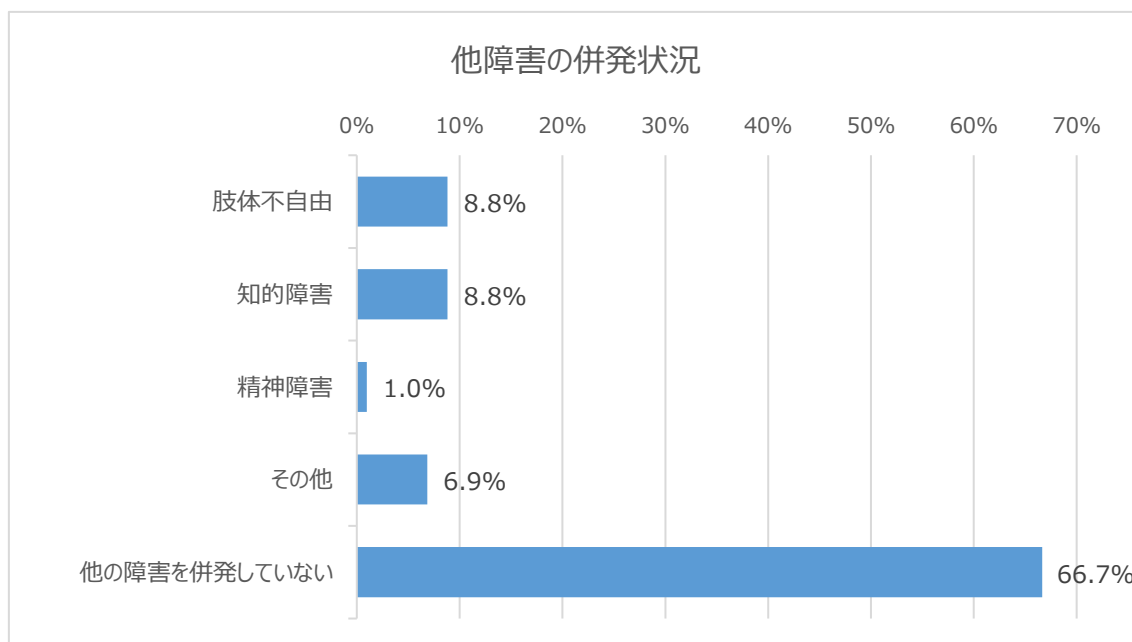
n=102



(8)問 1－5－3 視覚障害と聴覚障害以外の障害の状況について該当するものを選択してください（当てはまるもの全てを選択）。

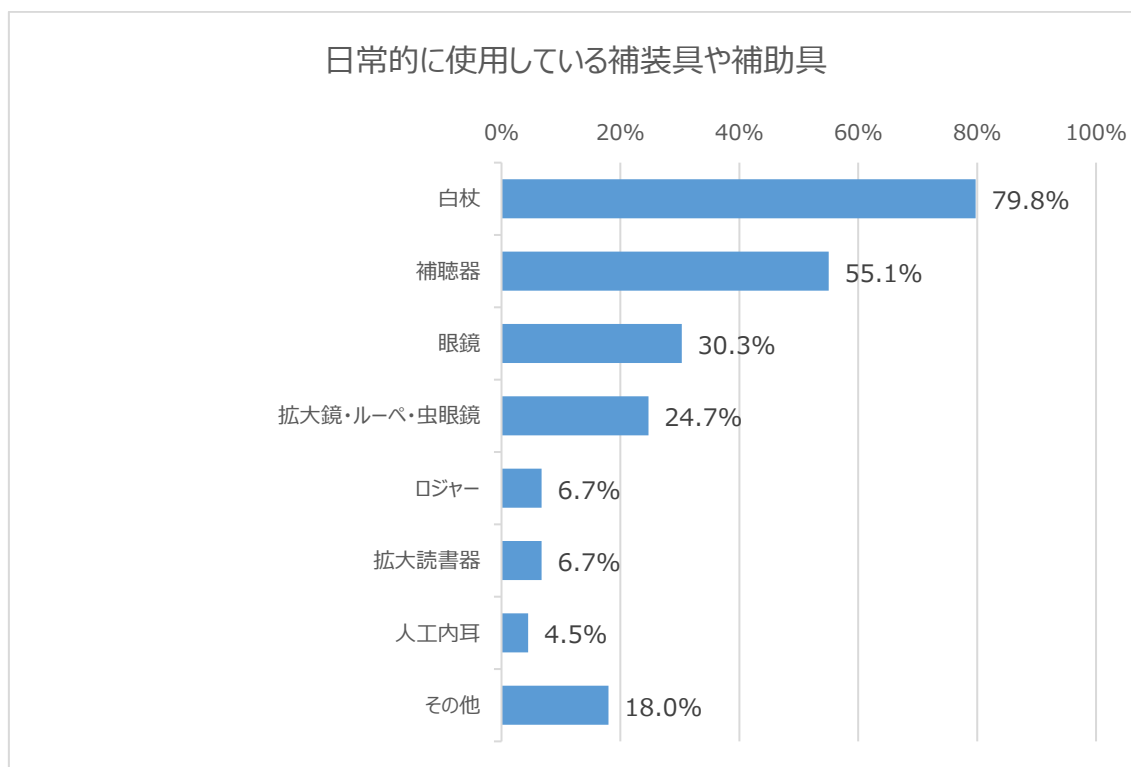
「他の障害を併発していない」が 66.7%で最も多く、次いで「肢体不自由」、「知的障害」が各々8.8%であった。

n=89



(9)問 1－6 日常的に使用している補装具や補助具があれば教えてください。(例:眼鏡、拡大鏡、白杖、補聴器、人工内耳、ロジャー等) 補助具・補装具等の利用について約 83.2%の回答者が補装具や補助具を使用していると回答。
使用している回答の内訳は以下の通り。(複数回答可)

n=107

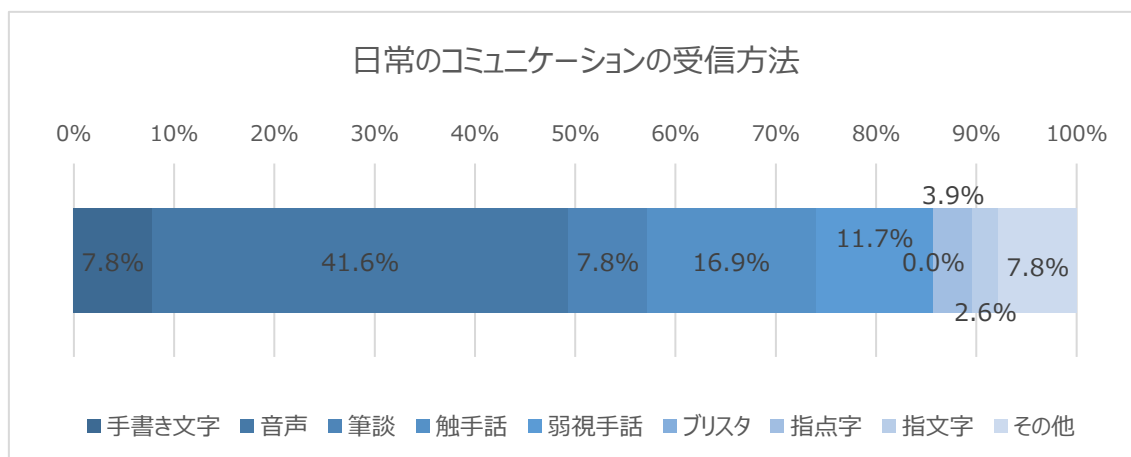


「その他」の回答例：パソコン、点字ディスプレイ、スマホ、車いす、電動車いす、ブレイルセンス、義眼、活字文書読み上げ装置、音声リーダー、筆談用具、座位保持イス、書見台

(10)問 1－7－1 日常におけるコミュニケーションについて、受信時（相手から聞くと
き）に最も用いている方法を教えてください。（当てはまるもの一つを選択）

「音声」が 41.6%で最も多く、次いで「触手話」が 16.9%、「弱視手話」が 11.7%であった。

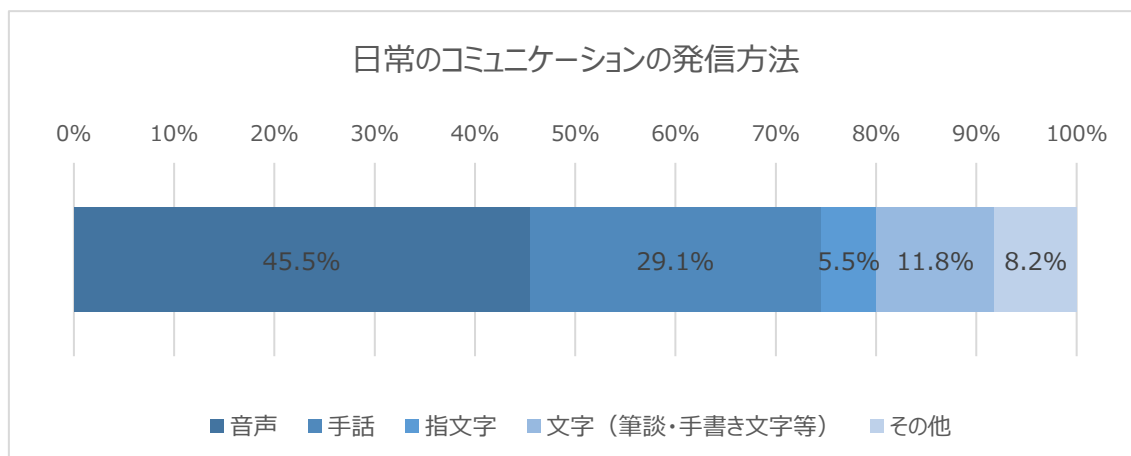
n=77



(11)問 1－7－2 日常におけるコミュニケーションについて、発信時（相手に伝えると
き）に最も用いている方法を教えてください。（当てはまるもの一つを選択）

「音声」が最も多く 45.5%、次いで「手話」29.1%、「文字（筆談・手書き文字等）」11.8%であった。

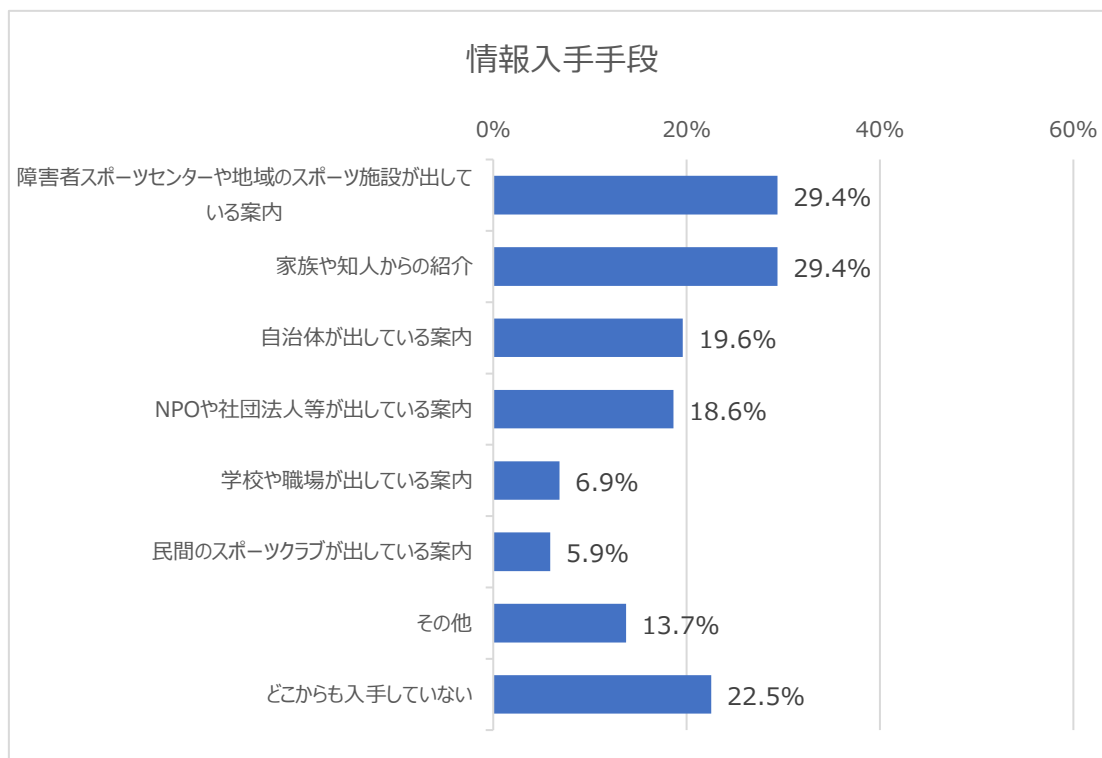
n=110



(12)問 2-1 運動・スポーツ等への参加機会に関する情報をどこからの情報を入手していますか（当て はまるもの全てを選択）

「障害者スポーツセンターや地域のスポーツ施設が出している案内」「家族や知人からの紹介」が最も多く 29.4%、次いで「どこからも入手していない」が 22.5%であった。

n=102

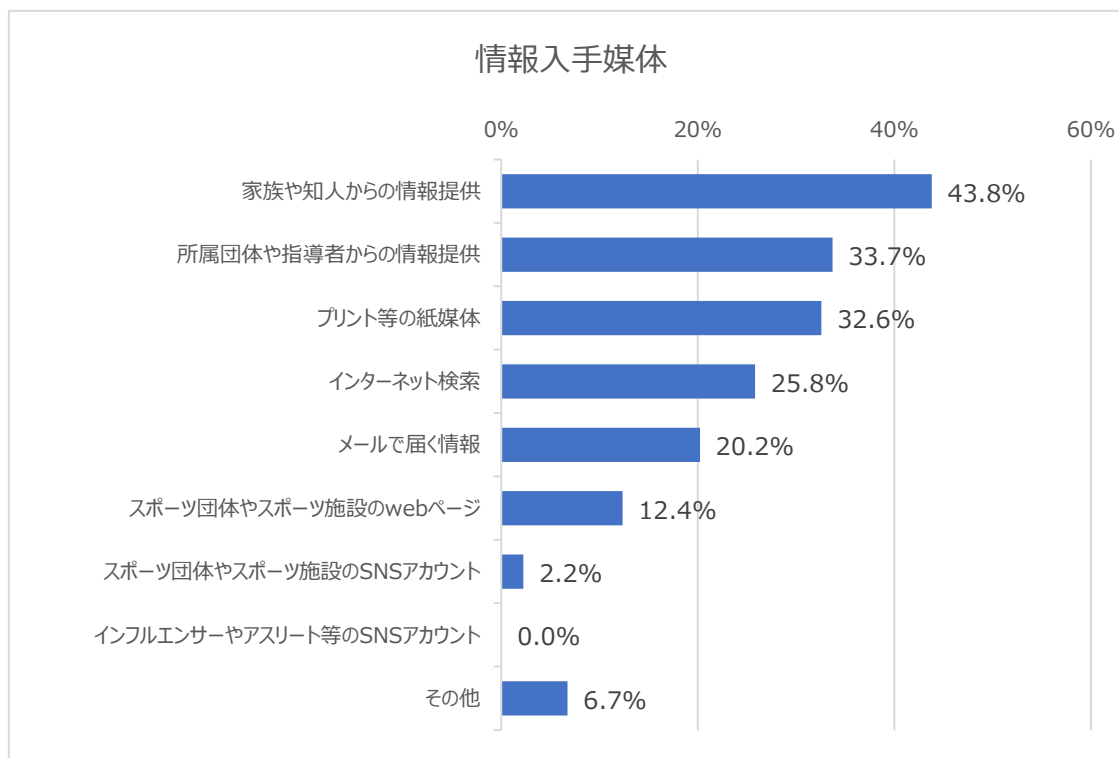


「その他」の回答例：通訳介助員、相談支援事業者、インターネット、回覧板、市報、テレビ、自身の加入団体

(13)問 2－2 運動・スポーツ等への参加機会に関する情報をどのような媒体で情報を得ることが多いですか（当てはまるもの全てを選択）

「家族や知人からの情報提供」が最も多く 43.8%、次いで「所属団体や指導者からの情報提供」が 33.7%、「プリント等の紙媒体」が 32.6%であった。

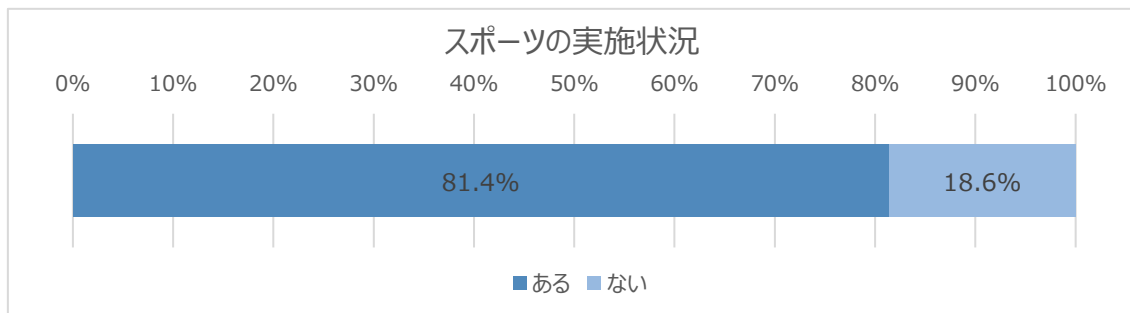
n=89



(14)問 3-1 これまで運動・スポーツ等を行ったことがありますか

「ある」が81.4%、「ない」が18.6%であった。

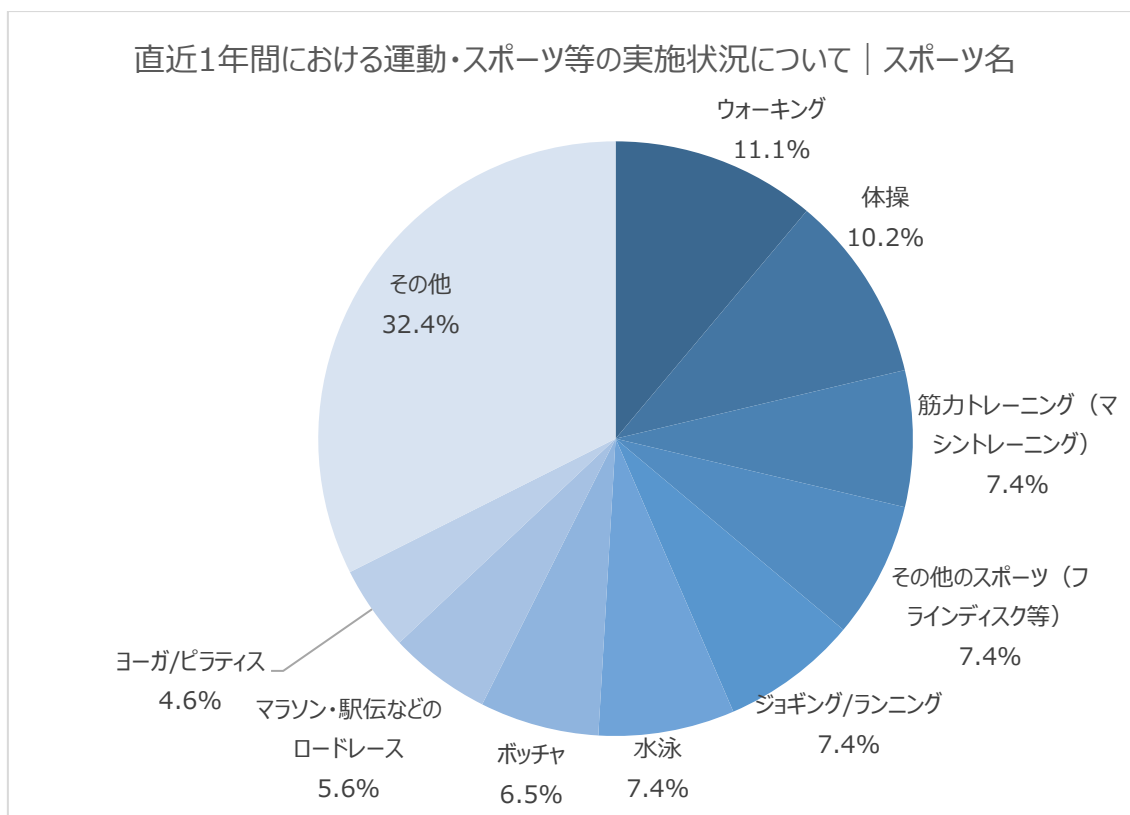
n=102



(15)問 3-2 直近1年間における運動・スポーツ等の実施状況について具体的な「運動・スポーツ名」ごとに「実施頻度」「活動場所」「ご家族や介助者等の有無」を教えてください。(最大5つまで回答可)

運動・スポーツ名については、「ウォーキング」が11.1%で最も多く、次いで「体操」が10.2%、「筋力トレーニング(マシントレーニング)」、「その他のスポーツ(フライングディスク等)」、「ジョギング/ランニング」、「水泳」が7.4%であった。

n=108

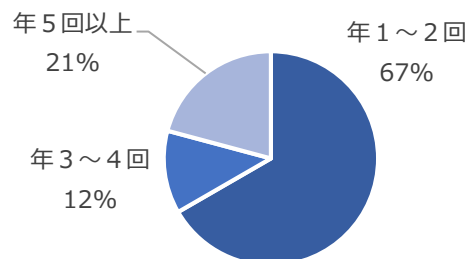


活動頻度としては、年あたり回答では、「年1～2回」が66.7%で最も多く、月あたり回答では「月1～2回」が91.4%で最も多く、週あたり回答では「週1～2回」が60.9%で最も

多かった。

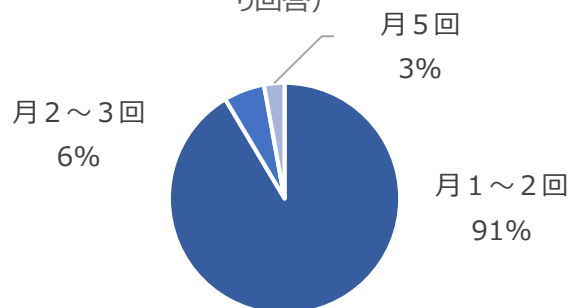
n=24

直近 1 年間における運動・スポーツ等の実施状況について | 実施頻度（年あたり回答）



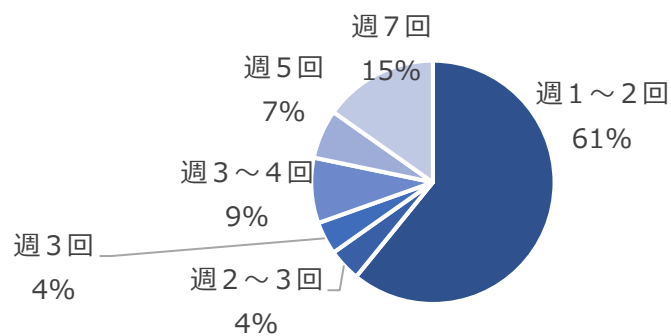
n=35

直近 1 年間における運動・スポーツ等の実施状況について | 実施頻度（月あたり回答）



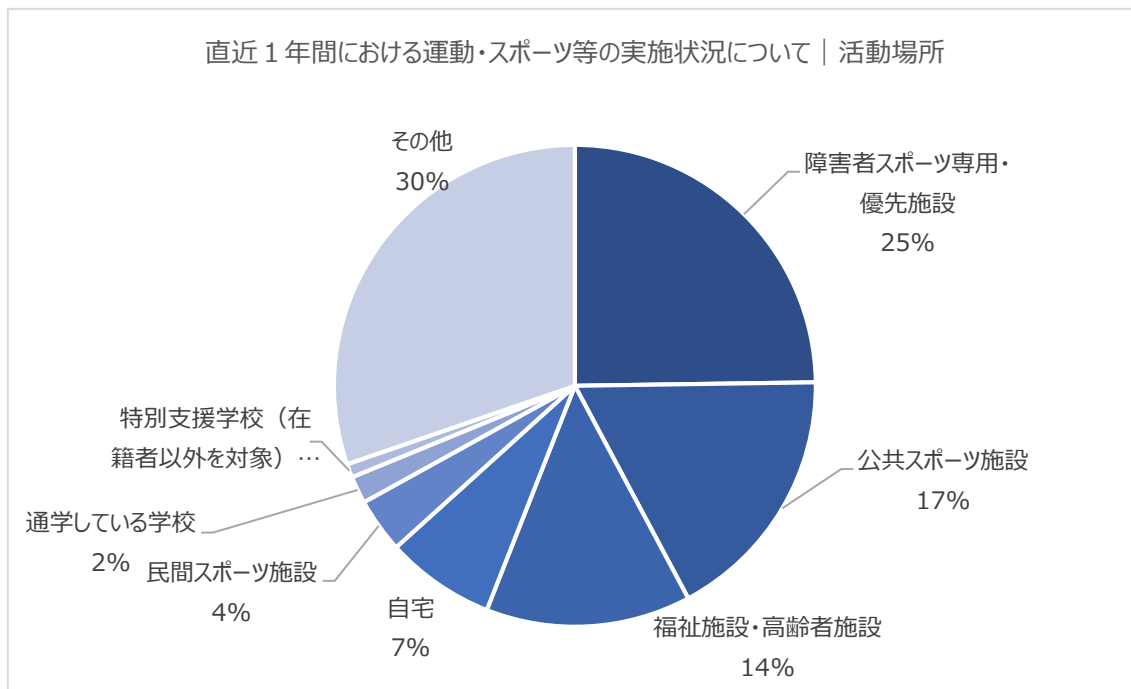
n=46

直近 1 年間における運動・スポーツ等の実施状況について | 実施頻度（週あたり回答）



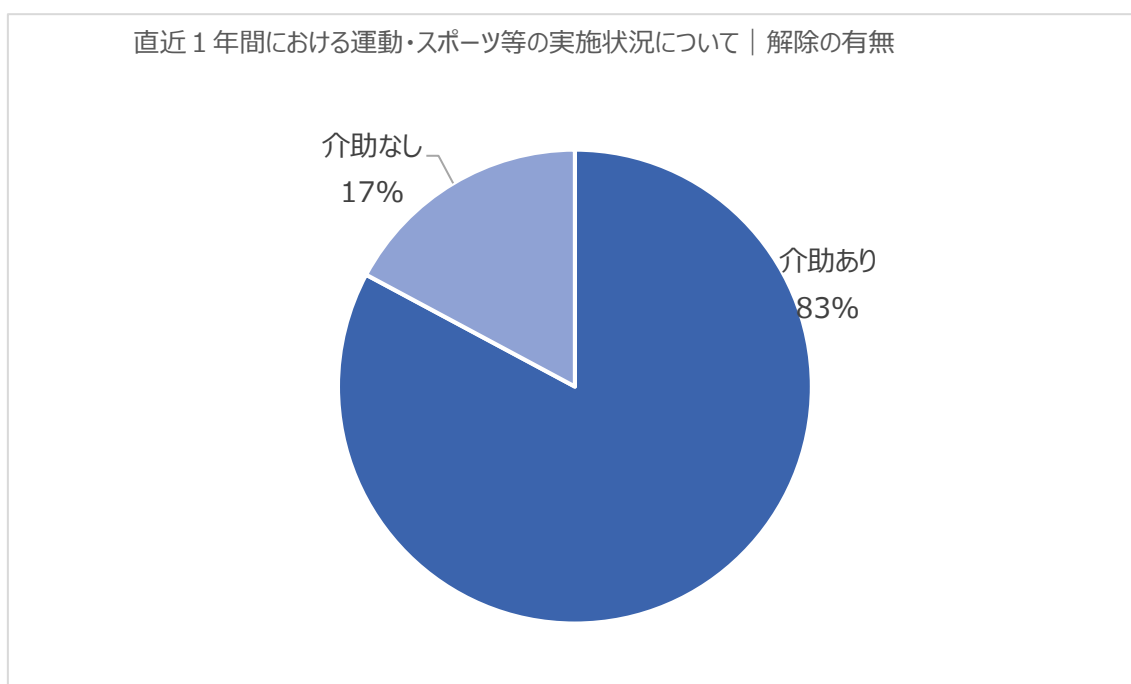
活動場所としては、「障害者スポーツ専用・優先施設」が24.8%で最も多く、次いで「公共スポーツ施設（障害者専用・優先施設を除く）」が17.4%、「福祉施設・高齢者施設」が13.8%であった。

n=109



ご家族・介助者の介助の有無については、「介助がある」との回答が82.9%を占めた。

n=99

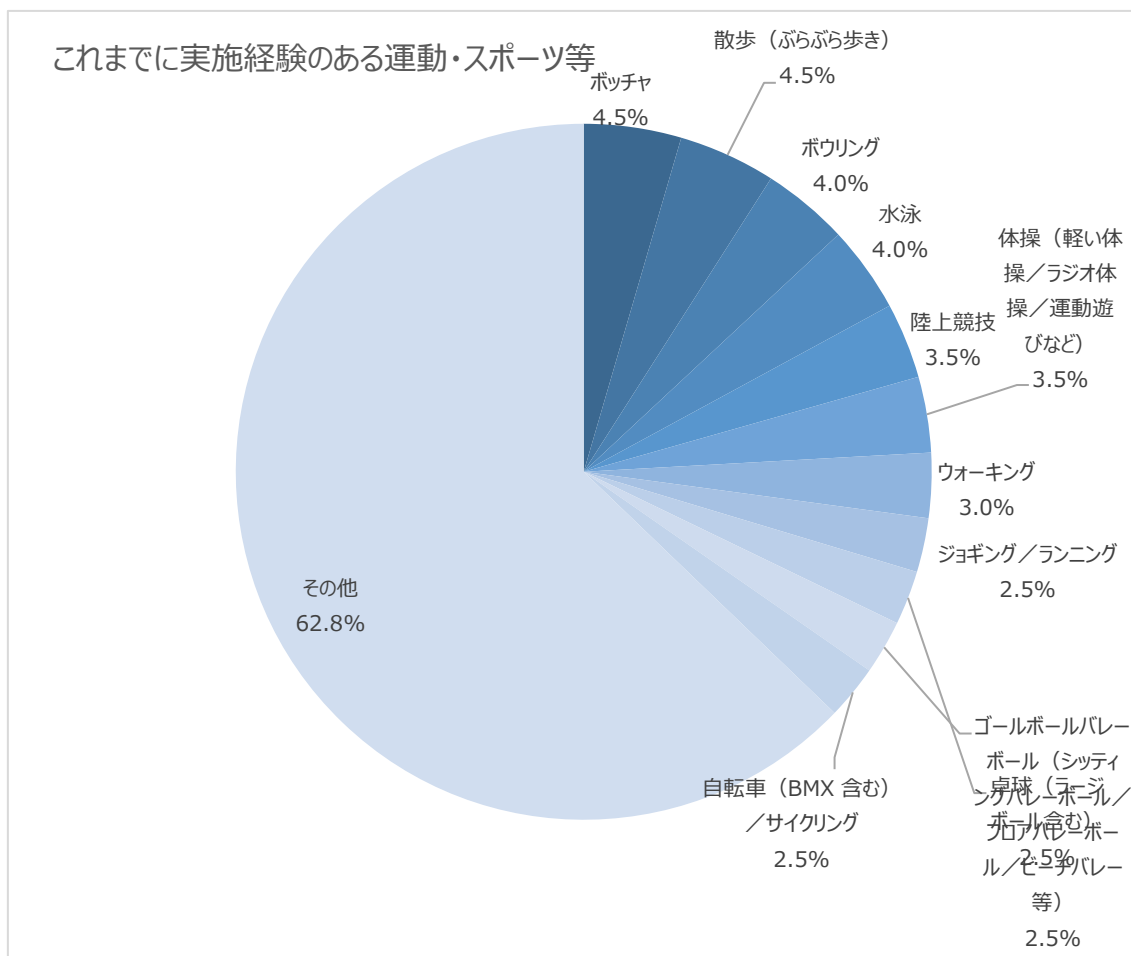


(16)問 3－3 これまでに実施経験のある運動・スポーツ等について教えてください。

「ボッチャ」、「散歩（ぶらぶら歩き）」が最も多くそれぞれ 4.5%、次いで「ボウリング」、「水泳」がそれぞれ 4.0%であった。

「その他」の回答例： マラソン・駅伝などのロードレース、水中歩行、ドッジボール、ダンス（社交ダンス／フォークダンス／フラダンスなど）、ヨーガ／ピラティス、柔道、フリークライミング／ボルダリング、アイススケート等

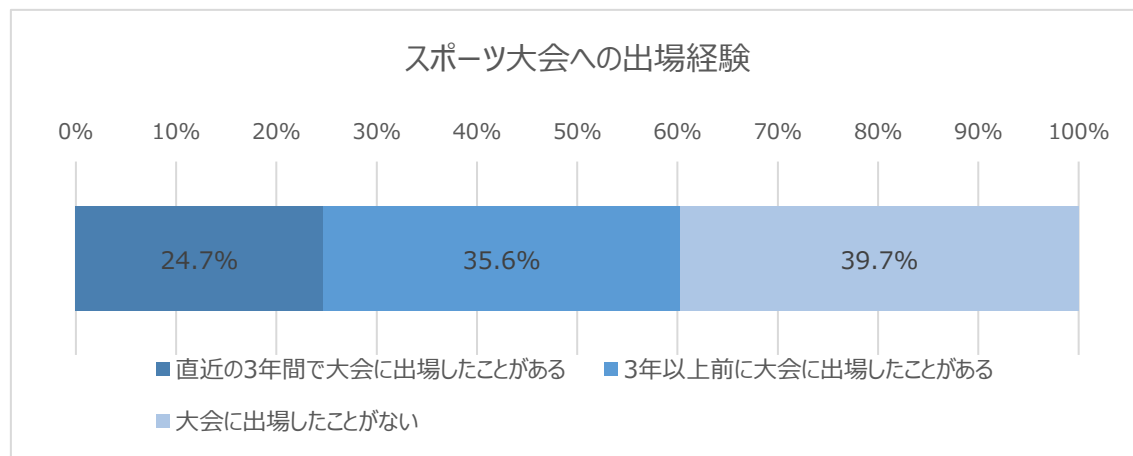
n = 199



(17)問4-1 学校の運動会の他に、学校外でのスポーツ大会に参加した経験の有無について教えてください。(当てはまるもの一つを選択)

「大会に出場したことがない」が、39.7%、「3年以上前に大会に出場したことがある」が35.6%、「直近の3年間で大会に出場したことがある」が、24.7%となった。

n=73



[具体的な運動・スポーツ名] 代表的なものとして、以下が挙げられた。

マラソン（16件）、陸上競技（14件）、水泳（12件）、フライングディスク（10件）、立ち幅跳び（6件）、砲丸投げ（6件）等

[出場した大会名] 代表的な種目について、以下のような大会名が挙げられた。

マラソン：東京マラソン、角島マラソン、海峡マラソン、長野おふせハーフマラソン、四万十川ウルトラマラソン、高松ファミリー&クォーターマラソン in AJI、霞ヶ浦マラソン、宮崎太平洋マラソン、青島マラソン、日本盲人マラソン大会（小田原）その他視覚障害者マラソン大会、田沢湖マラソン、新潟マラソン、富山マラソン、常願寺マラソン、いっちゃん！リレーマラソン、堺市マラソン大会

水泳：近畿盲学校水泳大会、北海道身体障害者水泳大会、ロングディスタンス水泳大会

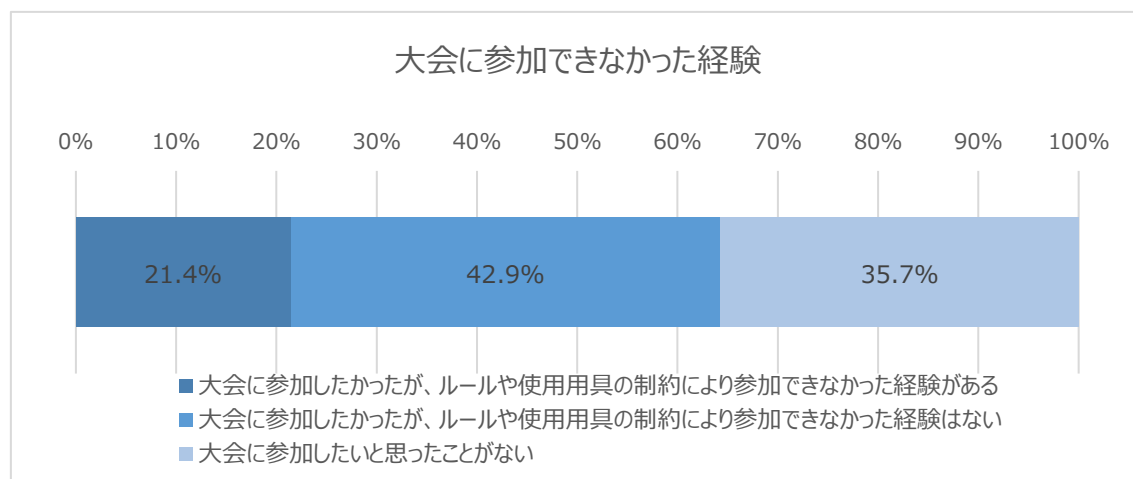
フライングディスク：あいち障害者フライングディスク競技大会、全国障害者・高齢者フライングディスク競技大会

陸上・その他：神戸市身体障害者スポーツ大会（王子陸上競技場）、ひょうごdbオリンピック、障害者スポーツ大会、レインボーピック、東京都障害者スポーツ大会、奈良県身体障害者スポーツ大会、札幌市身体障害者スポーツ大会、岐阜県身体障害者スポーツ春大会、全国障害者スポーツ大会、富山県の障害者スポーツ大会、関東地区盲学校陸上大会、その他障害者スポーツ大会

(18)問4-2 日常的に行っている(または以前行っていた)運動・スポーツ等について、大会に参加したかったものの、ルールや使用用具の制約により参加できなかった経験はありますか。(当てはまるもの一つを選択)

「大会に参加したかったが、ルールや使用用具の制約により参加できなかった経験はない」が、42.9%、「参加できなかった経験がある」は21.4%となった。

n=28



[制約の具体的内容]

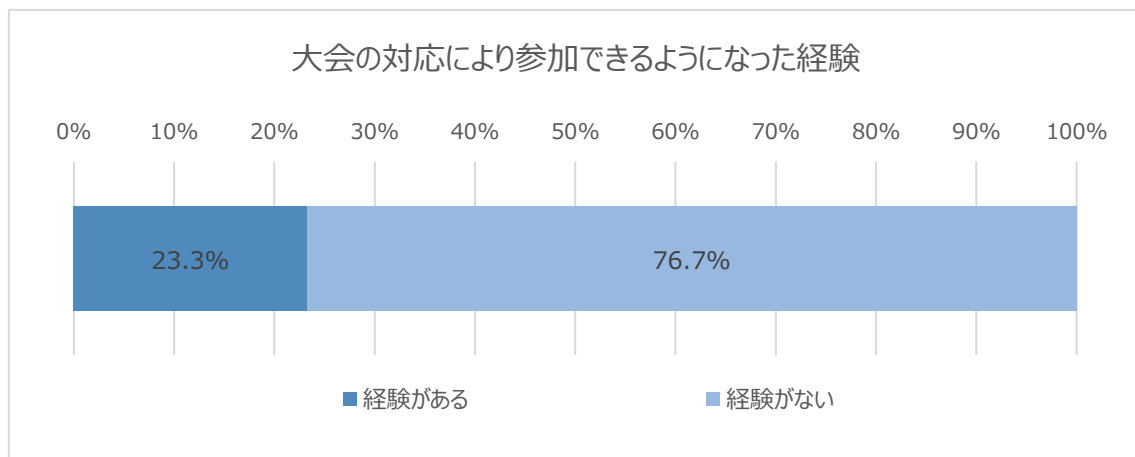
以下の回答があった。(基本的に原文のとおりとしているが、個人が特定されかねない記載については、文意を損ねないよう配慮し、匿名化・削除を行った。)

- ・ 障害者団体フライングディスクの部で視覚障害なのに晴眼者との区分がない為、ハンディー差がついて予選が通らなかった。
- ・ 身長や手足の長さが不足していた。
- ・ 申し込み等の諸手続きが困難
- ・ 学校時代は他校(特支)の運動会の参加プログラムや障害者スポーツに参加して玉入れのまねごとなど無理なく参加プログラムに誘う。勝負→勝ち負け、みたいなルールがあまり理解できていない。
- ・ 施設として参加できなかった。個人的に行くことが出来なかった。
- ・ 全国障害者スポーツ大会で視覚部門、聴覚部門合併になっているためにできるだけ盲ろう部門設けてほしいです。
- ・ 盲ろう者のため、1人での移動が出来ないため、通訳・介助員が必要ですが、競技も通訳・介助員が必要ですか。一般の審判員では、コミュニケーションが通じないため大変困りました。
- ・ 盲ろうに合った種目がない。円周走、フライングディスク、ボッチャ、ユニカール、ボスタクング、太極拳・ヨガ(型、姿勢を教えられる人)
- ・ ふだんの成績で大会の出場者を決めているからです。

・
(19)問 4－3 日常的に行っている（または以前行っていた）運動・スポーツ等の大会に参加しようとした際に、初めはルールや使用用具の制約により参加できないと思ったものの、大会側の対応により参加できるようになった経験はありますか。（当てはまるもの一つを選択）

「経験がない」が 76.7%。「経験がある」が 23.3%であった。

n=43



参考）自由記述欄から得られた内容

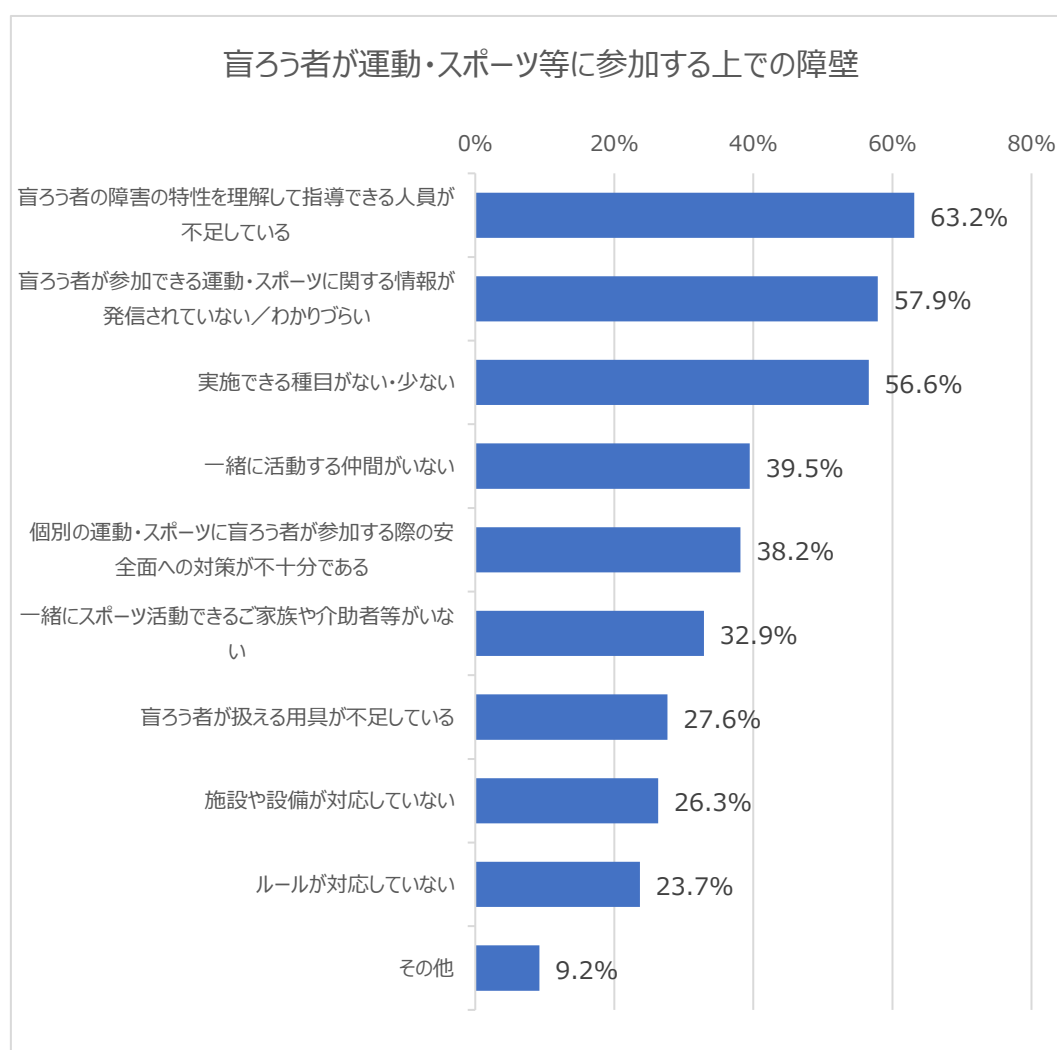
- ・ ブライドテニスで、サーブ時の合図がわかるように協力してもらった。支援者（通訳・介助者）の同行を認めてもらった
- ・ 100m 走には伴走者を付けられるが、50m 走には付けられないと言われた。配慮を求めると、伴走者なしで、走れるよう配慮していただきました。それはスタートの合図は肩をたたいてもらうこと。それから白緯線があまり見えていないので左側に五人右側に五人ならんでもらうことで白い線のかわりということで配慮してもらいました。

(20)問5-1 盲ろう者の運動・スポーツ等への参加を促進する上で課題となっていると感じる点を教えてください。(当てはまるものを全てを選択)

「盲ろう者の障害の特性を理解して指導できる人員が不足している」が最も多く 63.2%、次いで「盲ろう者が参加できる運動・スポーツに関する情報が発信されていない／わかりづらい」が 57.9%、「実施できる種目がない・少ない」が 56.6%であった。

「その他」の回答例：「参加手続きが単独では無理」、「型、姿勢を学びたい。指導者がいない。」、「競うより高齢者も楽しめるような活動がほしい」、「盲ろう者への理解がない人が多かった。」、「施設までの往復、施設内の移動などスポーツ実施中以外の補助者（サポート）が少ない。」、「スポーツに対応できる通訳・介助者の養成や派遣をしてほしい」

n=76



(21)問5-2 これまで実施してきた具体的な運動・スポーツへの参加にあたり行った工夫、周囲から受けてよかったサポートがあれば教えてください。

以下の回答があった。(基本的に原文のとおりとしているが、個人が特定されかねない記載については、文意を損ねないよう配慮し、匿名化を行った)

- ・ 周囲の方が、本人がたのしくなるために一緒に盛りあがって下さったり、障害(個別)について、配慮事項など事前に確認して下さり情報共有ができたこと。
- ・ 配慮について特別視することなく皆で楽しくすごすことだけを考えて下さったこと(気持ちなどに障害に対する色眼鏡がなかった)。使いやすく改造したのりものなどがあったこと。
- ・ ランニング:伴走者の動きがわかり易いように手作りの伴走ロープを作った。口頭での指示だけでなく、サインを決めて伴走者の手に直接触れて、サインを受けとる。
- ・ フライングディスク:ディスクの方向(状況、様子)を背中に大きく書いてもらう、予めサインを決めておく。スローイングエリアまで慣れている通訳・介助者に移動介助、通訳を受けられるのは安心して試合に臨めるのはよかった(競技場内まで入場できた)。自分の状況を把握できたので(状況説明があった)落ちついて試合に臨めた。競技直前まで通訳介助者のサポートがあった。
- ・ 柔道を行う時は組んでから開始となる。練習や試合中も相手と離れた時は肩をたたくなどの合図で再度取り組みができるようにしている。
- ・ 声かけ、あいさつ
- ・ 手引、スタート合図(水泳)
- ・ 卓球台の上に体をもたれさせた状態で卓球をすると、音のひびきでわかりやすかった。卓球台と体を離さないようにしていた。
- ・ クライミングをする時、仲間に登る壁の形(斜面の向きなど)や難度の違いなどを教えてもらってから、自力で登っている。初めて登った頃は、バイブレーターを使って、登っている時に、ホールドの位置を伝えるために、右、左、上といった合図をしてもらった。今は、慣れてきているので、登る方向は自分で判断しながら自力で登っている。
- ・ 水泳で、スタートは肩をたたいて合図してもらい、ターンの時は長い棒で私の頭を軽くたたくように合図してもらっている。"
- ・ スタートの時やターンの時に合図をしてくれた。
- ・ ブライドテニスで、サーブ時の合図がわかるように協力してもらった。支援者(通訳・介助者)の同行を認めてもらった
- ・ ガイドヘルパーがいろいろ配慮してくれるので、不便はなかった。
- ・ マラソンでは伴走者が一緒に走ってくれたことで安心して走ることができた。
- ・ ボッチャを例に初回から同行していただいた要約筆記者(介助員ではない)が親身に手とり足とりして教えてくれ、視力が落ちた時も楽しくできた。行動のできる介助員の養成が必要と思う。ただ道案内するだけでは身体障害者は、スポーツはもちろん体を動か

すのは無理。

- ・ 目がみえにくいのですが、触覚等で手助けをしてもらった。
- ・ ルールを詳しく説明してくれた。
- ・ 町の体育・スポーツジムにある機械を通訳者と一緒にやってよかった。
- ・ 盲ろう者が卓球する時に球の音が聞こえない。その時に左肩をたたいて合図してもらった事がうれしかった。
- ・ 伴走者が、手話（触手話）をできる人だったので、ルールの説明も全て伝えてもらえたり、事前に送付される資料も手話で説明を受けることができた。（ただ、家が遠いため練習を一緒にすることができない。そこは残念。）
- ・ 自分の特性を説明し、簡単な手話を覚えてもらったり書いてもらったりしている。
- ・ 自分の特性（見えにくい、聞こえない）を伝え、手のひらに書いてもらうことで、活動に参加させてもらっている。個人練習は通訳介助を受けて行っている。
- ・ 若い頃マラソン大会に参加、その際伴走者に助けて頂きました。
- ・ 伴走者に指点字や指文字（他に伴走者との間で合図を決める）の勉強をしてもらって実施中にそれでコミュニケーションをする。
- ・ 円周走（広場に杭を打ちロープを張って、それを持って杭を中心にグルグルまわってトレーニングをした）の実施。
- ・ ろう者と一緒に行動する（手話で話せる）。ろう学校の先生にも協力してもらった。
- ・ サークルの方で伴走車を見つけてもらったり、知人から声をかけてもらった。
- ・ 手話が出来る伴走者にサポートしてもらえた

(22)問6 盲ろう者のスポーツ実施に関し、お気づきのこと、お感じのことなど、ご意見等ありましたら、ご自由にご記入 ください。

以下の回答があった。（基本的に原文のとおりとしているが、個人が特定されかねない記載については、文意を損ねないよう配慮し、匿名化を行った）

- ・ 障害者国体フライングディスクの部で視覚障害者と晴眼者の区別が現在無い状態です。公平なルール推進のため全国フライングディスク協会に、全国盲ろう者協会から視覚障害者と晴眼者の区別をつけて頂く様粘り強く働きかけて欲しいです。このルールを変えれば競技者はもっと増えると思います。
- ・ 父は88才。スポーツはできないですが、ウォーキングや散歩は楽しめたらと思います。中々介助や見守りのヘルパーさんがいなくて残念でした。
- ・ 障害が進むタイプなのでできないことが増えています。ひとつでもどなたかと一緒にできれば楽しめる性格なので選択肢が増えたら嬉しいです。
- ・ 障害をもっている子どももみんな頑張っていると思う。
- ・ 同じ障害者（盲ろう者）の中から参加できるが、他の障害者の中では難しいと思う
- ・ そもそも他の方と同じように体が動くわけではない（重複障害がある）ので、「スポー

- ツ」を楽しめるかどうか分からない。どちらかというと、ブランコやだっこが好き
- ・ フライングディスクに関し、輪の中に入れる時に、視覚障害がある人となない人のグループを分けて戦えるようにしてほしい（障害者団体）
 - ・ 私が盲ろう者になって7年。視覚で80%プラス聴覚でほぼ情報は皆無、加えてしゃべれない。ではどのようなスポーツをする？7年間の体験で、残された触覚を使うしかない。さわる、体で感じるスポーツを考案してほしい。例えばロープを使用した引っ張り合い。ロープを引く、ゆるめるして足が動けば負け。体験できるスポーツがほしい。
 - ・ 盲ろう者専用ダンDEM自転車を楽しむ場所を増やしてほしい。ポッチャゲームを楽しみたい。盲ろう者専用ボウリング場を増やしてほしい。中高年者にも普通に力を入れている体操を増やしてほしい。
 - ・ 障害とひとくくりで利用曜日や時間帯が決まっている。午前是一般の方々も利用、午後は予約して利用している。遅刻もドタキャンもしてしまう事があるが、いつも柔軟に対応して下さっているのがありがたい。20年以上前横浜を訪れた事があった。「ライトセンター」視覚障害者のスポーツや健康アドバイス？をして下さっていたような…。当時すごく感動した。あわでプールのメールをお知らせしたり、トイレガイドが音声だったり。もしかしてライトセンターは難しくて月1度とか2度は視覚障害、盲ろうも含めてスタッフか介護者について説明してくれたりしてくれたらいいなあー。呼べば来てくれるけど、見えない訳でアイコンタクトもとりにくいですね…。
 - ・ 水中での動きを伝える時、補聴器をはずしているのでもしかり伝える事が難しい。耳元で大きな声で伝えると伝わる事もあるが、情報を伝えながら動きを伝える事がもう少し同時に伝えられると、活動の幅も広がるのではないかと感じる。家族とのウォーキングの際、四季を感じながら夏場は涼しい時間を選んで歩いている。歩いていると地域の方とも顔なじみになり、あいさつ等声をかけてもらったり、夏場はきゅうりのおすそ分けを頂いて昼食に食べたりして地域の方との交流の場にもなっている。グラウンドを1周するごとに手引きの手を右側、左側とかえながら1周終わった事が感じやすいように工夫している。歩きながらコミュニケーションの場になっている事も多い。（作業所での事や、次の外出について等）冬場は冷たい風を感じながら、台風の接近前は危険の無いように強い風や向い風、おい風等を肌で感じながら季節のうつり変わりや、気象の変化を体感して言語への深い理解につなげている。
 - ・ 幼児期にスポーツのひとつ前の段階として様々なあそび（体をうごかす）に触れる機会をもてる事がまず大切になってくるのだらうと思うのですが、なかなか理解ある施設に巡りあえないのが現状です。たとえばインクルーシブ遊具など、通常の遊具では簡単にあそべない子どもたちのためにもっと普及していくといいのかなと思います。体をうごかす事がまだまだみじゅくな乳幼児期のオモチャ、遊具は体の成長とともにあそべなくなってしまう。せっかくゆっくり成長していった運動機能がおいついてきたのにその頃にはもう体格にあわなくなってしまうという事が多かったです。

- ・ 小2ですが、3～400m 程しか歩けない為、なかなかスポーツにつながらない。ジャンプや鉄棒など出来るが、動作を教えることが難しい。全盲、難聴（言葉の理解は 1～2 歳位）
- ・ 自分は網膜色素変性症の末期症状の状態であり、しかも進行性でいつ失明するか解らないです。耳は補聴器で助かっていますが、見え方はグリーン、赤、黄色と変化しおまけにザラザラやまぶしい時、暗い時がありとても普通の人間の目とは思えない状態です。リハビリに通って最小限の運動はしていますが、時々トラックを思い切り走り回って見たいと思っています。幸い手足等体は元気です。
- ・ 我が家の子供は肢体不自由、盲ろう、知的障害と障害が重複しています。一般の方が使用する器具などはそのまま使用できませんが、少しの工夫で使うことはできます。「一般的なもの」に当てはめず、個々の使いやすい、楽しめる方法などをさがしていけると良いと思います。例) ボッチャ→ランプを使う。ボール→大きさを変える、重さを変える、素材を工夫する。にぎる器具→すべり止めをつけたり太さ細さを調整する。軽量のものを使う。
- ・ 盲ろう特に聴覚ベースのサポートに関して不十分だと思うことが多々ある。単に移動や物理的なサポートだけでなくコミュニケーションに於いてのサポートが足りないと思われる場面が多くあり、聴覚障害に対する理解をもっと深めて欲しい。
- ・ 「盲ろう」の種別がない。
- ・ 私は目とか耳とか悪いけど、車イス社交ダンスをやってみたいのですが、そういったイベントはありますか？ぼっちゃをしたいのですが、どこでできますか？またどういった手続きをすると参加できますか？
- ・ 基本的なこととして現在、「盲ろう」という障害が法的に認められていないことも 1 つにあると思います。法的に「盲ろう」という障害が社会的に認められれば、スポーツにかぎらず、色々な面で盲ろう者の世界も変わってくると思います。盲ろう者は、目と耳又、他の障害を併せ持っている方もいますが、触る、鼻、味覚にはびんかんな方も多いので、その様な感覚を利用したスポーツが工夫されれば、盲ろう者のスポーツの世界も幅が広がってくると思います。
- ・ 私の母が盲ろう者ですが、母がまだ若く元気な頃はよくいっしょに歩いたりしていました。触手話で色々な話を歩きながら話したり、買い物等々していました。今、サークルでたまにボッチャなどしますが、実際ねらったりするスポーツは本人にとって楽しいのかわかりません。ストレッチなどは良いかもしれません。リンゴがり、畑のくさととり、つり掘でつりなどは楽しそうにされています。リンゴがり、山菜とりなどさわって収穫するものなど。
- ・ 2 人乗りの自転車があればよいと思います。介助者と一緒に乗れるので。
- ・ 交通の不便な地域に住む盲ろう者に対する支援（車が欠かせない）を厚くしてほしい。
- ・ ルールを覚えることが困難。気軽に継続できるといいなと思う。

- ・ 高齢の盲ろう者が出来るスポーツ、楽しみながらできる運動が希望。
- ・ スポーツ施設の関係者や審判官には、盲ろう者の事を理解して欲しい。又、盲ろう者が楽しんでスポーツができる環境を整えていただきたい。盲ろう者ができないスポーツは沢山あるが、盲ろう者と共にお互いに協力しながらスポーツを楽しんでいけたらいいと思います。
- ・ 受け入れてくれる場所、指導者の通訳等コミュニケーション等が出来る人が必要。通訳介助者がいないと活動は難しい。
- ・ 盲ろう者は通訳介助者が必要です。通介者不足でスポーツセンターに行けません。
- ・ 高齢者が集まって楽しめる運動会の機会がほしい。
- ・ マラソンが趣味。伴走者で手話ができる人が増えるといいなと思う。
- ・ スポーツをしたいけど高齢のためむずかしい。日常的に歩く事だけです。(雨の時はダメ) 通・介がいつもいるわけでないので一人では心配。
- ・ 前、ボウリングをやっていたけど今は見えにくくやらなくなった。ピンの辺りが見えないので大きな TV があれば良いなと思っている。
- ・ スポーツだけではなく、社会でも盲ろう者の方が認められ、活躍できるようになって欲しいです。
- ・ てんとう虫パートナーズの活動について、例えば練習が中止などの連絡方法は FAX ですが、FAX を持っている会員(てんとう虫の)が少なくなってきていて困っている。健常者のようにメール、ラインを習得できないのかと言われているが、むずかしい。
- ・ デフ・パラ等のスポーツ大会は開かれているが盲ろう者は無くスポーツ参加はしづらい。
- ・ 今現在は昔ほど運動をする機会が減ってきているので、週 1 度のランニングでは足りないので、家でできる筋力トレーニングやラジオ体操など毎日やるように心掛けています。
- ・ 盲ろう者も目標を持って頑張ったらいいと思う。
- ・ 自分の経験で、ある全国規模のスポーツ大会である都道府県の代表に選抜されました。面接の時「弱視ろう」と「盲ろう者向け通訳介助者」が必要と申し出ましたが、都道府県からは「予算の都合でむずかしい」との答えでした。交渉し、通訳介助者がコーチという形の条件で同行を認めてもらいました。でも、通訳介助者の実務時間は「1 日 8 時間」となっています。同行するのに 2 人体制が理想だと私は思います。2020 年コロナ禍の中練習に利用していたある地域の障害者スポーツセンターの利用条件が厳しくなり、自前予約、抽選になった時、抽選結果が判るのが利用日の数日前になり、盲ろう者は申し込みたくても申し込めませんでした。理由→落選した場合の練習場所の変更の連絡をするのに、メンバーたちに伝わりにくい。通訳介助者を確保するのに一週間前でないといけない状況。体育館を借りるのに人数の確保もむずかしい面もあり、都立公園でやりました。しかし公園によってフライングディスクはダメと言われたり、アクセス

の良い所はほとんど利用できず、出来そうな場所を探すのも苦労しました。盲ろう者たちは、見えない見えにくい、聞こえないで予約するのもひと苦労です。できたら盲ろう者が安心してスポーツの出来る施設を作ってくれたらすごく助かります。意外に盲ろう者たちに個人差はありますが、身体を動かすことが好きな人が多いです。自分もアーチェリーなどやってみたいという気持ちはありますが、情報が乏しいので動かずにいます。体験に参加しやすい環境を作ってくれることを望みます。

- ・ 「全国盲ろう者スポーツ大会」という大会を実施できたら、あらゆるスポーツにまつわる盲ろう者の社会参加の促進につながればいいと思います。盲ろう独自、またはそれぞれのニーズに合わせたルールで実施できればいいと思います。
- ・ 聞こえていたころはサウンドテーブルテニスやグラウンドソフトボール、フロアバレーボールなどができたが、聞こえにくくなりボールの音が聞こえないのでできるスポーツが少なくなったと感じている。
- ・ 去年の春ある大会に出場したとき、スポーツ協会関係の女性から「50m走にでるの？きけんです。あぶないからやめた方がいい」というふうにいわれました。それでもわたし一人で走りました。そういうこともあり、伴走が必要なのだとおもい、今年の春大会に伴走をつけるようにと求めました。するとスポーツ協会の男性が50メートルには伴走がつけられないが100メートルなら伴走つけられます。50メートルなら自分で頑張ってくださいと。そのとき伴走をつけるよう認めてください。工夫することで安心して競技に挑むことができるように合理的な配慮をしてくださいと手紙にかいてお渡ししました。理解してくれたかどうかはわかりません。でも伴走なしで、一人で走れるよう配慮していただきました。それはスタートの合図はかたをたたいてもらうこと。それから白緯線があまり見えていないので左側に五人右側に五人ならんでもらうことで白い線のかわりということで配慮してもらいました。⇒スポーツ協会のなかにめの病気を理解しておられるひとがやってくれたのです。おかげさまで新記録をだせたのですが全国規模の大会への切符もらえませんでした。残念におもいます。盲ろう者だからでしょうか？それとも配慮してくださいといったのもよけいにうるさかったのだろうか。国体の前で対面をよくしたかったからはずしたのだろうか。とあれこれおもいます。不公平なのだとおかんじます。公平にあつかってほしいですね。
- ・ 来年は佐賀県なので頑張っていけるようにしたいです。
- ・ スポーツする盲ろう者が少ない。盲ろう者だけのマラソン大会があれば良い。伴走者との交流できる場所があれば良い。
- ・ 盲ろう者が気軽にできるスポーツがまだまだ少ない。
- ・ 特にないが、そういう場所に出たことがないのでよくわからない。自分は、盲ろうの中では序の口と思っている。「コミユニカ」を読んでただただ想像をしている。
- ・ 最近、ウェアラブル指針字を使って情報を頼りにタンデムやマラソンを楽しむ人、砲丸投げを楽しむ人などそれなりの方法でスポーツを楽しんでいらっしゃる盲ろう者もい

るようです。大切なことは、個人での活動にとどまらず友の会などのつながりを作って情報発信していくことだと思います。情報発信しても、それが伝わらない盲ろう者もいると思います。伝わるための教育も必要ではないかと思います。

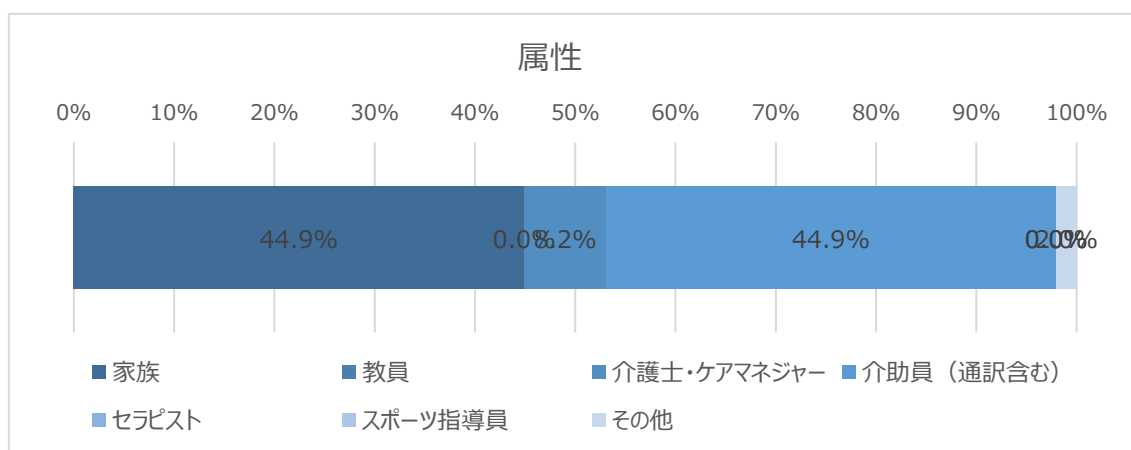
- ・ 情報が届くことで生涯にわたる趣味となると思うので、よりよく伝達されるようになるとよいと思う。

7.3 家族・介助者向けアンケート調査結果

(1)問 1－1 当事者用アンケートにご回答いただいた盲ろう者の方とのご関係について教えてください。(複数当てはまる場合、最も関わり方の深いものを一つ選んでください)

「家族、介助員（通訳含む）」が同数で 44.9%と最も多く、「介護士・ケアマネジャー」が 8.2%であった。

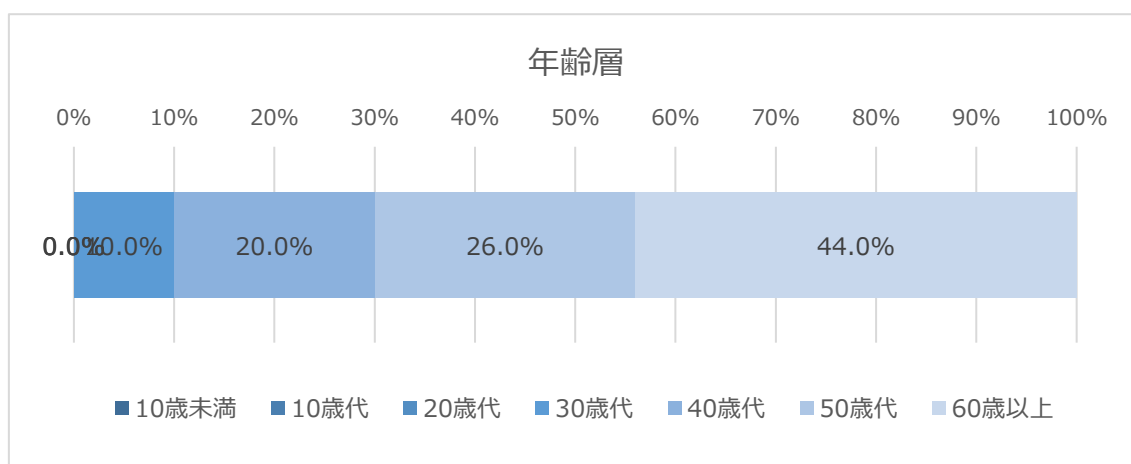
n=49



(2)問 1－2 年齢層を教えてください。(当てはまるもの一つを選択)

「60 歳以上」が 44.0%で最も多く、次いで「50 歳代」が 26.0%、「40 歳代」が 20.0%であった。

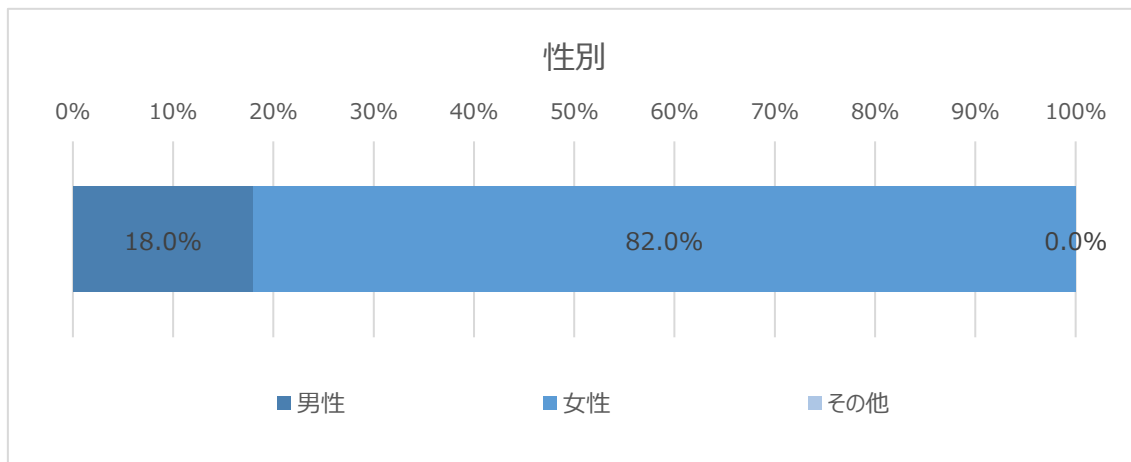
n=50



(3)問 1－3 性別を教えてください。(当てはまるもの一つを選択)

「男性」が 18.0%、「女性」が 82.0%であった。

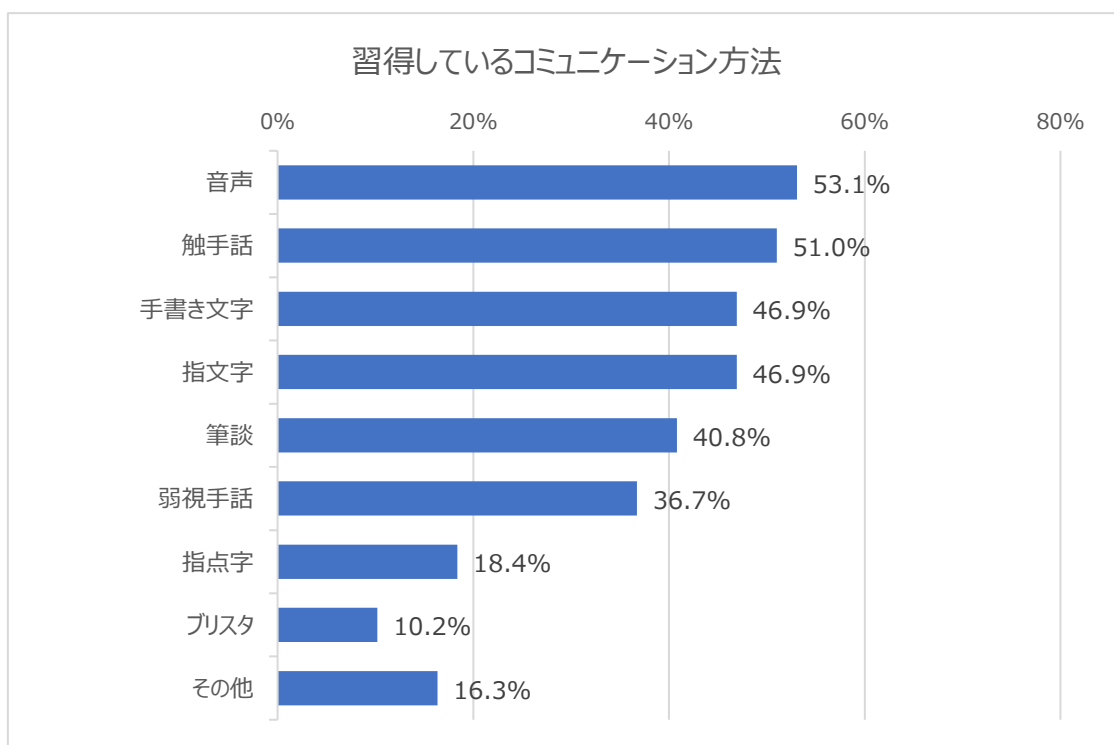
n=50



(4)問 1－4 回答者（ご家族または介助者）が習得しているコミュニケーション方法を教えてください。(当てはまるもの全てを選択)

「音声」が 53.1%で最も多く、次いで「触手話」が 51.0%、「指文字、手書き文字」がそれぞれ 46.9%であった。

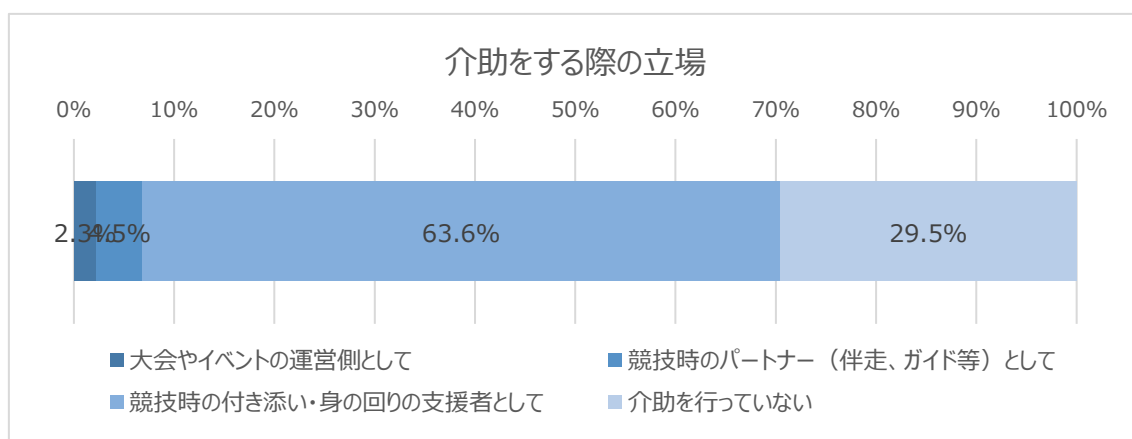
n=49



(5)問2-1 盲ろう者が運動・スポーツ等に参加する際に、どのような立場で介助を行っていますか（最も当てはまるもの一つを選択）

「競技時の付き添い・身の回りの支援者として」が63.6%で最も多く、次いで「介助を行っていない」が29.5%であった。

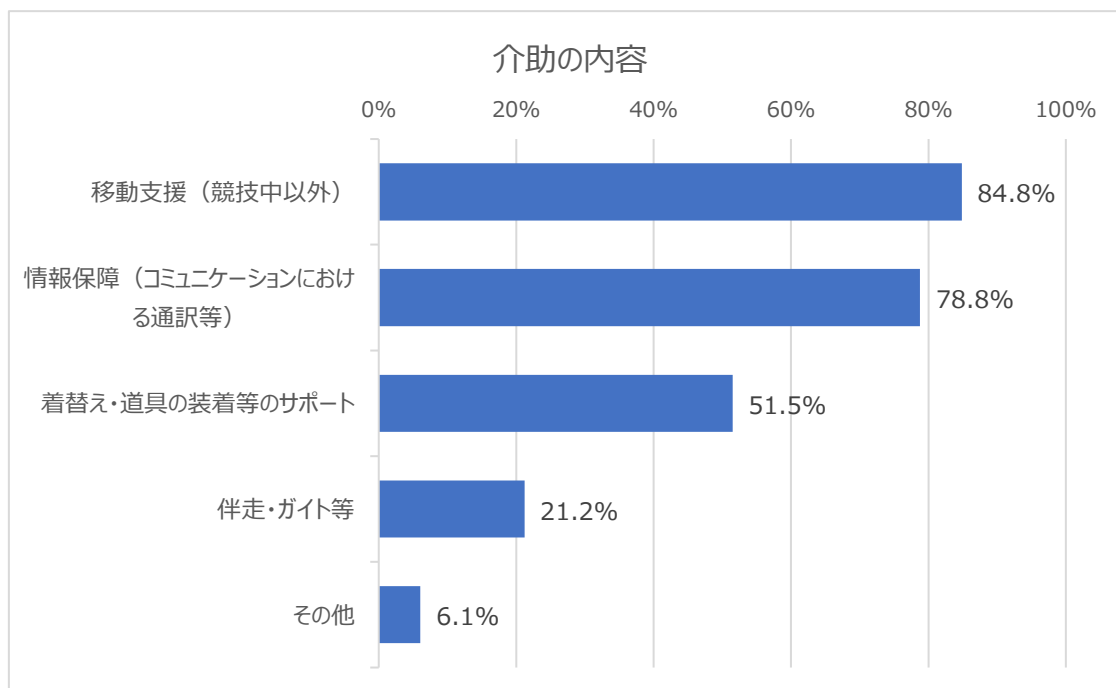
n=44



(6)問2-2 盲ろう者が運動・スポーツ等に参加する際に、どのような介助をしているか、教えてください。（当てはまるもの全てを選択）

「移動支援（競技中以外）」が84.8%で最も多く、次いで「情報保障（コミュニケーションにおける通訳等）」が78.8%、「着替え・道具の装着時のサポート」が51.5%であった。

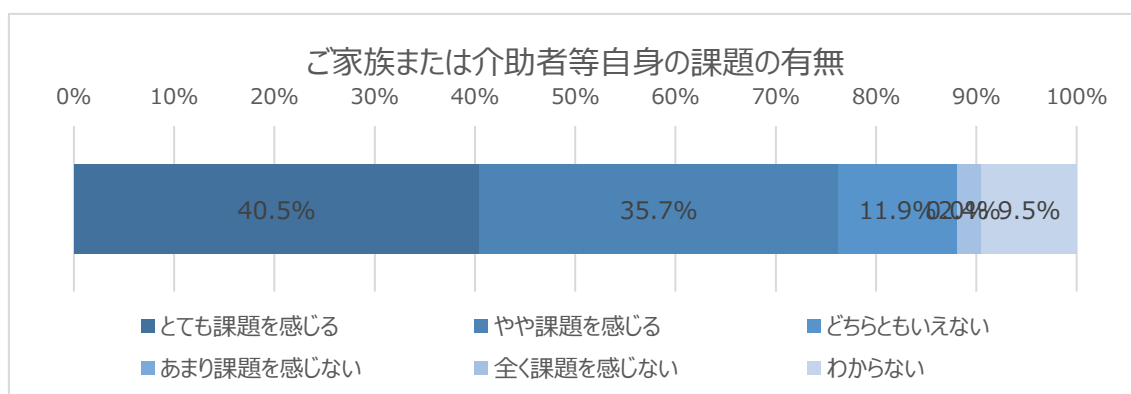
n=33



(7)問 3－1 盲ろう者の運動・スポーツ等の実施を介助する上で、ご自身に課題を感じますか。(当てはまるもの一つを選択)

「とても課題を感じる」が 40.5%で最も多く、次いで「やや課題を感じる」が 35.7%、「どちらともいえない」が 11.9%であった。

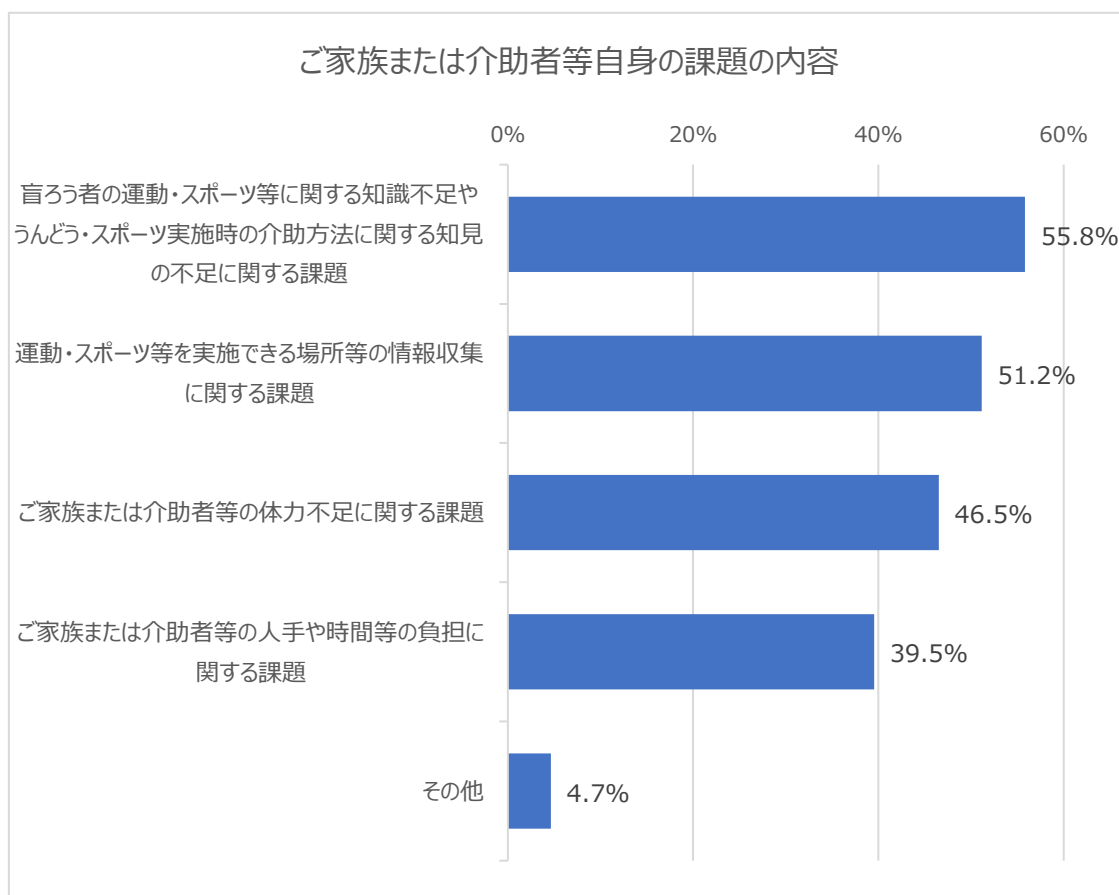
n=42



(8)問 3－2 どのような点に課題を感じますか。(当てはまるものを全て選択)

「盲ろう者の運動・スポーツ等に関する知識不足や運動・スポーツ実施時の介助方法に関する知見の不足に関する課題」が 55.8%で最も多く、次いで「運動・スポーツ等を実施できる場所等の情報収集に関する課題」が 51.2%、「ご家族または介助者等の体力不足に関する課題」が 46.5%であった。

n=43

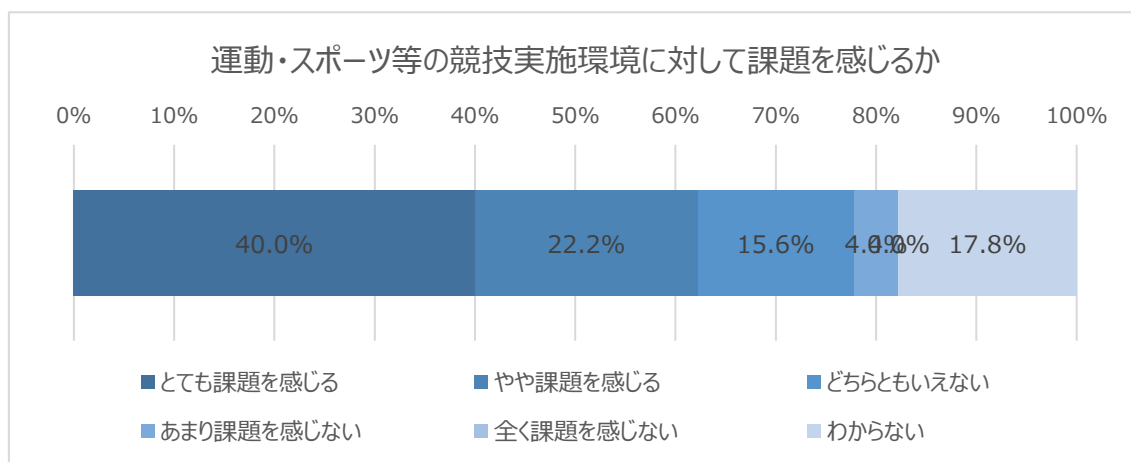


「その他」の回答例：競技の障害者区分について

(9)問4－1 盲ろう者の運動・スポーツ等の競技の実施環境に対して課題を感じますか。
(当てはまるもの一つを選択)

「とても課題を感じる」が40.0%で最も多く、次いで「やや課題を感じる」が22.2%、「どちらともいえない」が15.6%であった。

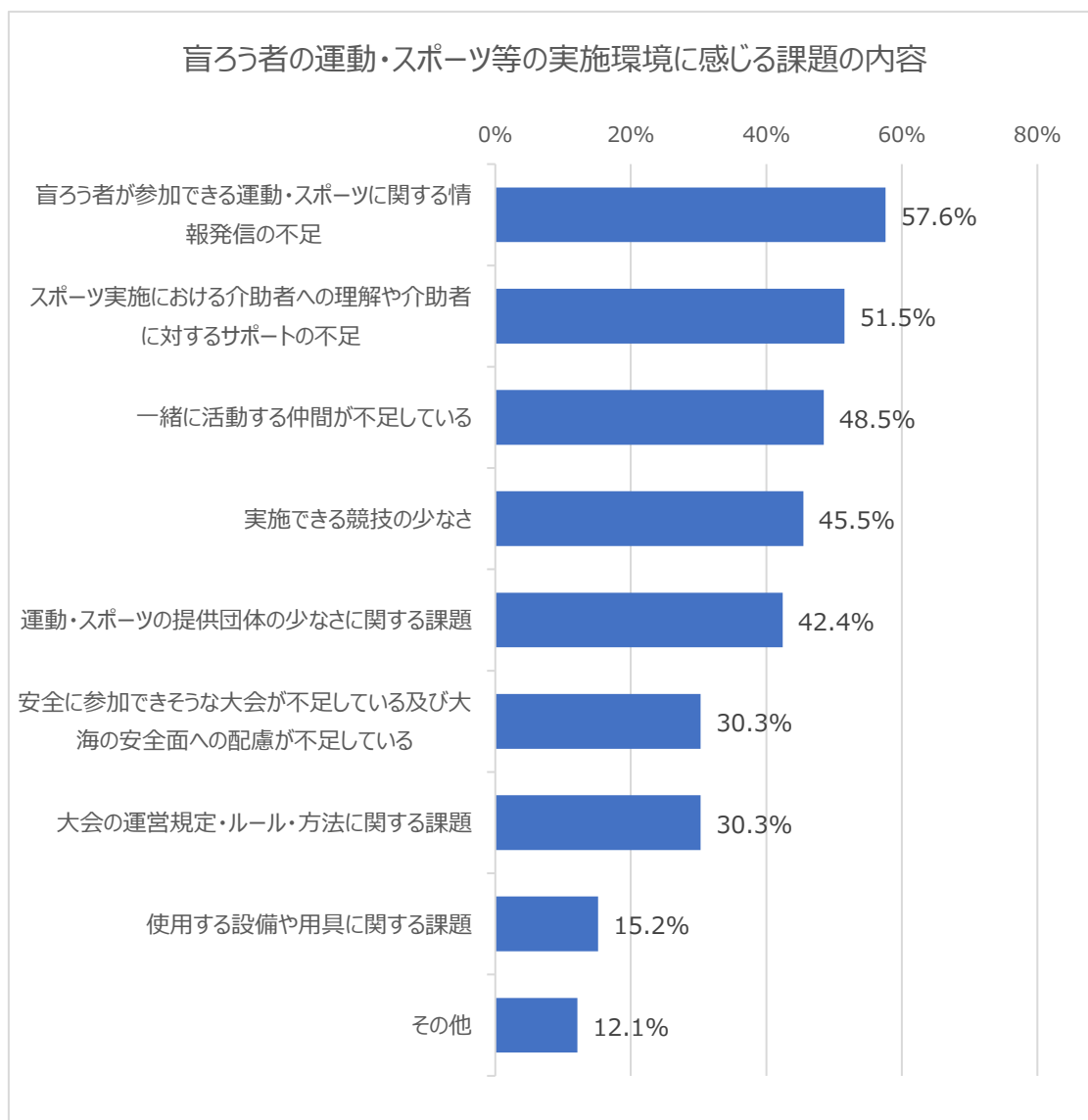
n=45



(10)問4－2 実施環境のどのような点に課題を感じますか。(当てはまるものを全て選択)

「障害特性を理解して指導できる人材の不足」が66.7%で最も多く、次いで「盲ろう者が参加できる運動・スポーツに関する情報発信の不足」が57.6%、「スポーツ実施における介助者への理解や介助者に対するサポートの不足」が51.5%であった。

n=33



「その他」の回答例：「介助している家族が競技場フロアに入れない事がある。」、「安全に体を動かすことができる場所や場面の不足。周囲の方の理解の深まりが必要。」、「支援者の担い手」

(10)問5 これまで盲ろう者の方が実施してきた具体的な運動・スポーツについて、その運動・スポーツ等を行う場面で感じた「盲ろう者の参加の障壁」や、「障壁を超えるために行った工夫、周囲から受けてよかったサポート」があれば教えてください。複数ある場合は、それぞれについて分けてご記入ください。(3つまで回答)

複数回答のあった運動・スポーツについては、プール(水泳・水中ウォーキング)(4件)、マラソン(2件)、ウォーキング(2件)、フライングディスク(2件)があった。

主なコメント(一部要約)は以下表の通り。

運動・スポーツ名	盲ろう者の参加の障壁	障壁を超えるために行った工夫、周囲から受けてよかったサポート
プール(水泳・水中ウォーキング)	・ 周囲の人からの理解が足りないと違和感を抱かれる ・ コーチの指示が分からない ・ プールサイドからの手話が見えない ・ グループでの流れがつかめない ・ 保護者や通訳士がプールサイドに行くというのがスイミング側に伝わらない ・ 盲ろうという障害を理解してもらえず、障害者団体からも一緒に参加することを断られた ・ 排泄の失敗が多く、区民プールに通うことができなくなり、大人になった今はプールに入れていない	・ スイミングキャップに大きく「盲ろう者」と書いている ・ ご本人に自分の状態とコミュニケーション手段を職員に知ってもらうために施設宛てに手紙を書いた ・ 何度も塾側に障害や配慮や信念を伝えてプールサイドに通訳を入れられた。(ラミネートカード<情報カード>は使ってもらえなかった)保護者が通訳をしてスポーツに参加(体験)できた。動きの激しいものは見学できた。前もって情報カードを準備した ・ プライベートレッスン
マラソン	・ タイムと距離を伝えること ・ 慣れた(数回会っている)方の介助等だと安心だが初めての方とは難しい	・ タイムは1kmを何分で走るか事前に決めておく ・ 距離は1kmごと伝える ・ 上り下りの長さは、サインで決めておく
ウォーキング	・ 盲ろう者の見え方、聞こえ方がまちまちなので、個人に合わせた満足のいくウォーキングが出来ない ・ 参加者名がわからない	・ 何度か参加するうちにみなさんから名前を名乗ってくれるようになったこと
フライングディスク	・ フライングディスクの特にアキュラシー(輪の中に何回入れられるか)において、現在、視覚障害の有無の区分がない。明らかに不平等。大きな大会では視覚障害のハンデがないようなルール変更が	・ 直接、都、スポーツ協会または大会運営者に向けて要望を盲ろう者と共に提出し、競技中にも状況説明可となるルールの改善があった。まだ定着していない。

	必要。 ・ 盲ろうというへの理解不足、配慮の足りなさ。競技場内での状況説明の意味（必要性）を理解してもらえなかった。	
--	---	--

(11)問6 その他、盲ろう者の運動・スポーツ等の実施に関し、ご家族または 介助者等として、お気づきのこと、お感じのことなど、ご意見等ありましたら、ご自由にご記入ください。（当事者本人が感じていることではなく、ご家族または介助者等の視点からご意見ををお願いします。）

以下のような回答を得られた。

【家族】

- ・ 情報の取得にどうしても時間がかかるので一瞬できまったり変わったりするスポーツを一緒にすることの難しさを感じる
- ・ 弱視、難聴。 環境：バス停まで 1.5km あり。歩いて行けないこともないが毎回となると難しい。家族の車での送迎が必要。順応：初回～数回はそのスポーツ(例えばランニングとして)のルールや利用のし方を一緒に行うことで理解していくので初めは一緒に入会しなければならない。 課題：60 代の親は体力がない。 その他：母は定年を機会に家から 1.5km はなれたスーパーに隣接したところにあるカーブスに通いはじめた。少しでも身体を動かそうと考えたため。そしたら盲ろうの娘もできると思い、勧めてみた。若いので本当は嫌だったようですが、少し身体を動かしてほしいと母の思いを汲み見学、体験してくれた。30 秒毎、ミュージックに合わせ次のマシーンに移動するのですが、音がわからず、次の方にめいわくをかけることもありましたが、周りを見て動けるようになり、1 年以上続けています。利用のおばさん方からも声をかけられたりしながら小さな社会性も育っています。
- ・ もっとスポーツに参加したい。動きやルールにとらわれない、その障害者が出来るサッカーなり卓球なりが出来ると良い。（例：卓球、サッカー、バスケットディフェンス、オフェンスなど）支援者や活動の輪が広がってほしい。障害者スキーの道具（レンタルや介助の料金）が高い。塾、教室等での障害の理解がない所が多い。預かる方は「大丈夫です」といっても障害に関するノウハウがない。
- ・ 白杖を目印にも使用できず 2 人の介護者、情報保障？ガイド親と本人には 3 人体制で月 2～3 運動に同行する。こちら 65 才、日々の疲れもあって本当はだらりんしたい…が日頃の運動不足も重なって自分のためもある！とがんばる。3 人体制はヘルパーさん（生活介助可）、通訳介助員（通訳中心）、主人または私、車での移動、マイ車イスの準備、ペダルバギーの押し。いつかは車で送迎後に自分は休める時間となりますように。
- ・ 走る泳ぐなど、それさえも本人は理解できません。スポーツ以前の問題が大きい。
- ・ 「このスポーツがやりたい！」と思っても色々考えてしまいちゅうちょしてしまいま

す。結果的に障害者対象のスポーツの中から好みそうなものを選ぶことになりモヤモヤします。

- ・ 息子は20才で、健康のためにも、又、本人体力が余っている様子なのでスポーツをさせたいと親は思っていますが、知的障害もある盲ろう（弱視ろう）でルールを理解することが難しくまわりに迷惑をかけるのではないかという親の不安もありスポーツの機会がありません。体幹は弱いのですが、末端に力はいるタイプで（指先とか）つかんで登るジャングルジムやろく木などが子供の頃好きで、登ると降りてこないし、危険がわからないのでジャングルジムのてっぺんで手を離して立つなど介助する側が怖くて見ていられないことなどが多く途中から公園なども連れていけなくなってしまいました。上半身が筋肉質で何かできるスポーツはないだろうか・・・とずっと考えていましたが、わからずにいます。
- ・ 体を動かすことは好きですが、スポーツのルール等を理解することが難しいのでスポーツができないという現実がある。しかし盲ろう児が理解できるよう丁寧に何度も教えてくれるスポーツの指導者がいれば、スポーツをする機会ができるのではないかと思う。

【介助員（通訳含む）】

- ・ 障害者のためにこのようなアンケートを作って下さってありがとうございました。
- ・ 運動・スポーツを行う会場まで来られるよう、通訳介助者を増やす必要があると感じます。又、スポーツはプレイをするだけがスポーツでなく、通訳介助者を通じて、スポーツを見に行く、応援に行ってワクワクしてプレーヤーと一緒に、泣いたり、笑ったりすることもスポーツだと思う。そのためにも通訳介助者を増やすことを望みます。
- ・ フライングディスクの特にアキュラシー（輪の中に何回入れられるか）。現在、視覚障害の有無の区分がない。これはあきらかに不平等だ。遊びのゲームならいいが、競って順位を決め大会を進めていくような大きな大会では視覚障害のハンデがないようなルール変更が必要だと思う。
- ・ 盲ろう者の介助となると長時間になってしまうので、介助者が少ない。介助者の年齢が高いので体力的にも限界がある。又盲ろう者の認識が一般的ではないので（盲者、ろう者はわかるが重複となるとなかなかむずかしい）コミュニケーション方法も理解されず幅広い。盲ベース、ろうベースでまったく違って来るので外出する事すらままならない。家の中で閉じこもって生活している盲ろう者がたくさんいると思います。体を動かしたくても動かせない状況が多すぎる。
- ・ 盲ろう者が安心して楽しめる場所を作ってほしい。どうしても同じ県内の仲間と固まってしまうので各ブロック（近畿など）での交流の場を作ってほしい。介護者の年齢が高くなって来て体力に問題がある。なので軽いスポーツ（ラジオ体操）を作って頂けたらうれしいです。

- ・ 盲ろうという障害のみならず、その通訳・介助方法への認知、理解がまだなされていない。当時者ではなく、通訳介助者に対しての理解がなく、状況説明や通訳を個人的なおしゃべりと受けとられることがある。又、審判員が状況を伝えれば事足りると考えている審判員も多くみられる。又、はじめに出会った盲ろう者のコミュニケーション方法だけだと思い込み、その他のコミュニケーション方法に耳を傾けない運営側のスタッフもいる。
- ・ 私が担当している盲ろう者は毎日の買物（食料）に外出しています。又、プールにも出かけます。1年の内、気候の良い5月～9月位迄です。生活訓練等のお知らせがきても余り出たがりません。私としてはもっと外に出て交流してほしいと思ってます。

【介護士・ケアマネジャー】

- ・ 若い頃（20代）は水泳で障害者スポーツ大会に出られていた時もあった様です。その頃は耳は聞こえないが目は少し見えたそうです。40歳前に目も見えなくなり、盲ろう者となりました。現在は50代で週に3回交代で来られるヘルパーさんと30分さんぽ、20分バイクこぎ（動かない）10分体操をされています。その後は入浴です。スポーツはそれ位ですが一生懸命されています。
- ・ 本人さんのペースで活動をしている際、周囲の方の中には理解が進んでいない方や、状況に気づき難い方が居ることもある。とても好意的に接して下さる方も多数いて楽しく活動できる場面も多い。着替えるスペースを確保できる施設は助かる。トイレにて白杖を立て掛けるスペースがあれば助かる。手洗い場で台の端が濡れている時に服が濡れるので台の端の手前に少し離れた手すりなどがあれば濡れることが減りそう。音声アナウンスが流れるタイミングがもう少し早ければ助かる。通り過ぎた後にアナウンスが流れることもあるので。エレベーターのボタンの規格が統一されていれば触れた時に判りやすいかも。各種券売機の横にテーブル等、荷物を片付ける時に使えるスペースがあれば。歩いたり踏んだりして感覚で楽しめるウォーキングコースが欲しい。
- ・ 居宅ケアマネをしています。年齢がお若いと高齢の方々と一緒にデイサービス（リハビリ）などへの参加が消極的になられることが多いです。またご利用時も集団での体操やレクリエーション（うた体操的なものなど）個別での声かけや配慮が必要となります（人手の問題など）。ご本人様も周囲に気をつかわれるなど様々な面で難しさを感じています。

7.4 参考文献

7.4.1 盲ろう者とは

- i. 社会福祉法人全国盲ろう者協会ホームページ、「盲ろう者とは」 <http://www.jdba.or.jp/deafblind/top.html>
- ii. 厚生労働省 平成24年度 障害者総合福祉推進事業「盲ろう者に関する実態調査 報告書」p26
- iii. 独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所「視覚と聴覚の両方に障害のある 盲ろうの子どもたちの 育ちと学びのために―教職員、保護者、関係するみなさまへ―」p2
- iv. 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所「特別支援学校における盲ろう幼児児童生徒の実態調査結果について

(速報版)」より作成

- v. 視覚聴覚二重障害の医療 ～盲ろう医療支援情報ネット～<https://dbmedj.org/manual/chapter/ch1-2/index.html>
- vi. 福島智(1997)「盲ろう者とノーマライゼーション: 癒しと共生の社会をもとめて」明石書店

7.4.2 盲ろう者の身体的・精神的特徴に関する調査

- ・ 前田 晃秀・廣田 栄子 (2016)「高齢期の視覚聴覚二重障害者(盲ろう者)の障害程度とコミュニケーション状況に関する全国実態調査」Audiology Japan, 2016, 59.6: 632-643.
- ・ 北野 幹夫・足立 啓 (2013)「盲ろう者の屋外歩行の現状と課題」日本建築学会技術報告集 第 19 巻 第 41 号, 321-324, 2013 年 2 月
- ・ 柴崎 美穂・福島 智 (2012)「盲ろうという障害が社会参加にもたらす影響: 途中で盲ろうとなった女性 A さんのライフストーリーから」コミュニケーション障害学/『コミュニケーション障害学』編集委員会 編 29.2 (2012): 130-139
- ・ 柴崎 美穂・田幸 勇二 (2005)「成人盲ろう者の立場から一学校生活を振り返って思うこと一」盲ろう教育研究紀要 7, 2005 年 6 月, pp.40-41.
- ・ 筑波大学付属盲学校 視覚障害教育研究協議会 資料集 1 「盲ろう教育について」平成 16 年 2 月 21 日
- ・ 筑波大学付属盲学校 視覚障害教育研究協議会 資料集 2 「盲ろう教育の実践報告(中学 1 年次)」平成 17 年 2 月 19 日
- ・ 筑波大学付属盲学校 視覚障害教育研究協議会 資料集 3 「各教科別における盲ろう教育の現状とその課題」平成 18 年 2 月 18 日
- ・ 筑波大学付属盲学校 視覚障害教育研究協議会 資料集 4 「中学部 3 年間における盲聾教育研究のまとめ-各教科の実践を通して-」平成 19 年 2 月 17 日
- ・ 筑波大学付属盲学校 視覚障害教育研究協議会 資料集 5 「高等部における盲ろう教育研究-各教科の実践を通して-」平成 20 年 2 月 16 日～17 日
- ・ 筑波大学付属盲学校 視覚障害教育研究協議会 資料集 6 「盲学校における盲ろう教育」平成 21 年 2 月 14 日～15 日
- ・ 筑波大学付属盲学校 視覚障害教育研究協議会 資料集 7 「視覚特別支援学校における盲ろう教育」平成 22 年 2 月 20 日～21 日
- ・ 筑波大学附属盲学校 盲聾教育研究-中学部 3 年間のまとめ- (2004 年 4 月～2007 年 3 月)
筑波大学附属盲学校 普通科・音楽科 盲聾教育プロジェクト

<海外文献>

- ・ Pamela Haibach-Beach. (2021) Defablindness and movement, MOVEMENT AND VISUAL IMPAIRMENT-Research across Disciplines-, Routledge, 169-179. (中田 英雄 監訳, 2023, 「視覚障がい者の身体運動科学—学際的研究—」市村出版.)
 - Lieberman, L.J., & Haegele, J.A. (2019) .Teaching children who are deafblind in physical education, physical activity and recreation. In. J. Ravenscroft(Ed.), The

Routledge handbook of visual impairment (pp.175-188). London: Routledge.

- Imel ,G. E., Slavin, L.J., Hartshorne, TS., & Kanouse, S.K. (2020) .Participation in and barriers to recreation participation in CHARGE syndrome. *Palaestra*, 34(1), 38-43.
- Haibach, P. S., & Lieberman,L. (2013) .Balance and self-efficacy of balance in children with CHARGE syndrome. *Journal of Visual Impairment & Blindness*, 107(4),297-309.
- Rabbani, A.H., van de Panne, M., & Kry, P.G. (2014) .Anticipatory balance control. *Proceedings of the Seventh International Conference on Motion in Games*, pp.71-76.
- Issekutz, K.A., Graham, J.M., Jr., Prasad, G., Smith, I.M.,Blake, K.D (2005) .An epidemiological analysis of CHARGE syndrome: Preliminary results from a Canadian study. *American Journal of Medical Genetics Part A*, 133A, 309-317.
- Lieberman, L.J., & MacVicar, J. (2003). Play and recreation habits of youth who are deafblind. *Journal of Visual Impairment and Blindness*, 97(12), 755-768.
 - McInnes, J. (Ed.). (1999). A guide to planning and support for individuals who are deaf-blind. Toronto: University of Toronto Press.
- Arndt, K.L., Lieberman, L. J. & Pucci, G. (2004). Communication during physical activity for youth who are deafblind. *Teaching Exceptional Children Plus*, 1(2), Article 1.
 - Lieberman, L.J., & MacVicar, J. (2003). Play and recreation of youth who are deafblind. *Journal of Visual Impairment and Blindness*, 97(12), 755-768
 - Lieberman, L. & Stuart, M. (2002). Self-determined recreational and leisure choices of individuals with deaf-blindness. *Journal of Visual Impairment & Blindness*, 96(10), 724-35.
 - Lowry, S.S., & Hatton, D.D. (2002).Facilitating walking by young children with visual impairments. *RE:view*, 34(3), 125-133.

本報告書は、スポーツ庁のスポーツ振興事業委託費による委託業務として、《株式会社エヌ・ティ・ティ・データ経営研究所》が実施した令和5年度「障害者スポーツ推進プロジェクト（実態把握が十分でない障害種の方のスポーツ実施に関する現状把握調査）」の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等にはスポーツ庁の承認手続きが必要です。